
チャンス！

よしなが あこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャンス！

【Nコード】

N4219A

【作者名】

よしなが あこ

【あらすじ】

剣の腕前は一級品、頭も切れる生粋の冒険者チャンス。彼と四人の仲間たちが旅先で出会ったのは、かつて「勇者」と呼ばれていた、無敵の戦士の一人。哀しみと絶望に彩られた、その依頼とは・・・

ブーベルデールの港町

溢れんばかりの緑、悠々と流れ行く大河。遠くに連なる頂は雲間から、はにかむかのように見え隠れする。微笑みかける陽射しは、すべての生きとし生けるものに、無限の恵みを与えてくれる。

ここは南、豊穡の大陸デュファ。色とりどりの羽を持つ鳥たちが飛び交い、大振りな汁気たっぷりの果実がたわわに実るその地は、まさに楽園の名に相応しい。豊穡を司る女神エーラが特に信仰され、大陸のそこかしこに大小の神殿が点在している。

「・・・だつてさ。」

地図をたたんで、青年がつぶやいた。

定期船がついたばかりの港は、様々な人種たちでごった返し、立ち並ぶ露天商の威勢のいい声が、旅の情緒を殊更に盛り上げる。

「ま、観光案内としてはこんなもんだろう。取り敢えず街を見て歩こうぜ。」

筋骨隆々だが、さして大男でもない、色黒の青年は笑う。その腰に吊した長剣の使い込まれた様を見れば、彼が歴戦の冒険者であることが容易に分かる。世界で最もよく見ることのできる、エストナ人の剣士だ。

「さあて、このチャンス」ダグのめがねにかなうような、冒険のネタが転がってるといいがな。」

「きつとあるさ。何たってこのデュファ大陸にや、豊穡の女神の遺跡がうなるほど眠ってやがるんだ。今からもう、このサージ」ナダ様の盗賊の血が騒ぎまくってるぜ。」

小柄な、チャンスよりも黒い肌を持つ男が、にやにやと笑う。大きく艶やかな瞳は黒目しかなく、彼の視力が桁外れであることを連想させる。五感の鋭さと俊敏な動作で有名な、バンタム人の盗賊だ。

「・・・遺跡荒しはあまりやりたくないですね。」

ぼつりとつぶやいたのは、背の高い、謎めいた表情の、麗しく柔らかな葡萄酒色の髪の子。一見して弱々しく見えがちなその出で立ちに似合わぬ、重厚な槍を携えている。術を駆る能力に長けた、聡明なアルル人の神官戦士だ。

「神々の遺跡には呪いが付き物です。それも素晴らしく強力だね。

万一、神の怒りに触れて呪われても知りませんよ。私、マーティ」

ノヴァの力では、太刀打ちできません。」

「高位神官マーティの力が及ばないなら、あたしだって無理だわ。

でもこのノーマ」シュリーゲンの名にかけて、呪いを確実に関知することはできるわよ。」

豊かな胸を張って言い切るのは、頭に目も覚めるような蒼の布を巻いた、美貌の女。くびれた腰に様々な短剣を幾重に吊し、胸元には何かの紋様を彫り込んでいる。そして何より目を引くのは、彼女の背に生えた小振りな翼である。そして飛べこそせぬものの、天の人の名残を背にするファイファス人。彼女はそのファイファス人の精霊使いだ。

「ねえねえ、それより早くどこかで、美味しいものでも食べようよ。二十日以上もずっと船の上だったのよ、しかもあの忌々しい嵐！まずい食事が、なおさら喉を通りやしなかったわ。このエキシィ」
「オーエン嬢にふさわしいご馳走があるといいけど。」

小柄だが、ふるいつきたくなるような肉感的な体を、軽鎧で惜しげもなくさらしている、茶目っ気いっぱいの子。大きく尖った耳、そして細くしなやかな尾を持つ、最も謎めいた古代種、アルファードーラ人。彼女はそのアルファードーラ人の魔術師だ。

今ではお互いが、かけがえのない仲間である五人だが、かつて彼等は、それぞれまったく違う世界に生きていた。

・・・

生粋の冒険者であるチャンスは、もともとは単独行動を好む男だった。

孤児ゆえに、常に戦いを強いられた日々、その荒んだ生活の中でも、チャンスは心を曇らせることなく、たくましく生き抜いてきた。寝る間も惜しんで練習した棒術では、チャンスの右に出る者はすでになく、すでに名戦士との呼び名が高かった。そして、汗水流して手に入れた一本の剣、その剣との出会いが、チャンスにさらなる無限の可能性を与えたのだ。名剣士チャンス、彼がそう呼ばれるまで、さして時間はかからなかった。

そのチャンスの腕っ節と男気に惚れ込み、盗賊団幹部の座を捨てたのがサージだった。駿足、機敏、悪知恵。三拍子見事に揃った盗賊サージは、その当時名を馳せていた盗賊団に入り暗躍していた。裕福さが裏目に出た街人たちは困り果て、街に立ち寄った旅の途中のチャンスに、その盗賊団の壊滅を依頼したのだ。チャンスの存在を知ったサージは、チャンスに様々な罠を仕組み、刺客をけしかけた。だがチャンスはそのことごとくを見破り、それらを見事蹴散らして見せたのだ。

「俺が頼まれたのは盗賊団を壊滅させることで、盗賊団の連中を殺

すことじゃない。」

逃げ帰ってきた刺客たちから聞いた、チャンスのその言葉が、サージの頭に焼き付いて離れなかった。そして、サージは自らチャンスの前に現れ、自分の身分を明かし、盗賊団壊滅の手助けをしたいと申し出たのだ。なぜ、と問うチャンスに、サージは笑ってこう返した。

「礼儀だの掟だのに従う暮らしに、いい加減飽き飽きしてたところさ。俺はいつでも自由だ、誰の指図も受けねえし、誰にも注文はつけねえ。」

「一匹狼か。同じ穴のナントカだな。」

チャンスが笑うと、サージも微笑んだ。

「そんな俺が、・・・不思議だな。おまえと一緒にいる方が、俺らしい生き方ができそうな、そんな気がしてどうにも落ち着かねえ。だからおまえと一緒に旅して、その俺の気持ちは何なのか確かめたい。図体だけの間抜け戦士どもの中で、おまえみたいない奴は絶滅しちまったと思ってたが・・・世の中、捨てたもんじやねえな。」

・・・

そうして二人、コンビを組んだチャンスとサージ。チャンスが怪物どもを蹴散らす間、お宝目指して罠を解除するのがサージの役目。二人の息はぴったりで、数々の冒険をこなしては、莫大な宝物を手に入れた。その黄金コンビに、ある日突然立ちはだかったのが、マーティだった。

そこは森深くの寂れた街道、日暮れに染まる空を背に、マーティは二人をじつと見つめた。

「我等が父、全能なるトレフィノ大神の遺跡を荒らしたのは、あなた方ですね。」

厳しい瞳でチャンスを見つめるマーティ。今にも飛び掛かってきそう
だ。

チャンスは、ああ、と思い出した。

「・・・トレフィノ大神の遺跡・・・ああ、半分崩れて埋もれてた、あの祠のことかな。」

「おい神官さんよ、あの狭い祠にや、お宝なんざ何もなかったぜ。もう誰かが漁り尽くした後だった。」

サージがそう言つて肩をすくめる。マーティは槍を構えて二人を鋭く睨み付けた。

「しらを切るおつもりですか。ならば力づくで白状させるしかありませんね。」

「・・・この野郎、俺たちじゃねえって言つてんだろ！神官のくせにそんなに疑り深いと罰が当たるぜ、この三下野郎！」

怒鳴りかかるうとするサージを、チャンスはすつと押さえた。チャンスは頭を掻き、マーティを見てすまなそうにつぶやいた。

「祠に勝手に入り込んで、悪かったよ・・・あんたらにとって神聖な場所だもんな。けど、サージの言う通り、俺たちは本当に何も盗っちゃいない。何なら、荷物をみんな広げて見せるよ。気が済むまで確かめてくれ。」

チャンスはマーティの返事を待たずに、背負っていたザックをが

ばつとひっくり返した。ざらざらとこぼれ落ちたのは、砥石、水袋、干し肉、堅焼パン、ロープ、蠟燭・・・

マーティは、思わず肩の力が抜けてしまった。

宝石の一個も持ち歩いていないとは、何と欲のない冒険者なのだろう。マーティは苦笑し、誤解であったことを認めて謝罪した。

結局その後、祠を荒らした犯人を、チャンスとサージと三人で突き止め、存分にこらしめたマーティは、生まれ育った寺院を後にし、チャンスのもとへやってきた。

「世界を見て周り見聞を広め、我が父トレフィノ大神の教えを説いて歩きたい。これが私の運命だと確信しました。どうか一緒に行かせて下さい。」

「断る理由はないよ、一緒に行こうマーティ。神の教えにや興味はないが、あんたの槍術は『買い』だからな。」

そうして三人の旅が始まってすぐ、宝石類などの戦利品は、すべてサージが持ち歩いていたことに気付いたマーティだったが、時すでに遅し・・・

・・・

港町の一角で、エキシイが鼻をくんくんと鳴らしながら、細い路地へするりと入って行く。遠目に見守る仲間たちを尻目に、一軒のこじんまりした店に足を止め、エキシイは看板を指差して仲間たちを手まねいた。

「ねえねえ、ここ、すごくいい匂いがする！」

「エキシイの鼻は確かだもんね。ここにしましうよ、チャンス。」

ノーマもねだるような目をチャンスに向ける。サージがその店の

看板を眺めた。

「ナプの店？・・・変な名前。」

「・・・船乗り連中や商人のお客が多いですね。船乗りが足しげく通う店は、外れが少ないですよ。」

「入ってみるか。俺は何でも選り好みしないで喰えるし・・・それに、」

腰に差した剣を撫でながら、チャンスはにやりと笑った。

「そのナプさんと、たっぷり話し合いたいね。いい儲け話が聞けりやしめたもんだ。」

・・・

チャンスとサージ、マーティ。彼等が三人旅に馴染み、打ち解けて話ができるようになった頃、とある森の街道で、旅の商人の馬車が追剥ぎに襲われているのを見つけた。

商人に加勢し、追剥ぎを蹴散らす三人。向こうは普通の追剥ぎ三人、歴戦の冒険者であるチャンスたちには勝機が見えていた。だがなぜか、いっこうに決着がつかない。

「・・・あつ！」

なんと、追剥ぎたちはいくら怪我をしても、すぐに傷が元通りになつていくではないか。異常に気付いたマーティが槍を一閃させ、きらめくトレフィノ大神の聖なる印を振りかざすと、一すじの光が森を突き抜けた。

「きゃあつ！」

悲鳴を追って森へ飛び込んだマーティが見たのは、聖なる光で一時的に視力を失い、苦しげにうずくまるノーマの姿だった。

治癒を絶たれた追剥ぎたちは呆気なく追い払われ、ノーマは蜥蜴の尻尾切りのように置き去りにされ、チャンスたちの前に立ち尽くした。商人は馬車や積み荷を目茶苦茶にされて怒り狂い、ノーマを縛り上げて警備隊に突き出すと言い出した。ノーマも、仲間置き去りにされた衝撃からか、強気な瞳に涙をためて、黙り込んでいた。そんな時・・・

「お、おいチャンス、何すんだよ！」

突然チャンスが、サージのザックを漁り始めたのだ。そして大粒の青い宝石を取り出し、商人に投げ付けて言った。

「そいつはイヴィド王朝の秘宝の一つだ。その宝石をあんたにくれてやるよ。代わりにこの娘は俺たちが連れて行く。文句はないな。」

商人は目を丸くして、その宝石の偽りのない、眩いばかりの輝きを前に、人が変わったように媚びた笑いを浮かべ、そそくさと馬に乗って去って行ってしまった。

「何てことすんだよチャンス！イヴィド王朝の秘宝つったら、闇市でどれだけの値がつくと思ってんだよ！」

「いいじゃねえか、宝石くらい。宝石より暖かい、宝石以上の美女を救えたんだ。安いもんだよ。」

サージは、ノーマをキツと睨んだ。だがその途端、一気に顔を赤くする。確かに、ノーマは美しかったのだ。チャンスはノーマの羽根のついた背を、軽くぼんと叩いて微笑んだ。

「さあ、もうあんたは自由だ。二度とあんな連中とつるむんじやないぞ。せつかくの綺麗な白い羽根が、黒く染まらないようにな。」
「そうですとも。ファイファス人は天の人の末裔と言われます。その気高き心を、悪しき企みに惑わされてはいけませんよ。」

マーティも、そつと祈るようにつぶやいた。

「え・・・あの・・・！」

ノーマは驚いた。チャンスたちに迷惑をかけた自分を、大枚を支払って解放してくれ、何も要求をつきつけようとしないと。この荒んだ世界で、こんな扱いは初めてだった。

だが、サージだけは顔を真つ赤にし、拳を振り上げて叫んだ。

「馬鹿言うな！おい、ノーマとか言ったか、あんたには嫌でもついてきてもらうぜ！あの貴重な宝石と引き換えなんだ、誰がただで放すもんかい！」

半ばやけくそ状態のサージが、ノーマの手を取って大きく、握手をした。目を丸くするノーマの脇、チャンスはにやりと笑った。

「サージは、美女にはからきし弱いんだ。あんたのことが、大分気に入ったみたいだぜ。嫌じゃなければ、俺たちと一緒にこいよ。」

「私なんかで・・・いいの？」

「何が悪いもんか、よろしくなノーマ。」

・・・

新しく加わったノーマは、チャンスたちも驚くほど腕の立つ精霊使いで、彼等の冒険が殊更楽になったことは言うまでもなかった。

そうして四人、あちこちの土地を周り歩き、ある時たどりついたのが、「落魄れ者の街」と呼ばれる無法地帯だった。

その街は無秩序の支配する恐ろしい街だった。女子供がさらわれてきて、奴隷として売り買いされたり、得体の知れない毒薬を売る邪な商人がいたり、呪殺を請け負って大金を巻き上げる呪術師がいたり…。そんなあらゆる悪の混沌へ、正義漢を気取る冒険者たちが迷い込めば、それはもう蜜に蟻がたかるがごとく襲いかかられ、身ぐるみ剥がれて殺される運命は、火を見るよりも明らかだった。

「・・・ここは酷い街よ、できるなら遠ざけたい場所なんだけど・・・」

ノーマの怯えた声に、チャンスたちが街から離れようとしたその瞬間、物凄い勢いで街へ向かう馬車を通り抜けた。その幌の中には、縛り上げられた美しい娘たちが、無造作に詰め込まれているではないか。マーティがすかさず振り返ってチャンスに駆け寄った。

「チャンス、あの娘たちをこのまま見捨ててしまつては、我が父トレフィノ大神がお嘆きになります。彼女たちを救出しなければ！」
「私も手伝うわ、あのままじゃ・・・」

売られそうになった経験のあるノーマが眉をひそめる。チャンスに答えは一つしかなかった。

そこから繰り広げられた救出劇で、捕らわれていた娘たちは無事、各々の村々へと帰っていった。だがただ一人、街の焼け跡にぼつりと残った娘がいた。それがエキシイである。

「あちき、自分の村なんて覚えてないの。小さい頃から旅回りをして、いろんな土地を歩いてきたからね。今回はたまたま油断しちゃったの、詠唱呪文を終える前に殴られて・・・」

「詠唱呪文って・・・まさか、魔術師なのか？」

驚いて聞き返すチャンスにウインクをし、エキシィは微笑んだ。

「あちきはアルファドローラのエキシィ。魔術なら誰にも引けはとらないつもりよ。だから、しばらくあんなたちと一緒に旅をさせてくれないかしら。こんなに可愛いぴちぴちの魔術師がお願いしてるのよ、いいでしょ、その素敵なお兄さんたち。」

見つめられたマーティとサージが赤くなったのを、ノーマがじろりと睨んだ・・・もちろん、彼女が仲間に加わったのは言うまでもない。

・・・

一行は、鼻をくすぐるいい香りに誘われながら、隠れた思いを胸に『ナプの店』へ入っていった。

「いらっしやい！旅のご一行さんだね！」

ナプの店…ワインの罠

一行は、鼻をくすぐるいい香りに誘われながら、隠れた思いを胸に『ナプの店』へ入っていった。

「いらっしやい！旅のご一行さんだね！」

店の戸を開けた途端、威勢のいい声が弾け飛んできた。

店構えからは想像もつかない広い店内には客がごった返していて、様々な料理の香りが争うように漂っている。奥のカウンターから、太陽のように明るい笑顔の大柄な女性が手を振っていた。

「お初の客なら、カウンターに座つとくれ！何でもお望みのものをこしらえて差し上げようじゃないか。このナプの腕に嘘偽りはないよ！」

大柄な年齢不詳の女性・・・ナプはにこにこ笑いながら、人の胴体が輪切りにできそうな大包丁を軽々と振るった。

「・・・驚いたわ、ナプさんって・・・グラップ人じゃないの・・・！」

ノーマが瞬きも忘れてつぶやいた。

グラップ人は、辺境の一部地域だけに見られる巨漢の無毛人で、神の守りと称して全身に入れ墨を施す習性を持つ、生まれながらの戦闘種族である。大熊の首を一撃で吹き飛ばす、巨大な戦斧を最も好んで愛用し、信心深くまた名誉を重んじる。他人種との接触をひどく嫌うため、グラップ人のすべては謎に包まれている。

「わーい！おかみさん、何でもいいからお勧めの美味しいもの、ご馳走してちょうだい！もうおなか空いて目が回りそうよ！」

エキシイはまったくお構いなしに、さつさとカウンターに座ると、おねだりのポーズをしながら微笑んだ。見事な入れ墨を光らせて、ナプはエキシイを見下ろした。

「おや、可愛いアルファドーラのお嬢ちゃん、よく来たね。待つてなよ、とびきり美味しい料理をこしらえてあげるから。」

「そのお勧め料理によく合う、美味しいワインも追加してほしいね。」

サージが後ろから声を上げる。五人全員がカウンターに揃うと、ナプは大鍋を持ち上げてきて、その蓋を取った。

「まず最初は、ナプの店の名物料理、海のシチューをご賞味いただくかね。」

「うわぁ・・・！」

エキシイが思わず身を乗り出してしまうほど、素晴らしい香りが辺りに立ち込めた。綺麗な青い皿に盛り付けられたそれは、海の幸がふんだんに使われた、野菜たっぷりのシチューだ。チャンスがーさじすくつて、ぱくりと熱々のシチューを頬張る。

「・・・おつ、うまい！」

「ああ・・・すごいわ、ナプさん、こんな美味しいシチュー食べたことないわ！」

ナプは満足げにうなずき、焼きたてのふかふかパンを差し出し、次の料理の準備にかかる。そうしてナプは、包丁を振るいながら、チャンスをじつと見つめて、確かめるようにつぶやいた。

「・・・あんたが、この一行の大将さんだね。」

「そう呼ばれるのは嫌いじゃない。いかにも、俺がリーダーをしてる。チャンスってんだ。」

羊の厚切り肉に香辛料をこれでもかと振り掛け、豪快に炎の中に突っ込んで焼く。羊の油の焦げる匂いがたまらなく食欲をそそる。

ナブは手際よく他の注文を片付けながら、チャンスの顔をもう一度じつと見た。

「実は、あんた方をこのカウンターに座らせたのには、訳があるのさ。」

「だろうね。」

チャンスはシチューをすくって口に運び、にやりと笑った。

「酒場や食堂の親父なんかが、初顔の客をカウンターに寄せるのは、余所の国の旅の話を聞きたいがためだ。でもあんたは、それを聞かない。」

「・・・」

「てことは、あんたの方から話がある。じゃなきゃ、俺たちをここに座らせる理由がない。違うかい？」

チャンスの隣で、サージもにかつと笑った。もちろん、マーティとノーマもだ。エキシイだけはシチューを食べるのに夢中になっている。ナブは取り分けた肉に、羊の血をベースにしたソースをたっぷりとかけ、チャンスの前に差し出した。

「さすが、あたしが見込んだ連中だ。初対面でこんなことを言うのは失礼なのは分かってる。でも・・・どうしても聞いてもらいたい

話があるんだよ。」

「そうこなくっちゃ。」

サージが指をパチンと鳴らす。ナプは後ろで立ち働く料理人の一人に合図をし、一本の古ぼけたワインを持ってこさせた。目敏いサージは、そのワインのラベル見た瞬間、唾をごくりと飲んだ。

「そ、それ・・・極上ワインの産地、果樹園の街ナロフの、ナロフワイン・・・」

「さすが冒険者の見る目は違うね。こいつはそのナロフワインの中でも、とびきり極上の一品さ。食事を終えたら、二階の突き当たりの部屋へ移っておくれ。あたしの話は、これを飲み交わしながらさせてもらうよ。」

ナプは微笑んでそう言うと、大きな海老を惜し気なく使った季節野菜のごった煮と、たっぷりジャムを挟んでクリームを添えたタルトパイを次々とカウンターに並べ、厨房からスツと姿を消した。

「いやーん、すっごく美味しい！このタルトパイ、最高オ！」

ただただ食べるエキシィを横目に、ノーマはチャンスを見た。

「ナプさんの話、どんな話かしら。」

「さあ・・・でも、結構深刻な話みたいだな。」

「おい何やってんだよ、みんな早く喰い終われよ。二階でナプさんが待ってんだろ。」

ワインのことしか頭にないサージは、すでに口の周りをクリームだらけにして、カウンターを降りようとしていた。

「美味しい料理の後に、美味しい話が聞けるといいんだけどな。」

チャンスたちも席を立ち、二階への階段へ向かう。エキシィはハツと顔を上げ、チャンスたちの皿を指差した。

「ねえチャンス、マーティ！こんなに美味しいのに、タルトパイ残しちゃうのオ？あちきが全部食べちゃうわよ、いいのね！」

チャンスはうんうんとうなずき、二階にいるからとエキシィに告げる。四人はナプの言った通り、二階突き当たりの扉の前にたち、軽くノックする。

「どうぞ。」

ナプの声がして、サージがうきうきと扉へ手をかけた。だが瞬間、サージはバツと手を引いた。その表情が見る間に凍り付く。

「サージ？」

サージはシツと口に指を当て、腰に着けた盗賊道具の袋を探る。そこから、先が小さな鉤状になった細い針金を出す。

「いい根性してるぜ、俺たちを試してやがる。用無しは死んでもらうって寸法か・・・な。」

鉤状の針金を鍵穴に差し、手鏡を使って側面から見る。サージはくつと針金を捻り、引き抜く。扉の奥から、小さな金属音がした。

「扉に仕掛けられてた絹糸は切った、もう開けてもいいぜ。」

サージは自信のある口調をとりながらも、ゆっくりと扉を引いて中を覗き込んだ。すると、奥の椅子に腰掛けたナプが、鋭い瞳を向けて微笑むのが見えた。

「やはりね。あんた方ならきつと大丈夫だと思ったよ。さあ、もう罨は仕掛けてないよ、中へ入ってきておくれ。」

ナプの脇に、絹糸を引いて作られた小形弓矢の仕掛けがあった。切られた絹糸がふわふわとたなびく中、ナプはナロフワインのコルクを引き抜いた。

・・・

「よお別嬪の姉ちゃん、一人かい？」

一人カウンターに残っていたエキシイに、船乗りらしき男が近寄った。男は髭を撫でながら、エキシイの体を舐めるように見ている。エキシイはタルトパイをつまみながら、男を見てにこりと笑った。

「ハアイ。あんた、この店の常連なの？」

エキシイの笑顔を見ると、男はすぐに隣に座り、にやにやしながらうなずいた。

「ああ、いつも飯はここって決めてるのさ。ナプの腕は天下一品だからな。」

「ナプさんて、どんな人？」

「気っ風のいい女将さんさ。荒くれの船乗り相手にすら、気持ちいいほどの啖呵切って、丸めて外に投げ飛ばしちまうよ。グラップ人

は底無しに強えからな。」

「・・・グラップ人って、こころじゃ見掛けない人種だつて言うじやない。ナプさんはどうして、こんな賑やかな街なんかに、店をかまえてるのかしら。」

「なあなあ、それより、もつといい所へ行つて遊ぼうぜ。明日には出港しちまうんだ、陸の名残にさあ・・・」

男はにやけながら、エキシイの肩に手を回す。エキシイはその毛むくじらの手を見つめながら、すつと指先を男に向けた。

「あちきの話が先よ。答えてくれなきゃ遊んであげないわよ。」

不思議な鳶色の宝石をあしらった指輪を、男の鼻先に突き付けてそっぽを向くエキシイ。慌ててご機嫌取りに走る男。

「分かった分かった。ナプは若い頃冒険者で、他のグラップ人の仲間と一緒に旅をしてたんだと。その最後の旅の場所が、この港町だったのさ。」

「・・・最後の場所？」

「ああ。何でも、ナプ以外の仲間は皆、この街で病気になったとか何とかで、おつ死んじまつたんだとよ。それで仕方無く、この街にとどまつたつて聞いたぜ。」

「・・・ふうん。病気・・・ねえ。」

「なあ、そろそろいいだろ、場所を変えて飲み直そうぜ。」

肩に回す手に力がこもる。エキシイは手をひらひらと回しながら、小さくつぶやいた。

「惑いし者に安息を。心静め臉を閉じよ・・・」

エキシイの指輪がぎらりと光った。その光に睨まれた男は、途端にがくりとカウンターに突っ伏し、大いびきをかきはじめた。魔術師の指輪を嵌めているエキシイは、杖がなくても呪文を詠唱できるのだ。

「ふん、毛もじゃ髭もじゃの熊野郎。」

男の手の触れた肩を、さも汚そうに払い、エキシイは静かに二階へ向かった。

堕ちた勇者

「あたしたちグランプ人は、名も無き密林の奥深く、聖なる谷に集落を作り、狩りをしながら暮らしている。朝昼晩、太陽の神オスアロスに祈りを捧げ、男も女も戦士として腕を磨くんだ。」

「太陽神オスアロス・・・トレフィノ大神を守護する、九守護神のひとりですね。オスアロス神は太陽の力強さを持つ、戦の神とも呼ばれていますから。」

マーティがつぶやくと、ナブはゆっくりとうなずく。四人の前には大きなゴブレットが置いてあり、中には素晴らしい芳香を放つナロフワインが満たされている。感激で言葉もない様子のサージは、少しずつ噛み締めながら飲み下だしていた。

「見て御覧。・・・全身の入れ墨は、あたしたちにとって、もうひとつの鎧さ。オスアロス神の加護を願い、言霊と紋章を彫り込むことで、オスアロス神の力を己のものとするのさ。」

「・・・本当だわ、遠くからだと模様にしか見えないけど・・・」

ナブから差し出された腕を見て、ノーマは息を飲んだ。美しい模様に見えた入れ墨は、呪文の一言一句が織り成されたものだったのだ。

「普通のグランプ人は、多民族との関わりを極度に嫌うけど、あたしたちはそうじゃなかった。あたしを含めた五人の仲間は、広い世界を見たくて、とうとう谷から抜け出した。」

聖なる谷を後にしたナブたち一行は、外の世界の華やかな様に圧倒され、そして感動した。谷に閉じこもっているだけでは、決して

分からなかった喜びや、楽しみを知ることができたのだ。

だが一方、それと同じ位、谷では考えられないような哀しみや苦痛を知り、理解できない酷い出来事が横行していることを知った。誇り高いグループ人であるナプたちは、そんな惨い出来事に遭遇するたび、命を賭して、哀しみに打ちひしがれる人のために、困難に立ち向かっていった。

「・・・いつしか、それがあたしたちの使命なんだと、思うようになった。正義の味方・・・そんな言葉が、嫌味無く似合う連中だったろう、その当時はね。」

普通の人種にしてみれば、見も知らぬ巨漢の連中が、災いを蹴散らして去って行くのを見れば、彼等が素晴らしい勇者たちなのだと思つて当然である。ナプたちは、勇者の名をほしいまにした。望まぬ名ではあつたが、噂が広まるにつれて、彼女たちにも自覚ができた・・・自分達は勇者なのだ、と。

「そうして、この街へきた。ここが・・・あたしたち、勇者の墓場になったのさ。」

「墓場・・・？」

賑やかな港町に下り立つたグループ人たちを目敏く見つけたのは、その土地の人間ではない、旅の商人であつた。噂に聞いたグループ人の勇者一行を目の当たりにした彼は、すぐさま彼女たちの前に進み出て、こう言った。

「これはこれは、噂に名高い勇者様たちですな。私はこの街に滞在しておる商人ですが、ぜひ皆さんの勇敢なる冒険のお話を拝聴したくて、お声をかけさせていただいたのです。どうぞ私の宿へいらして下さい、存分におもてなしますから！」

彼女たちは、それまでに何度も、こういった出来事に遭遇していた。感謝の気持ちを宴に込める者は多く、一夜限りの盃を難問解決の報酬とすることは、彼女たちにとってはごく普通になっていた。

「・・・あたしたちは自ら築いた『勇者』という名の檻に、閉じ込められちまっていたのさ。その時も少し、慎重になってさえいたらと、今も泣けてくるよ・・・」

ナプは悔しげに目を閉じた。

商人の申し出を、ひとかけらの疑いも持たずに受けたナプたちは、彼の止まる宿屋へ向かった。商人は気前よく、豪勢なご馳走をずらりとならべて振る舞った。

「さあさあどうぞ、この宿屋の料理長は素晴らしい腕を持つとります。海の幸を思う存分味わって下さいませ。」

旅の話を聞きたがる商人の相手をしながら、ご馳走に舌鼓を打つナプたちは、ふと喉の渴きを覚えた。その場にはなぜか、飲み物が一切置かれていなかったのだ。商人はナプたちの様子に気付くと、にこりと笑って、数本の酒瓶を取り出した。

「実はこれが、私の本当の商売道具でしてね。これは特別に作った秘蔵の蜂蜜酒なのです。蜂蜜酒など飲らないという方でも、ぜひ一度飲んでいただきたい一品でして・・・さあ皆様、ぜひこちらをご賞味下さい。」

大振りのデカンターに注ぎ入れられる、黄金色の蜂蜜酒。鼻をくすぐる豊潤な香りを堪能しながら、彼女らはデカンターを傾けた。

「でもあたしはその時、肘でナイフを落としちまって、その蜂蜜酒を飲むのが遅れた。それが・・・あたしたちのすべての運命を決めたのさ。」

他の仲間が美味そうに蜂蜜酒を飲み下だす中、落としたナイフを拾おうとデカンターをテーブルに置いたナプ。その一瞬の後。

どさり。

「!？」

ハッとしてナプが顔を上げると、仲間の一人が椅子から転げ落ち、昏睡していた。ギョツとして立ち上がったナプ。仲間は皆、恍惚とした表情を浮かべ、すぐに意識を失っていく。一人だけ、ふらふらしながら手をばたつかせた仲間に駆け寄ったナプは、必死にその仲間の肩を揺すった。その仲間はナプの耳元で、逃げる・・・と小さく囁き、がくりと昏倒した。

「貴様、酒に何を入れたっ!？」

ナプが商人に振り返ると、商人はにやにやと笑いながら、扉を出て行く所だった。商人はナプに向かって、こう言い捨てた。

「おまえも飲んでおけばよかったのに・・・これで仲間たちとはお別れだな。」

「何だと・・・？」

「いずれおまえの仲間たちは、私の奴隷として生涯仕えることになるだろうよ。おまえはその邪魔をしないことだ。大事な仲間たちに殺されてしまうよ。くくく・・・」

「待てっ・・・！」

ナプが叫んで追おうとする。するとその後ろで、仲間たちの意識が次々と戻り始めるではないか。ここで仲間たちを放り出せないと思ったナプは、逃げ去る商人が気掛かりだったが、倒れた仲間たちのもとへ引き返した。

「しっかりしろ、大丈夫かい！？」

ナプの呼び掛けに、仲間はずつとりとした表情を浮かべ、こう答えた。

「ああ大丈夫だ・・・それどころか、何だか・・・ひどくいい気持ちだった・・・」

・・・

「逃げた商人の行方は結局つかめなかった。日が経つにつれて、あの一件は悪い悪戯かもしれないと思い始めたその矢先、とうとう・・・悲劇が起きたのさ。」

港町を後にして、別の土地へ行こうと身支度をしていた仲間たちが、しきりに喉が乾くという始めた。何度も何度も、水を飲む仲間だが、その渴きを埋めることはできない。焼け付くような渴きの渦が、体中で暴れまわるのだ。酒も試したが駄目だった。この喉の渴きを癒すものを飲みたいくて、気が狂いそうなほどに苦しい。喉を押さえ、猛烈な苦痛にのたうつ仲間たちを前に、ナプは一人呆然と立ち尽くした。そこで、突然部屋の扉が蹴り開けられた。

「ハッハア、いい頃合のようだな！おい、おまえら。おまえらの苦

しみを癒すものは、この私の作る蜂蜜酒だけだ。こいつが飲みたければ、私の奴隷になると誓え！」

「こ……この野郎……！」

ナブが商人に飛び掛かり、拳を振り上げる。商人は少しも慌てずに、蜂蜜酒の瓶を撫でてつぶやいた。

「私を殴れば瓶が割れて、酒が流れてしまうよ。かわいそうだねえ、おまえ一人のせいで、仲間たちは全員のたうち回って苦しまなけりやならんのだからな！」

「……くっ……！」

仲間たちに振り返るナブ。仲間たちも、必至に歯を食いしばって戦っていた。奴隷になるなど、グループ人としての誇りが許さない泡を吐き散らし、もがく仲間たち。

「無駄なあがきはやめるんだな。もうこの酒がない限り、おまえたちには狂い死ぬしか道は残っていないんだぞ。それに奴隷とはいえ、決して酷い扱いなどしやせんよ。おまえたちには、私の護衛人になつてもらおうと思っっているんだ。」

「嘘だ、どうせ商売敵を痛め付ける道具にする気なんだろう……！」

「ふん、どうとでも言え。おまえには用はないわ。さあ、酒が欲しいか、欲しくないか！五を数えるうちに答えないと、瓶を床に叩き付けてしまうぞ！」

商人はそう言って、瓶を大きく振り上げた。

「いーち！」

苦しげな瞳が、酒の瓶に注がれる。ナブは仲間たちを見つめた。

「にーい！」

堪え難い苦痛に大きく咳き込む仲間。

「さーん！」

「ま、待ってくれ、ち、誓う、何でも誓うから……！！」

這いずりながら、商人の足元へ擦り寄っていく仲間……一人が、堕ちた。

「す、すまんナブ、もう限界だ、……お願いだ、俺も誓う、酒をくれエ！！」

二人目。にやりと笑う商人。

「しーい！！」

「ああつ、お願い、あたしにも酒を、酒を頂戴！何でもする、するわ！！」

三人目が悲鳴を上げた。最後の、苦しみもがくひとりが、堕ちていった仲間たちを睨んで叫んだ。

「貴様ら、そんなものに頼って、一生奴隷に成り下がって生き長らえるつもりか、恥ずかしいと思わないのか！己可愛さに、グラップ人の誇りを忘れたか！！」

その仲間は素早く腰から短剣を引き抜いて、立ち尽くすナブを見た。

「ナ、ナプ、俺は悪しき力には屈しない！俺はオスアロス神のもとへ逝く！さらばだ！！」

「やめ・・・！！」

一瞬だった。

横一文字に大きく切り裂かれた喉から、滝のように血が溢れ返る。白目を剥いて、その仲間は絶命した。

「・・・ふん。まあよかろう。いくぞおまえら、天国の酒をたらふく飲ませてやる！」

血の海にへたりと座り込み、仲間の亡骸を前に放心するナプ。堕ちた仲間たちはナプへ振り返りもせず、商人の後をついて、よろよろと部屋から去っていった。

・・・

ナプは話しながら、一筋の涙を流した。

「・・・ごめんよ。あたしの中ではまだ、戦いが続いているんだ。まだ・・・思い出しにはできないんだよ・・・」

「・・・ナプさん・・・」

ノーマが哀しげにナプを見つめた。先程までワインに夢中だったサージも、すでにナプの話に真剣に聞き入っていた。

「ナプさん、その蜂蜜酒には・・・」

「伝説の虜の花、バータ・ラカッティが入ってたんじゃないかな。でなければ傀儡草かいらいそうの類いだと思うわ。」

そう言いながら部屋の扉を開け放ったのはエキシイだった。

「体を操る傀儡草の話は聞いたことがあるけど、バータ・ラカッテイって……？」

ノーマが聞き返すと、エキシイは空いている椅子に腰掛けてうなずいた。

「古文書の端々に出てくる、有名な毒草の名前よ。一端飲んだら、常にそれを飲み続けないと狂い死んでしまう、悪夢のような効能を持っているの。」

「商人の言ったことと同じだ……」

チャンスがつぶやくと、ナプも目を丸くしてうなずいた。

「バータ・ラカッティは、魔術の世界では禁断の毒草と言われている。その習慣性の強さを利用して、奴隷商人に鞍替えする悪い魔術師が続出してね、当時の魔術大師が禁令を出したのよ。」

目の前のゴブレットに注がれたワインの色を見つめ、エキシイはナプへ視線を移す。

「でもバータ・ラカッティは、そうおいそれと見つかる代物じゃないわ。最古級の古文書に記される毒草や秘薬は、今の時代じゃ、なかなかお目にかかれないものが多いの。」

「……ということは、その性悪の商人は、伝説のバータ・ラカッティの生息地を、見つけたってことか……」

サージがつぶやく言葉を、ノーマが拾う。

「それ以外の可能性はないのかしら。例えば・・・そう、呪術師の使う秘薬とか、呪いの一種とか・・・」

「呪いは直接本人に作用するもので、『酒』という中間点を介する必要はありませんよ。」

「マーティ・・・そういえばそうね。」

「呪術師の秘薬は、強力なものはそれ相応の法外な値段で取引されるそうです。そこまで持続性の高い秘薬を購入するとなれば、かなり莫大な出費のはず。欲深い商人が、そんな大層なことをするでしょうか。・・・まあ、呪術師を殺して奪ったというなら話は別ですが。」

チャンスはナプを見た。

「はつきり聞こう。ナプさん、俺たちへ依頼することは・・・何だい？」

挑むような瞳で、チャンスはナプの口元を伺う。そのチャンスの顔には、笑みが浮かんでいた。まるで、俺たちにすべて任せてくれと言わんばかりに。

ナプは、震える手を押さえ、しっかりとチャンスを見据えた。

「・・・あたしの仲間たちを陥れた、あの悪魔の酒を・・・永遠に葬り去っておくれ。そして・・・その毒に冒された、あたしの仲間たちを・・・救ってやってほしい・・・！」

ナプが目頭を押さえた。

「ついでに性悪の商人もブツ飛ばしてやるよ。何もかも、綺麗に片付けてやる。ナプさん、このチャンスの名にかけて、約束するよ。」

チャンスが胸をどんと叩いた。

と、ノーマとサージが同時に戸口を睨む。ノーマが叫ぶ。

「そこにいるのは誰っ!？」

無敵の三戦士

ノーマが叫ぶ。

「そこにいるのは誰っ!？」

ぎしっ。

廊下が軋んだ。

ノーマは素早く手を組み、扉に向けて言葉を放つ。

「光の精霊アレイよ、我が名において命ずる! 扉より駆けゆく者の瞳を光の刃で貫け!」

ノーマの鋭い言葉が終わるが早いか、その組んだ手の隙間から、凄まじい閃光が迸った。その光が扉を突き抜けると、次いで、息を吸い込むような小さな悲鳴が起こり、階段から何者かが転げ落ちる音が聞こえた。

チャンスたちが部屋を駆け出て階段を見下ろすと、小柄な男が目を押さえて転げ回っていた。サージがその男の襟首を引っ掴み、ぐいっと腕を捻じり上げて、壁に押しつけた。

「盗み聞きなんかしやがって。おい、誰に頼まれたんだ？」

「・・・」

閃光に貫かれ、視力の戻らぬ目をきつく閉じたまま、男は答えない。サージはふんと鼻で笑う。

「素直に答えられないなら、いい返事が聞こえるまで腕を捻り上げてやるぜ。言つとくがな、俺はこう見えても、素手で大熊の首をへ

し折れるんだ。甘く見てると、腕一本じゃすまさねえぜ。俺はチャンスみてえに優しかねえからな。」

チャンスが苦笑いを浮かべる。短剣一本という軽装備のサージの、もう一つの武器はまさにそれであった。恐ろしいまでの握力、腕力にかかれば、短剣といえど、剣士の持つ剣に、決して遅れを取ることはないのである。

「ねえ、あんた。早いとこ白状しちやいなよ。サージは短気だからさ、体中の骨を折られちゃうよ。」

エキシイがつぶやく間に、男の腕はサージによってじりじりと擦じり上げられていく。そして、骨の軋みが聞こえてきそうなほどまでに達すると、男はとうとう悲鳴を上げて泣き出した。

「た、助けて！やめてくれえ！俺はバイドル様に頼まれたただけ、ナプに変わった様子があれば知らせろって言われて・・・それだけなんだよおお！！」

「・・・バイドル・・・！」

ナプの顔色が変わった。ナプは男の肩をすかさずつかみ、揺さぶりながら叫んだ。

「バイドルは！バイドルは誰に仕えている！今どこにいる、早く答えるんだ！！」

「エ、エーネツカ！ヘルマンっていう商人の護衛をしてる！でもエーネツカは港を輾転としているらしくて、詳しい場所は俺は知らない、嘘じゃない！」

男は怯えた顔で繰り返す。マーティが、取り乱すナプを見た。

「ナプさん、バイドル……というのは……」

ナプはゆっくりとうつぶいた。

「……あたしの昔の仲間……あの悪魔の酒に魅入られた、堕ちた勇者のひとりさ。……素晴らしい戦士だった、いつでも真っ直ぐに生きる男だった……」

「おい三下！そのエーネツカって野郎には、まだグループ人の護衛がいるだろう。そいつらの名は何ていうんだ。正直に言わねえと……」

男はすでに、サージの問いに抵抗できる気力を失っている。男は震えながら、戦士オーネウスと、女戦士マハンダの名を答えた。

「エーネツカの配下の、グループ人三戦士は有名だよ。無敵の戦士の呼び名すらあるほどだ……三戦士に殺されたエーネツカの商売敵は数知れない。」

「……無敵の戦士……」

「バイドル、オーネウス、マハンダ……間違いないな、ナプさん？」

チャンスがつぶやくと、ナプは壊れた人形のように、こくりとうなずいた。

ナプは、そのまま、何も言わずに男を解放してやった。一、二発ぶん殴ってやればよかったのに、というサージの言葉も、ナプにはすでに聞こえていなかった。

「……あたしは生き残るべきじゃなかった。」

見知らぬ街でたった一人、取り残されたナプ。

必死の思いで金を稼ぎ、手に入れた店。もともと得意だった料理の腕をさらに磨いて、ここまで店を繁盛させるには、相当な努力が必要だった。だがナプは頑張った・・・いつか、堕ちた仲間たちが笑って帰ってきてくれることを信じて。

ナプは拳を握り締め、肩を震わせた。

「・・・あの時、ハツガスと一緒に・・・！喉をかき斬って死んだ婚約者と一緒に、あたしは死んでしまえばよかったんだ・・・」

打ちひしがれたナプの姿を、じっと見つめていたチャンスが、小さくつぶやいた。

「かわいそうな仲間たちを見捨てて、神のもとへ逝っちまうのはあなたの自由だよ。けど、あんたも辛いだろうが、仲間たちだってもっと辛いはずだ。」

ナプがチャンスへ振り返る。

「バータ・ラカッティは習慣性があるだけで、精神には影響を与えない。酒が欲しくて繰り返す凶行の狭間で、仲間たちはきつと苦しんでいるはずだ。自分のしていることが間違いだと、分かっているんだからな。」

ザッと踵を返すチャンスが、仲間たちに手を返して合図をする。

「・・・性悪商人どもに俺たちの存在を知られちゃった以上、ここに長居は無用だな。分かったよチャンス。」

うなずくサージがザックを背負い、マーティが槍を携え、ノーマとエキシイがマントを羽織る間、ナプは黙って厨房に戻り、立ち尽くしたままだ。皆の身支度が終わると、チャンスは店の戸口から、振り返らずに言い放つ。

「運命は、神の作るものだ。」

「・・・」

「でも、そこに横たわる不運の蛇を追い払うことくらい、俺たちにもできる。俺は必ず、あんたの運命の輪に絡まった蛇どもを、断ち切ってやる。」

どこか、哀しみを帯びた余韻を残し、チャンスの言葉がナプの耳に染みる。そうして五人の足音が遠ざかるうとした時、急に足音のひとつが駆け戻ってきた。

「ナプさん！」

突然の声に振り返ると、戸口にエキシイが立っていた。

「あちきたち、絶対ここに帰ってくるから！お店やめちゃだよ、ナプさん。あのタルトパイ、またご馳走になりにくるから！」

エキシイはそう言って、にこりと笑って再び駆け出して行った。その笑みが戸口に置き去りにした残像が消えるころ、ナプは静かに微笑みを浮かべている自分に気付いた。

「そうだね・・・待ってるよ。」

チャンスという男と、その仲間たちなら、大丈夫かもしれない。ナプはひっそりと手を組み、戦の神オスアロスへ、静かに祈りを

捧げる。

「かの者たちを守りたまえ、我が命を分け与えても、かの者たちを・
・・悪しき手から守りたまえ・・・」

・・・

一方、チャンスたちとナプとの会話を盗み聞きした小男は、街外れの海岸沿いに、磯場へと小走りに向かった。そこには、その小男からの定時連絡を待つ、一人の大男が立っている。押し寄せる波が砕かれる磯場、それはまるで巨漢の男の力を象徴するかのような。男の取り巻きである数人の男たちも、ただならぬ気配を放っている。

「どうだった・・・何か変化はあったのか。」

小男は、巨漢の男のどっしりした声に縮み上がりながらも、事の顛末を一部始終話して聞かせる。

「ではナプは、チャンスとかいう流浪の冒険者に、俺たちを狂わせているという『悪魔の酒』を、葬るよう依頼したというのか。」

「は、はい、バイドル様・・・」

巨漢、バイドルは、腕を組んだまま小男を見下ろしている。小男は、貴方様が薬に冒された男には見えないですよと、ご機嫌を取るように付け足し、そして続ける。

「そこまで聞いたところで、感付かれまして・・・奴等に袋叩きになるところでしたが、ナプが逃がしてくれたんです。」

「・・・顔を知られたのか。」

「は・・・申し訳ありません・・・!」

小男が頭を下げる。と、バイドルは突然、男の頭を引つ掴み、ぐいと捻った。鈍い音がして、小男はごぼりと血を吐き、呆気なく息絶える。取り巻きの男たちは黙って、バイドルの動きを見守る。バイドルは小男の体を摘み上げ、磯場から海に向けて放り投げる。波間から顔を出す頑強な岩に、小男の頭が直撃し、ごき、という嫌な音が響いた後、その骸は海中へ沈んでいった。程なく、獐猛な魚たちによって、死骸は片付けられるだろう。

「俺の秘密を知り、ナプたちに顔を知られた以上、おまえを生かしておくわけにはいかん。恨むなよ。」

全身に彫られた入れ墨が太陽に映える。浅黒い皮膚の上で、入れ墨だけが浮き上がっているようだ。

「ナプ・・・俺はもう、おまえのいる世界には戻れん。」

磯場に繋いである小さな船へ乗り込むバイドルは、取り巻きの男たちに何ごとか指示を出す。男たちは力強くうなずき、バイドルを後にして街へと走っていった。

「俺の体には悪魔が住み着いてしまった・・・あの酒のためなら、今の俺は、おまえすら殺してしまうだろう。」

沖へ漕ぎ出すバイドル。鋭い瞳の中に、哀しみが深く、深く埋もれている。

「だから、おまえは俺の世界に踏み込まないでくれ。俺は・・・おまえだけは殺したくない。だが、冒険者たちは、いずれ真つ向から踏み込んでくるだろう、おまえの依頼を受けてな。そいつらはきつ

と・・・昔の俺たちのような奴等なんだろうな。」

遠く、港が見える。最初に、何も知らぬまま港に下り立った、あの瞬間が懐かしかった。

「だが俺は、そいつらすら・・・殺さねばならないかもしれん。すまんナプ・・・俺は、もう・・・おまえの知る俺じゃないんだ・・・」

「

ワイスの宿屋

チャンスたちは、ナプの店から離れてすぐ、宿屋探しをはじめた。港町ブーベルデル中の、ありとあらゆる宿屋を回り歩き、とうとう街の端に位置する、小さな宿屋を訪れた五人。さっぱり繁盛していない様子のその宿屋は、看板のあちこちが腐り落ち、扉の蝶番いもひとつ、外れかけている。大きな宿屋に泊まればそれだけ人の目につきやすく危険も多いが、こうした小さな宿屋ならその類いの危険はある程度回避できる。

ノーマとエキシイはあまりいい顔はしないが、チャンスの決定に文句をつけることはない。以前、チャンスの忠告を押し切って街中の宿屋に泊まった時、闇討ちされてひどい目にあったことがあるからだ。

チャンスたちがその宿屋の中へ入ると、床が酷く軋んだ。薄暗い建物の中をゆっくりと見回し、部屋の隅や廊下、ランタンに眼をやるチャンス。

「大将、宿を頼みたいんだが。」

チャンスが声をかける。

埃だらけの小さなホールの奥、白髪の老人が椅子に腰掛けて、白い縁取りがしてある、黒い背表紙の本を読んでいた。突然の来客に呼び掛けられた老人は、気怠く顔を上げる。

「うちは見ての通りのあばら屋じゃ。余所に行くなら今のうちじゃぞ。」

「いや、ここに決めた。宿を頼みたい。」

怒るでもなく、笑うでもなく、チャンスがなおも言う。老人は面倒臭げにして、また本へ目を戻そうとした、その時。

「・・・その本は、学問の神メサトスが記したと言われる『天と地の血脈』では？」

マーティがつぶやく。老人がキツとマーティを睨んだ。

「すみません、違っていましたか？」

マーティが頭を下げようとすると、素晴らしくすすとんきょうな声が返ってきた。

「あんた、大したもんじゃ！あんたみたいな若造が、この本の名前を当てることができるとは！確かにこれは、メサトス神の知恵と教えが詰まった『天と地の血脈』じゃ！」

「あれ、それって確か魔術書でもあるんじゃないか？ たっけ、マーティ？」

エキシイがぽつりと漏らすと、老人はくるりと振り向き、またも大きな声を張り上げた。

「その通りじゃ！そのあんたも、ただの娘っ子じゃないな？この書には何かの法則があつて、それを解けば、偉大なる魔術の謎を説き明かすことができると言われておる！」

老人は本を持って、すたすたとチャンスたちの元へ歩みよつて来た。豊かな白髪、彫りの深い皺だらけの顔。老人は顔を歪めてチャンスの腕をばんばんと叩いた。

「気に入ったよ、お若いの。好きなだけ泊まっていける。料金は15ツーク、先払いじゃぞ。」

このデュファ大陸の通貨はツークと呼ばれ、およそ10ツークあれば、一日の食事には困らないと言われている。

「オイオイ、やたら安いなア。それ本当に五人分の料金かよ、爺さん。」

「無論じゃ。ただし食事は自分で作ってくれ。材料は裏の畑から好きに取るがいい。そこにないものが食いたけりや、街の市で買ってくるんじゃない。」

サージが呆れ顔で肩をすくめた。

「安いはずだよ。素泊まり料金かい。」

「・・・それで十分だ。」

チャンスがにっと笑った。そういう顔をした時のチャンスに、サージは口を挟まない。ザックを開けて、15枚のツーク貨幣を取り出して、老人の手に落とすサージ。

「15ツーク、確かに払ったぜ。毫碌もろくして、受け取ったのを忘れちゃった・・・なんてのはナシだぞ。」

「安心せい。痩せても枯れてもこのワイス＝シュルテ、人様から受け取った金は忘れやせんて。」

「何だい爺さん、有名人なのかい？」

「ほっほっ、ブルーベルデル随一の腕利き商人、ワイス＝シュルテ！昔は、このブルーベルデル中の家に、わしが異国から取り寄せた美しい陶器の花瓶やゴブレットがあったもんじゃない。」

と、そこまで聞いたところで、チャンスがずっと二人の話を遮った。

「ワイズ爺さん、後でその話、じっくり聞かせてもらうよ。取り敢えず部屋を選んでいいかい？」

「ああ、いいともいいとも、好きな部屋を使うがいいよ。」

チャンスたちが二階の階段を上がる。そして一旦、チャンスは皆を二階の一室に集めた。

「マーティ、一緒にワイズ爺さんの相手をしようぜ。いい話が山ほど聞けそうだからな。」

「え？・・・はい、構いませんが・・・」

チャンスの目を見て、マーティは一瞬息を飲む。
鋭い目だった。

まるで、戦いを目の前にしているような・・・

「ノーマ、エキシィ、おまえたち二人は街の市へ夕飯の買い物に行ってくれ。そうだな・・・昼飯をすっかり食っちゃったから、夜は軽い物でいいや。」

「？・・・う、うん。」

「サージも一緒だ。ノーマたちと市へ行つて、おまえは聞き込みをしてきてくれ。いいな。」

「おいチャンス・・・」

チャンスは、シツと口を指で押さえた。

そしてマーティとノーマに目配せをする。マーティは、チャンスの言いたいことを理解したのか、スツと槍を抱えて目を閉じた。そ

してノーマも、ふわりと手を振り上げて、左腕に嵌めた腕輪をきらめかせた。

やがてマーティは、チャンスへ向けてうなずいて見せた。そしてもちろん、ノーマも。

チャンスはうなずくと、自分のザックから空の水袋を取り出す。その水袋の口金部分を外すと、中から羊皮紙が出てきた。そして、爪で引っ掻くようにして、そこに文字を書き始めるチャンス。

『畏だ』

チャンスの指が動く。書くそばから、字が消えて行く。

『爺さんは敵だ』

エキシイがえつという顔でチャンスを見る。
その筆談の間、五人は関係のない話を絶え間なく続けている・・・

『この罠を利用するぞ』

チャンスは、サージとノーマ、エキシイを見て、にやりと笑ってみせた。

『好きにやれ』

サージたちは顔を見合わせ、にっと笑ってうなずく。マーティに視線を移すと、マーティはもう深々とうなずいていた。チャンスは羊皮紙をくるくると丸め、また水袋へしまって手を振った。

「さて、じゃあ頼むぜ、サージ。」

「ああ、聞き込みは任しときな。」

「食事は軽めでいいのね、それなら卵料理なんかでいいかな。ね、ノーマ。」

「そうね、美味しいラムも欲しいな。」

「ノーマはお酒に強いですからね。私とチャンスは、ワイスさんの畑で、適当に野菜を採っておきますよ。」

そうして話を終わると、ノーマとエキシイは別の部屋へ荷物を置き、サージと共に先に階段を降りる。それを見上げたワイスに、サージが声をかける。

「おう爺さん、俺たち市へ行つてくらあ。畑の野菜つたつて、どーせろくなもん植わつてねーんだろ。」

「そんな言い方、悪いわよサージ。ワイスさん、卵は平気よね。」

ノーマの笑みに、ワイスは目を見開いた。

「おう、卵はわしの好物じゃよ、美味しい卵を選んできておくれよ、嬢ちゃん！」

「任しといて、ついでにラムもね。」

「ますます結構。気をつけていっついで。」

三人が扉を出て行くのを、黙って見守るワイス。そのうちに、チャンスとマーティも降りて来る。

「ワイス爺さん、畑つて裏口から行けるのかい？」

「ちよつと野菜をいただいていいですか。卵料理にあう野菜を見繕いたいのですが・・・」

「いいとも、好きに採りゃあええ。おつと、採り過ぎるなよ！大事な野菜じゃ。」

「はいはい。」

・・・

ワイスの宿屋からだいぶ離れた所まで歩いてから、サージが胸に仕込んだナイフダートを確かめる。歩きながら、ノーマが心配そうに目を細めた。

「あの爺さん、階下^{した}からあたしたちの話聞いてたわ。結構な魔力を持つてるようね・・・チャンスたち、大丈夫かしら。」

「あちきたちだって、大人数で襲われるかもしれないんだもん、どつちも危険は同じよ。まあ、最初から派手に先手を打てる分、気持ち楽だけど。」

エキシイが指輪をひらひらと踊らせる。サージはそんなエキシイを見て、確かめるように尋ねた。

「チャンスのお許しが出た、俺たちは好きにやっていい。そうだなエキシイ。」

「どしたのサージ、にやにやしちゃって。」

「チャンスのお許しつてのはな、倒した相手の持ち物を、いくらでもくすねていいってことなのさ。へへへ、久しぶりに腕が鳴るぜ。」

「好きにやれって・・・そういうことなのね。」

呆れてため息をつくノーマの声など聞こえぬように、サージはうきうきと短剣を弄んでいる。

「さあて、どうするかな。夕飯の前の、ごろつきどもの料理を・・・！」

・・・

一方チャンスたちは、小さな畑の中で、申し訳程度に植わった野

菜たちを睨んで思案にくれていた。

「なーんだ・・・野菜って、これっばかしかよ。しょぼいなあ・・・」

「贅沢はいけませんよチャンス、ご老人の一人暮らしなら、これでも多いほうでしょう。」

そう言いながら、マーティは苦笑いしている。他愛ない会話を続けながら、野菜類をもぎ取る二人。

「・・・へえ。」

幼い頃から野良仕事をしてきたチャンスにはすぐに分かった。

一見してちゃんとした畑のようだが、それら野菜の株はどこか別の畑から引き抜いてきて、急ごしらえでここへ植えられたものだ。根元の土が変に綺麗にならされている。

「これくらいですかね、チャンス。」

「そうだな。」

そうして裏口から小ホールへ戻る二人を、ワイスがにこにこしながら迎えた。

「さあさあ、わしの話を聞きたいのじゃろ、早くここへ座るがいい。話したいことは山ほどあるわい。」

チャンスたちはワイスの言う通り、野菜をテーブルに置いて椅子へ腰掛けた。

「その前に・・・」

ワイスはふつとチャンスを覗き込んだ。

「あんたら、どこから来なすったんじゃ。デュファ大陸の人間ではないようじゃが。」

「俺たちは北、森の大陸ヴァーナイから来たんだ。」

と言ったところで、チャンスはにやりと笑ってワイスを覗き返した。

「あんた商人だったんだよな。なら、あんたが扱った陶器の花瓶やゴブレットは、俺たちの大陸のものかもしれないな。」
「いろいろな土地から買い漁ったからのう、ヴァーナイ大陸のものも、もちろん大量に入っておったわな。」

自慢げに胸を張るワイスにチャンスはうなずき、マーティを見た。

「ほらな、やつぱり。」

「さすがですね、ワイスさん。」

にっこりとマーティも笑う。

「あのヴァーナイから、陶器の食器や花器類を取り寄せるとは。」

「わしとて一端いっぽしの商人じゃ、何でもやるわい。苦労して得た物ほど価値がある、そんな時代に生きたんじゃ。」

「いやいや、そういう意味じゃないよ、爺さん。」

チャンスは首を振って、ワイスを指差した。

「ヴァーナイ大陸はな、陶器に向く土がないから、金属の器や木の器が主流なんだよ。」

「！」

ワイスの顔が、一瞬硬直した。

「ヴァーナイにとって、陶器は高価な代物なんです。そのヴァーナイから陶器を取り寄せたら、恐ろしい値段がつきますね。庶民が買えるような値段では、もちろんありません。」

マーティは穏やかに、ワイスの持つ本を指差して付け加える。

「それに、本物の商人なら、そんな難しくて貴重な本を手にしたら、読むより先に売りさばくことを考えますよ。普通の人を読める内容でもないですし。」

「それ、古代語だろ。魔術師か神官くらいだぜ、それを読めるのはさ。」

「・・・」

「俺たちの相手が商人だから、商人仲間になりすまそうとしたところまでは上出来だ。けど、世俗の常識にや精通してなかったようだな。」

チャンスがずっと立ち上がった。ワイスは本をテーブルに置き、チャンスとマーティを代わる代わるに見据え、大きくため息をついた。

「・・・どこで、見抜いたね。」

「最初からさ。」

皺だらけの顔を歪めるワイスに、チャンスは笑顔のまま答える。

「埃の具合が妙に年が入ってる。十年来の空き家に、突然人が入り込んだみてえにさ。老人一人で切り盛りしてるからって言い訳はできないぜ、あんたが最低でも毎日歩かなきゃならねえ台所や寝室への通路だって、埃がたまり放題じゃねえか。第一、儲けが命の元商人が、そんな客嫌いな暮らしに甘んじるはずがない。俺たちが人目を避けて、街外れに宿を取ると読んだのまでは大したもんだが、これはちよつとやりすぎだぜ。」

「・・・」

「野菜もそう。こちらら畑仕事は達人でね、土を見るのは慣れてんだ。俺たちを二手に分断したかったのは分かるが、もっと上手いカラクリを考えてほしかったよな。」

マーティも立ち上がったのを見ると、ワイスもゆつくりと椅子から腰を上げた。本をみつめて、マーティを睨む。

「この本の理解者に出会えたのは幸運というべきじゃ。じゃがその理解者を葬らねばならぬとなると、幸運は悲劇に変わる。」

「誰に頼まれたか聞いても、教えていただけないんでしょうね、ワイスさん。」

ワイスはすつと後ろに下がり、細身の杖を取り上げて首を振った。

「その命が尽きる間際、冥途の土産に教てやろう。」

チャンスは静かに剣を抜いた。マーティは槍を抱え、静かにワイスを見つめている。

「あの嬢ちゃんたちも、今ごろ手厚いもてなしを受けとるじゃろうて。気の毒じゃが、二人揃って娼婦館行きじゃな。」

チャンスは再びにやりと笑った。

「このチャンス様の仲間たちを、見くびってもらっちゃ困るぜ。」

召喚術師

ブーベルデルの中心街、大通りにやってきたエキシイとノーマ。卵を選ぶため、切り裂き通りと呼ばれる肉売り専門の小路へ進む。サージはすでに別行動を取っている。

「・・・つけてきてるね。」

「そろそろくるわ、いいわねエキシイ。」

「任しといて。サージだつてとづくに準備完了だろうしさ。」

エキシイは楽しそうに微笑んだ。

大通りに入った辺りから、静かに、後ろから同じ速さの足音が続いてくる。

その足音は次第に距離を詰め、間もなくノーマたちの真後ろにくる・・・

ひゅっ、ひゅっ。

「が・・・っ」

背後で小さな呻き声が漏れ、続いてどさりと倒れる音がした。エキシイが振り返ると、体格のいい男数人が、綺麗にうつ伏せになって倒れていた。首に、小さな針のきらめきが見える。

「眠り針か。さすが自称大盗賊、見事ね。」

「さあ・・・サージは敵には容赦しない主義だから、眠り針じゃないかもよ。」

突然倒れた男たちに、駆け寄って揺さぶる数人の街人。が、すぐ

に驚いて悲鳴を上げた。

「し、し、死んでる、死んでるぞお!!」

エキシイが肩をすくめた。

「・・・ホントだ、毒針だった。」

そのごつた返す人込みの中、明らかに目付きの違う男たちが、ノーマたちの行く手からのつそりと現れ、近付いてくるのが見えた。ノーマは素早くエキシイに目配せをし、エキシイもにこりと笑ってうなづく。

「じゃノーマ、またここで。」

「ええ、あまり目立たないようにね。」

人込みの注意はすべて、あの男たちの死体に注がれている。ノーマはすつと体を滑らせ、人通りの少ない裏路地へ出た。腕輪に手を添え、同じく裏路地へ姿を現す人影を確認するノーマ。追ってきた男は4人。

「美女相手って言うから楽な仕事だと思ったが、仲間3人アツと言う間に殺しやがった。おまえら、手加減すんじゃないぞ。骨の何本か折るつもりでかかれ。」

「あら、私は殺してないわ。これからどうなるかは保証しないけど。」

ノーマの目がぎらりと光った。背に掲げた翼を開き、男たちの注意を引く間、腕輪から鋭い光が走る。

「石の精霊クブデスよ、我が名において命ずる！我に仇なす者どもを、その冷たき牙で食らい尽くせ！」

ノーマの言葉に、反応するものは何も無かった。一瞬怯んだ男たちだったが、すぐにノーマに突進していく。だが、どうも変だ。走っているはずなのに、なぜかひどく景色の流れが遅い。

「あ・・・！？」

「ぐっ、ば、馬鹿な！？」

何と男たちの体が、次第に石に変わろうとしているではないか。慌てふためく男たちを眺め、ノーマは冷たく言い放つ。

「石の精霊クブデスは、冥界の掃除屋と言われているわ。彼のまなざしに睨まれた物はすべて石となり、彼のご馳走に変わるのよ。」

「い、嫌だ、助けてくれっ、助けて・・・！！」

「わあ、足がもう・・・嫌だああっ！！」

「諦めなさい、ほら、クブデスが来たわ。」

ばきん。

男たちはその言葉の瞬間、全身を石へと変化させる。そして凄まじい勢いで石畳を突き抜け現れた、たくましく黒光りする石の手。それは男達をひとまとめに引つ摺むと、再び石畳の奥へと消えた。無論、石畳には何の跡も残さずに。ノーマは無表情で、そつと裏路地を後にした。

・・・

細い小路に入ったエキシィは、敵の姿が追いつく前に、すでに呪文の詠唱を始めていた。

「猛る炎の力持て、紅蓮の蛇よ、我が意に従え。」

閃く指輪の輝きが、鋭く石畳へと突き刺さる。

「いたぞ、こつちだ！」

「あの女だ、引っ捕まえろ！」

大柄で目付きの悪い男たちがエキシイを指差して叫んだ。エキシイは向かい来る数人の男たちへ、にこりと微笑みかけた。

「バイバイ。」

がばり。突然、石畳の隙間から染み出した紅蓮の炎が、男たちの行方を遮り、燃え盛る蛇へと姿を変える。

「うわああっ！」

一瞬だった。紅蓮の蛇は素早く男たちに襲いかかり、その燃え盛る体で男たちを締め上げる。巻き付かれた男たちは凄まじい炎に飲み込まれ、断末魔の叫びを上げながら絶命する。エキシイは炎を見つめ、冷たく踵を返して去って行く。

「残念ね。あちきに炎の魔術を使わせたら、死人が出ずにはすまないのよ。」

・・・

一方、サージは。

毒針の吹矢で数人の男を仕留めた後、サージは屋根の上に移動した。屋根の上で待機し、死体を回収にくる連中を待つ間、様々な仕掛け罠を体に仕込む。

「おつ、きたな。」

見るからにそうと分かる男たちが、死体をおもむろに担ぎ上げて走り去っていくのが見える。サージは屋根の上を器用に飛び回り、その連中を追った。そうして、人通りのない裏路地へ曲がった所を見計らい、再び吹矢の狙いを定める。

ひゅっ、ひゅっ。

「ひっ……」

どさ。どさ。風が吹いて狙いが反れたような気がしたが、三人の男は次々と地べたに倒れ伏す。サージは屋根から飛び下り、その六つの倒れた体へと歩み寄る。

「……おい、死んだ振りなんて、熊の前だけにしといた方がいいぜ。」

サージがせせら笑った。

すると、三人の男はゆっくりと立ち上がったではないか。首に巻いたスカーフの下に、厚い皮のベルトを巻いて、毒針を避けていたのだ。

「引っ掛かりやがったな、この溝ネズミ野郎め。死体から目を離さんだろうと思って、てめえを誘い込んだのよ！」

男の一人が勝ち誇ったように言う。サージは、その言葉が終わらぬうちにスツと身を屈め、男たちに突っ込んだ。

「速・・・!?!」

他の仲間たちがハツとした時、すでにサージは彼等の後ろにいた。すりぬけたその後に、ごとりと落ちた男の首・・・奇妙にぱくぱくと口を動かしている。

「うわああ!」

サージは、手に細い金属の紐を握っていた。それを振り回して血糊を飛ばすと、独特の嘲笑を浮かべて言い捨てる。

「長つたらしい演説なんぞ、聞く耳もたんね。俺とおまえらの間にあるのは言葉じゃねえ、生きるか死ぬかの勝負、それだけさ。」

「この・・・!!」

磨かれた黒い刀身の剣を振りかざし、男たちがサージに飛び掛かる。サージは少しも慌てずに、懷から円盤型のナイフを取り出し、振り投げた。

怯む二人の男たちの間をかすめ、円盤は彼等の後ろへ飛び去っていく。

「何だ、脅かしやがって!」

しかしすぐ後方、円盤はくるりと反転し、勢いを増して戻ってくる。その鋭い刃が、一人の男の首に深々とめり込んだ。がふっと血を吐き出し、男が崩折れる。

「なっ・・・!!」

「人の心配は後、後!」

仲間の死に直面した最後の男の隙を突き、サージは素早くその首を締め上げた。凶器は一切持っていない。男は驚きすくみ上がったが、組みかかってきたサージが、思いのほか小柄であることと、その軽装備を見て、勝機は自分にあると確信する。サージの体を逆に捕らえ、ぎりぎり締め上げていく。

「自分から捕まりにくるとは馬鹿な奴だ。ちびのおまえに、俺の首なぞ折れるものか！先に俺が、おまえの背骨をへし折ってやるぜ！」

「ふうん。てめえの自意識過剰をあの世で後悔するんだな。」

サージは、ふつと勢いよく、男を締め上げたままの腕を捻った。ごき、嫌な音が響き、男は呆気なく昇天する。

「この俺と力勝負しようなんぞ、一万年早ええな。戦利品は有り難くいただいておくぜ。」

合計六つの死体から、様々な品物をはぎ取ってザックに詰めるサージ。ふと、その男たちの腰に吊した、小さな水袋に目がいく。

「・・・これは・・・」

栓を抜いてみる。酒・・・のようだ。

「サージ、片付いたあ！？」

そこへ、ノーマとエキシイが駆け寄ってくる。血まみれの惨劇の場にも関わらず、場慣れしている二人は、さして嫌な顔もせずにいる。サージは水袋をエキシイに渡した。

「これ、普通の酒かな。これからドタバタやらかそうって連中が持つにしては、何だか変な気がしてな。」

「匂いは普通の酒と同じだね。今は分かんないわ、ちゃんと調べてみないと・・・」

「持つて帰りましょう、手掛かりになるかもしれないわ。早くチャンスたちのところへ戻りましょう・・・何だかすごく心配なの。」

「そうだな、お駄賃はたらふく頂いたしな。」

三人は転がる血まみれの死体を踏み越え、街外れの宿屋へと駆け出した。

・・・

最初に先手を取ったのはマーティだった。

「我が父トレフィノ大神よ、汚れし言霊から我が身を守りたまえ。」

槍から美しい白亜の光が広がる。その光に槍が満たされると、マーティはすっと深く腰を落として身構えた。

「ほう、おまえはトレフィノ大神の神官か。槍に印を施しておるとはのう。じゃが、わしの術も引けはとらんぞ。」

杖が異常なほどの力に満ちている。ゾツとする爛れた気配。マーティは身震いし、次いで、この独特の気配にハツとする。

「チャンス！ワイスさんは召喚術師です、気をつけて！」

「召喚術師イ？変わった職業だな。」

眉をひそめ、チャンスは剣を構え直す。ワイスはにやりと笑うと、スッスツと杖を振りながら、奇妙な踊りらしき足の運びを見せる。途端、あの恐ろしい気配の密度がぐんと増したような気がした。

「出よ、チャンクランプ！！」

ワイスの叫びとともに、声とも音ともつかぬ凄まじい軋みが起きた。思わず耳を押さえるマーティ。

その軋み音に怯んだ一瞬、目をしばたかせた間に、それは、そこに、いた。

「な・・・！！」

「・・・こいつあ驚いた、でっけえ蜘蛛だなア！」

牡牛の大きさ、深紅の剛毛、そして鋭い爪のついた足が八本。六つの目玉をぎらつかせるそれは、恐ろしい巨大蜘蛛、チャンクランプだ。

「こいつの糸は強いぞ、麻縄よりも丈夫じゃ。捕らわれんように倒せるか？麻痺毒の牙にやられて、痛みも感じぬまま死ぬがいい。」

ワイスは大きく笑った。

チャンスとマーティは、チャンクランプとの間、ぴたりと動きを止めていた。蜘蛛はもともと動くものに反応する・・・チャンスとマーティは、唇も動かさぬよう、静かに言葉を交わす。

「・・・一瞬だ・・・いいなマーティ。」

「はい・・・いきます。」

その言葉が終わった直後、マーティは素早く槍を返してチャンク

ランプへ突進した。

「いやあああつー!!」

チャンクランプの六つの目がマーティの槍を睨む。長い足を素早く動かし、白い糸をマーティ目掛けてぶわりと吹き付ける。マーティはその糸を右へ避け、手近の椅子をぶん、とチャンクランプの足元へ叩き付けた。大きく震え、がなりたてるチャンクランプ。

しかし次の瞬間、チャンクランプの巨体はずしりと地べたに這いつくばってしまっていた。何とチャンクランプの長い八本の足が、見事に切り落とされているではないか。

「何っ・・・!?!」

チャンクランプの背後、チャンスが剣を素早く振るい、べつとりとした黄色い体液を拭い落とす。

「・・・チャンクランプの目を引きつけ、先に動きを封じたか!すばしい奴め・・・!」

チャンスはワイスが悔しげにつぶやくのを聞きながら、フワリと跳躍してチャンクランプの頭に飛び乗り、鋭い一太刀をその眉間に突き刺した。凄まじい叫び声が起こり、ばたつかせる巨体から、まるで水でも流したかのように、白い糸がどろどろとあふれていく。チャンスはとん、と床に着地し、素早くワイスに飛び掛かった。が、ワイスはそのチャンスの剣を、杖でいなして脇へと逃げた。

「身軽じゃねえか爺さん、次の手はあるのかい?」

「次の手なぞ、用意する必要はないわい。」

「何・・・」

しゅつ。チャンスの視界に白い何か走った。その場から後方へ、トンボ返りで飛び移るチャンス。すると、今までチャンスがいた場所に、白い糸の鳥糞が恐ろしい勢いで降り注いだではないか！チャンスを描え損ねた代わりに、大きなテーブルが鳥糞に絡まり、それは軽々と天井へ吸い寄せられていった。頑丈なテーブルは、恐ろしく強い牙で粉々に噛み砕かれ、チャンスたちへ挑戦的に降り注いだ。

「ちきしょう、まだいやがったのか！」

しゅつ。天井に張り付いた、子供くらいの大きさのチャンクランプの糸が、マーティにも襲いかかる。素早く転がり出てその鳥糞を避けるが、それは息つく間もなく降り注いでくる。

「ふははあ、チャンクランプは対の蜘蛛、おまえらが倒したのは雌の方じゃよ！本当の実力者は、雄のチャンクランプじゃ、糸に引っ掛かったらすぐさま猛毒の牙の餌食じゃぞ！」

狂喜の笑いが響き渡る。その間、チャンスたちは糸の鳥糞を避け続けて飛び回っていた。だが、チャンスとマーティは少しも慌てていない様子だ。マーティは逃げながら、小さく言葉を発した。

「父なるトレフィノ大神、悪しきを砕く雷の力を、我が友チャンスの刃へ与えたまえ。」

マーティの白い光に満たされた槍から、すらりと何か閃いて、チャンスの剣に染み込んだ。じんわりと、鈍い輝きを放つチャンス

の剣から、小さな火花が、ぱしぱしと飛び始める。

「無駄な足掻きじゃ、チャंकランプ、一気に片付けてしまえ!!」

そのワイスの指示に、チャंकランプは二本の糸の鳥糞を、チャンスとマーティに同時に浴びせかける。

「行けえ!!」

チャンスとマーティは、自分たちの武器を鳥糞に絡め、ぶん、とチャंकランプに投げ返した。勢い付いたそれは見事に、チャंकランプの口と頭にそれぞれ突き刺さった。

凄まじい悲鳴のような音がし、絶命したチャंकランプの死骸が、天井からぼとりと落ちてくる。そこから剣と槍を引き抜き、ワイスに素早く突き付けるチャンスとマーティ。

「糸に触れば牙の餌食、いい助言だったよ。あいつに絡まったものは、何でも口に入っちゃうんだもんね。」

「そろそろ潮時ですよワイスさん、終りにしませんか。私たちだって、無闇に人を傷つけたくはありません。」

「く・・・」

そこへ、ようやくサージたちが駆け込んでくる。床に転がった二つの蜘蛛の死骸を前に、ノーマが金切り声を上げてサージに抱き付いた。

「いやーっ、く、く、蜘蛛、蜘蛛!」

「何よノーマ、蜘蛛嫌いだっけ。」

「ひゃあ、でっけえなア！決着はついちまってるようだな、チャンス。」

チャンスはうなずき、ワイスを見た。

「どうだい、俺の仲間たちは。敵だらけの街から、無傷でケロリと戻ってきやがるだろ。この俺たちに、まだ、牙をむくかい？」

二つの刃を突き付けられながら、ワイスはチャンスの顔を見て、静かに首を振った。

伝説の毒草

こうこうと照る月明りのもと、一人の男が巨大な屋敷の正門から、堂々として行く。静かな屋敷には、たくさんの小間使いが行き来しているが、皆音もなく歩き回るせい、まるで無人のような静けさだ。男は二階の角の部屋の扉を開けた。

「遅かったな、バイドル。」

ゆったりと椅子に腰掛けた男が呼ばわった。男、バイドルは、空いている椅子を引き寄せて腰を下ろした。

「・・・オーネウス、これからちよつと一悶着あるぞ、覚悟しておけ。」

「一悶着？」

「ナプが、流浪の冒険者一行に、悪魔の酒を永遠に葬り去るよう、依頼したらしい。」

椅子に座っていた男、オーネウスはにやりと苦笑した。すると扉が開き、そこに、三つのデカンターを携えた女戦士が入ってきた。

「またナプなのかい。頑固な女だねえ。」

「・・・マハンダ・・・」

「あいつには悪魔の酒でも、あたしたちにゃ天国の酒さ。あんまり邪魔するようなら、さっさと仲間にするか、殺しちまおうよ、オーネウス。」

「まあ待てよマハンダ。俺はそれより、その流浪の冒険者一行って奴等の方に興味があるぜ。楽しいじゃねえか・・・昔の俺たちみたいだよ。」

オーネウスのその言葉に、バイドルはふつとうつむく。

「そいつらがここまでこれりゃいいがな。無論・・・これねえように邪魔してやるが。なあマハンダ。」

「エーネツカ様亡き後、新しいご主人様のご機嫌を損ねないためにも、あたしたちの愛しい天国の酒のためにも、大いに邪魔してあげるよ。」

テーブルに置かれたデカンターを、三人がそれぞれ持つ。マハンダはバイドルを見た。

「・・・バイドル。おまえだって、もうこの酒がないと生きてはいけないんだ。変な考えなんか、持つんじゃないよ。」

「・・・分かっている。」

「愛すべき冒険者たちの健闘を祈って。」

オーネウスがにやにや笑いながら、デカンターを掲げた。三人はデカンターの中身をぐっと一息に空ける。渦巻く豊かな気分と、フツフツと沸き上がる力強さ。心地好い壮快感。バイドルもいつしかその魔性の感覚に捕らわれ、いつものように深く深く、罪悪感を心の奥へ沈めて行った。

・・・

チャンスとマーティ、そしてサージが座るテーブルに、静かにワイスも座っていた。ワイスの杖は、念のためマーティが預かっている。チャンクランプの二つの死骸は、いつのまにか消え失せていた。

「わしは、このブーベルデルの東にある森に住んどる召喚術師じゃ。街へはたまに酒を買いにくる程度じゃが、このわしが召喚術師じゃと見抜く街人なぞ、誰一人おらなんだ・・・あの男を除いては」

ワイスはすでに敵意を失い、淡々と流れるようにつぶやき続ける。

「バイドルというグラップ人の男は、わしを呼び止めてこう言った。『あんたは魔術を使う人間だな。あんた好みの素晴らしい出物があるんだが、見て行かないか』・・・とな。」

「それがひよつとして、『天と地の血脈』って本かい？」

チャンスの問いに、ワイスはうなずく。

「この本は高価な代物じゃ・・・何せ世界に十冊しかないという幻の一品じゃ。魔導を生業とする者ならば、喉から手が出るほどの知識書じゃ。バイドルは、俺の依頼する仕事を手伝ってくれたら、この本をわしのものにしていいと、言ってきたんじゃ・・・」

「そしてあなたは、申し出を受けた。」

「そうじゃ・・・バイドルの言う『仕事』は、いつも人を脅かしたり、痛め付けたりすることじゃった。わしも最初は胸が痛んだが、次第に慣れてしまったようじゃ。愚かなものよ・・・」

「愚かついでもう一つ教えてくれよ。」

サージが頼杖をついたままワイスを睨む。

「バイドルが親玉じゃないことは、爺さんも知ってるだろ。」

「無論じゃ。」

「エーネツカⅡヘルマンって商人が、バイドルの主人で、影の黒幕

なんだろ？そのエーネツカって野郎のアジトの場所、爺さん知らねえか？」

ワイスは、小さく瞬きをしてサージを見、首を傾げた。

「バイドルの主人は、もう、エーネツカではないかもしれん。」
「えっ？」

チャンスとマーティも身を乗り出した。

「バイドルの口から、ここどころエーネツカの名が出んのじゃよ。以前なら、必ず口にしておったのに。その代わり、最近しきりと『エバ様』という言葉を聞くのう。」

「・・・エバ・・・女か？」

サージが疑わしい目をしてワイスを見た。

「俺たちを担ごうとしてやがるんじゃねーのか、爺さん。」

「・・・杖を預けてまで、あんたがたに齒向かいやせんよ。まだまだわしは死ねんでのう、この本の謎を解くまでは。」

ワイスは力なく微笑んだ。

「じゃがわしは、ほどなく誰ぞに殺されるじやろう。バイドルの命令を遂行できなかった責任をとってな・・・」

「・・・」

チャンスとマーティは顔を見合わせた。サージも、どこか決まり悪そうに、ワイスのうつむく横顔を見ている。

「お待たせ、食事ができたよ！」

「野菜たっぷりオムレツと、茹でた腸詰の盛合わせ。ラムによく合うわよ。さあどうぞ。」

ノーマとエキシイの持つ大皿から、素晴らしくいい匂いが漂ってくる。エキシイはワイスの前に皿を置き、デカンターを添える。

「楽しみにしてたもんね、爺ちゃん。美味しいラムを買ってきたよ。」

「・・・嬢ちゃん・・・」

ワイスはエキシイの微笑みに、一瞬言葉を失う。チャンスはにこりと笑うと、ワイスのデカンターに豊潤な香りを放つラムを注いだ。

「まあ飲めよ。後のことは何とかなる。」

「・・・しかし・・・」

言い淀むワイスの皿の上に、ふつくらとした艶やかな腸詰を乗せてやりながら、サージが仏頂面のままつぶやく。

「…ふん。俺の仲間たちや気のよすぎる連中ばかりだよ。俺アいつもそのとばかりで、まったくもってうんざりすらあ。」

ノーマがくすつと微笑んだ。

「憎まれ口ばかり叩くけど、気のいいのはサージも同じよね。ワイスさんのために、わざわざ柔らかい腸詰を選んであげたくせに。」
「ノーマッ、オムレツ！お喋りはいいから早くオムレツ取ってくれよ！」

「はいはい。」

たっぷりの野菜がソースとなつてオムレツを彩っている。ワイスはなぜか、とても暖かな気持ちに沸き上がってくるのを感じた。

「ところで、コレの正体を見てみない？」

エキシイが、小さな水袋をテーブルにのせた。それはサージが片付けた連中が持っていた、酒の入った水袋だ。

「どうだったエキシイ？」

サージが尋ねると、エキシイは水袋の栓を開けて、一枚の皿にそつと注ぎ入れた。そうしてそれに手をかざし、呪文を唱えた。

「我が手の元、すべての始まりへ時よ戻れ。」

エキシイの魔法の指輪がふわりと白い光を導き出し、皿に広がった酒がその光に満たされる。それは次第に、酒ではない形に変形し始めていく。エキシイはつぶやく。

「この魔法は、時を操る魔法よ。今この皿の上の時間だけを過去に戻してるの。この酒の正体がすぐに分かるわ。」

「へえ、便利な魔法だなあ。」

「ただし命ある物には通用しないわ、この呪文はあくまでも物体だけ……つと、そろそろね、ほら！」

エキシイが手をくつと握り締めた。すると、皿の上の時間も、ぴたりと静止したようだ。

「……これが、バータ・ラカッティよ。」

そこには、小さくて赤い一輪の花が横たわっていた。
皆が身乗り出し、皿の上の花を凝視する。マーティが眉をひそめた。

「・・・こんな小さい花が、たくさんの人を不幸にするなんて・・・」

「綺麗な花なのにね。」

「みんな覚えた？じゃあ元に戻すわよ。」

エキシイは、パツと手を開いた。途端に、それまで皿にあったバータ・ラカッティは消え去り、再び酒が皿の上に現れた。エキシイは椅子に寄り掛かって息をつき、水袋を取り上げてつぶやいた。

「バータ・ラカッティは必ず群生するの。摘み採ると数時間で枯れてしまう性質を持っているから、その群生地と加工場は、さほど離れていないはずだわ。」

「爺さん、このことは知ってたかい？」

チャンスがそう言っただけを見ると、ワイスはわなわなと震えながら、吐き捨てるように叫んだ。

「何と・・・何ということじゃ、バータ・ラカッティじゃと！？そんな悪魔の毒草を使って、人を苦しめる奴等に、わしは尻尾を振っておったのか！」

ワイスは頭を抱える。ノーマは、そんなワイスに、そつと微笑みかけた。

「もう振るつもりがないなら、いいじゃないの。気付いて悔やめる

だけ、あなたは救われてると思うわ。」

マーティも力強くうなづく。

「悔い改める心を持てば、その時から神の祝福を受けることができるのです。ワイスさんに汚れない光が注がれる日は、そう遠くないことでしょう。」

「けっ、大袈裟だなア。」

そうしてようやく食事となり、エキシイが台所へ水袋の酒を捨てに行って戻る間、ずっと黙り込むワイス。心配そうにマーティが見守る中、ワイスはふと、フォークを持って、ぽつりとつぶやいた。

「・・・アンビーカの街へ行ってみるといい。」

「え?」

チャンスが顔を上げると、ワイスは、オムレツを一口頬張って、もう一度つぶやいた。

「アンビーカの街には、このデュファ大陸随一の商人ギルドがある。そこに行けば、エーネツカの情報が聞けるかもしれん。奴の圧力がかかっていなければの話じゃが・・・」

「商人ギルドか・・・尋ねる価値はありますね、チャンス。」

「そうだな。よし、飯食ったら、すぐに出発するぞ。今の内にたらくく食っておけよ!」

暖かくて美味しい、賑やかな食卓。天涯孤独のワイスは、初めての暖かさに触れて、しばらく言葉もなく、ラム酒をすすりながら、思いに浸っていた。

・・・

そうして食事を終え、旅支度を整える五人。杖を返してもらった
ワイスは黙って、その慌ただしさを見守る。

「よし、こっちは準備完了だぜ。」

「あちきもよ。」

ザックを背負い、チャンスはワイスに振り返る。ワイスはうなず
いて、目を閉じた。

「・・・気をつけて行かれよ。」

するとチャンスは、にやりと笑ってワイスの肩を叩いた。

「俺たちが仕事を片付けさえすりゃ、あんただって、大手をふって
街を歩けるようになる。けどそれまでは、あんたには身を隠す場所
が必要だ。」

「?・・・あ、ああ・・・」

「港の裏通りの、ナプの店を知ってるだろう。そのナプさんは、
俺たちの仕事の依頼主だ。あんたはそこに隠れて、ナプさんを守っ
てやってくれ。」

「・・・でもわしは・・・」

「ナプさんが依頼主だってことは、敵も知ってるんだ。もし襲われ
たら、いくらナプさんがグループ人でも、たった一人じゃどうにも
ならねえ。あんたの召喚術で、彼女を守ってやってくれ。」

ノーマが、腕輪に手を添えて何事かつぶやくと、ふわりと美しい
蒼き光が飛び出した。

「ナプさんへ、風の精霊で言伝をしておくわ。彼女なら喜んで、あ

なたを迎えるはずよ。」

微笑むノーマの後ろ、サージがそつぽを向いたまま言い捨てる。

「まだ死ねねえ身なんだろ。だったら罪滅ぼしの代わりに、素直に行つとけよ。」

ワイスは、チャンスに握手を求めた。チャンスはすぐに、その手を取って握り返した。

「・・・すまぬ、こんなわしのために・・・」

エキシイが笑ってワイスの杖をつついた。

「いいんだよ爺ちゃん、ナプさんの美味しい料理で、ちつとは太っておきなよね。」

「よし、それじゃ出発するぞ!」

チャンスたちは古びた宿屋と、笑顔のワイスを後に、一路アンビ―カの街へと向かって行った。

アンビーカへの街道

豊穰の女神エーラを奉る神殿跡が、最も多く点在する地、アンビーカ。

古代語で「始まりの地」という意味があり、女神エーラが最初に降り立った『降臨の地』と言われている。女神の足跡からは稲穂が伸び、その体の触れた木々や草からは、素晴らしき果実たちが実を結び、かき鳴らす豎琴の音色にのって、穏やかな風が吹いて太陽を導く。アンビーカでは特に畜産業が盛んで、女神エーラの豊穰祭とともに、様々な種類の家畜の競り市が、一月にわたって行われることで知られる。

「・・・だつて。」

ブーベルデルの街でもらった観光案内の地図を眺めながら、チャンスがつぶやく。

「降臨の地ねえ・・・いい名前だな。お宝がワンサとありそうだな。」

サージがにやにやと鼻の下を伸ばした。

「チャンス、アンビーカの豊穰祭はいつです？商人ギルドがてんてこ舞いしてちゃ、情報なんて聞けませんからね。ちゃんと各地の豊穰祭の日程を書いた別紙が入ってましたよね。」

「そういえば・・・あれっ？」

チャンスはわたたと観光地図をひっくり返し、苦笑いして肩をすくめた。

マーティがチャンスを睨む。

「なくしましたね。」

「・・・ま、いいってことよ。行けばなんとかなるってもんだ。」

満天の星空の下、手元のランタンの灯りを頼りに、さらに南のアンビーカーへ向けて進む一行。南への街道は大きくて、きちんと整備がなされている。夜のせいかな通りはない。

「・・・何か聞こえなかったか？」

ふと、サージが立ち止まって耳をすました。

サージは目を閉じ、音の方向を探る。バンタム人の聴覚は天下一品だ。

「・・・こっちだ。」

指差した方向は、街道の先。これからチャンスたちが進もうとしている南だ。さらに目をつすく開き、音を捕らえる。

「すごく音が響く・・・洞窟かな・・・あつ、剣の音が聞こえた、争ってるみてえだな。」

「それはいけない、早く行って仲裁しましょう！」

「バカ、マーティ！面倒ごとはごめんだぞ、イザコザはかなり先の方で起きてるんだ、そこまで走っていきうってのか!？」

「その通りです！」

「阿呆、勝手にやってろ、俺は知らねーぞ。」

すると二人の耳を引っ掴み、エキシイが甲高い声で叫んだ。

「ちょっとあんたたち何やってんのよ！チャンスとノーマ、とつくの昔に走っていつちやったよー！」

ハッとして二人が振り向くと、すでにチャンスとノーマの姿がない。エキシイも叫んですぐに、南の街道沿いに駆け出していく。

「こらっ、俺を置いていくなっ！マーティ、おまえのせいだぞ、チンタラ理屈述べてやがるから・・・！！」

「何ですって、サージ！あなたが最初から素直になっていれば、私だって説教なんてしやしませんよっ！！」

「うるさいっ！あんたたち、それ以上騒いだら沈黙の魔法かけるわよっ！」

「・・・」

エキシイの一喝で、サージとマーティはぴたりと口を閉ざした。

三人が黙々と駆けて行き、そろそろ息が辛くなってきた頃、ようやくチャンスとノーマの姿が見えた。その先には、大きく口を開いた洞窟が、暗闇に吠える悪魔のように佇んでいた。

「チャンス、ノーマ！」

エキシイが叫んで駆け寄ると、チャンスは黙って、洞窟の方向を指差した。

「・・・え？」

見るとそこには、幾人かの死体が転がっていた。そして何か大きな荷車が破損した形跡があり、何者かがそれを引きずって、洞窟の奥に消えたような跡が残っている。

「・・・砂利のせいで足跡は分からないね。」

「荷車の車輪が、あんな所に・・・。相当の重量の荷車を引きずっていったんですね、この跡を見れば分かります。」

「死んでる連中の財布や宝石は、無傷で残ってるのよ。荷車の荷物だけが目当てだったのかしら・・・。」

「じゃあ、追剥ぎじゃねえな。追剥ぎ連中は何でも手当たり次第にかっぱらっていつちまうからな。」

チャンスは、仲間たちの声を聞きながら、死体のひとつひとつをじっと見つめている。

「どうしたんだよチャンス、珍しいものでもあるのか？」

「いや、傷を見てなんだ。外傷は主に剣の切り傷だけど、どうやら本命の『獲物』は別だな。」

「というと？」

チャンスは、ひとつの死体の首元を指差した。サージが覗くとそこに、爪で引つ掻いた程度の、赤い傷が走っているのが分かった。サージはすぐにハッとして息を飲み、突然真剣なまなざしで傷を凝視し、つぶやいた。

「・・・この手口は・・・恐らく『毒師』の仕業に間違いない。こいつは手強いぜ、チャンス。」

「『毒師』？」

ノーマがきょとんとして聞き返すと、サージは大きくうなずいた。

「手袋をはめたマントの男、もしくは女。小さい時から毒に慣らされていて、体自体が強烈な毒素を帯びてるんだ。刃物を使わない殺

人業が主で、体術の猛者が多いのも特徴だ。奴等が使うものといったら、自分の爪くらいってのが相場だぜ。」

「爪痕か、これは。」

「多分な。奴等にキスされただけで全身が麻痺状態になるって言われてるから、爪で引つ搔かれりゃ簡単に死んじまう。毒師の仕業に見せないために、殺した後の死体にわざと剣の傷をつけるのさ。奴等の常套手段だな。」

「さすがに詳しいですね。」

感心してマーティが呻くと、サージはまだ死体を見たままうなずく。

「だいぶ前、俺が盗賊団にいた頃、ひとりだけ毒師がいたんだ。同じバンタム人だったから結構仲良くやってたんだが、首領の気を損ねちまってさ。奴は首をはねられたよ。もつとも・・・その血を浴びた首領も側近も、強力な毒氣にあたって即死したけどな。」

エキシイがぶるつと震えて肩をすくめる。

「・・・となると、戦うなら魔法戦ってわけね。」

「そういうことね。」

ノーマがしつかりうなずく。

「いずれにしろ、大きな荷車を引きずってるんだから、そう遠くへは行ってないはずだ。後を追うぞ。」

「相手が悪いぜ、チャンスう・・・」

渋るサージ。

「待つてください、これ・・・！」

死体の持ち物を確認していたマーティが、小さな鋼性のプレートをチャンスに差し出した。

「これは商業用の通行証だな。」

チャンスが言うと、マーティはうなずいて、隅に押された刻印を指差した。

「アンビーカの商人ギルドの印が刻まれています。この方達はアンビーカの商人ですよ。」

「そうになると、相手が悪いからってワガママは言えないねサージ。覚悟決めなよ。」

エキシイが呆れてつぶやくのを聞いて、サージはふんと鼻を鳴らした。チャンスはその商業証を胸にしまい、洞窟を睨んだ。

「アンビーカで、何か起きてるんだな。でなければ、これから起ころうとしているんだ。こりゃあ難儀な旅になるぜ。」

チャンスたちは、手元のランタンを頼りに、引きずられた荷車の跡を追って、洞窟へと進んで行った。

洞窟は広く、足音が遠くへ染みるように響いて行く。時々洞窟の天井から水が滴り落ち、肩口や頭に降り注いできて、五人をギョッとさせた。

「うん？・・・何か匂うよ。」

エキシイがつぶやいた。

「何の匂いだ？」

「・・・何だろう、洞窟の匂いじゃないわ、何か別の匂いよ。近いわ・・・」

「ランタンだけじゃこの暗闇は無理ね。光の精霊に照らしてもらいましょう。」

ノーマはすらりと腕を振り、腕輪に手を添えて目を閉じた。

「光の精霊アーレイよ、我が名において命ずる。輝くその力にて暗闇を照らせ。」

一瞬、ぱちんという弾けた音がしたかと思うと、突然辺りが真昼のように明るく照らし出された。

「あ・・・」

エキシイの感じた匂いの方向には、無数の黄色い茸が群生していた。まるで黄色い毬のようにきれいな艶を帯びている。そして、その茸の向こうに、細い横穴が掘ってあった。

「あちきを感じたのはこの匂いよ、間違いない。でも、こんな岩だらけの場所に、よく茸なんて生えるなア・・・」

感心して茸に見入るエキシイ。よく見ると、荷車を引き摺った跡も、ちょうどこの地点で途切れているようだ。足跡は相変わらず残っていないが、ここで大きな荷車を解体したような跡も残っていない。まるで、荷車が忽然と姿を消したかのようだ。首を傾げるマーティにはお構いなしに、サージは横穴の方に気を取られている。

「おい、見ろよあの横穴、掘り跡がずいぶん新しいぜ。最近できたものらしいな。行ってみようぜ。」
「待て!!」

サージが一步踏み出そうとした瞬間、チャンスがとつさにサージのマントを引っ掴んで抱き上げ、ザツと後ろに飛び退いた。

「な、何だよチャンス、びっくりしたア!」

「何か変だぞ、おい、下をよく見てみる。」

「え・・・」

ふと、茸の生えている地面に目をやると、腐った木片や布きれが、山のように積み上がっているようだ。そしてその間から、どす黒く染まった白骨が、恨めしげにチャンスたちを睨んでいた。マーティはハッとした。

「そうですよ、荷車はやっぱり、ここで解体されているのではないでしょうか。」

「あの茸は、そのためのものだ・・・?」

「ええ、掘り跡の新しいあの横穴を塞ぐにしては、この木片や人骨の腐敗の度合いは、ひどく不釣合です。この茸には、強力な腐敗作用があるのでしょう。試してみましようか。」

マーティはそう言うと、自分のザックの中から、予備にとつておいた小振りの麻袋を取り出し、遠くの茸へ投げ付けた。麻袋が茸の群れに落ちたその瞬間、黄色い胞子が勢いよく噴き出した。

「あっ・・・!」

一瞬だった。麻袋が黄色い胞子に包まれたかと思うと、一気にぐ

ずりと腐って崩れ、そこに新しい黄色い茸が、争うように生え始め、麻袋は跡形もなく、茸に覆い隠されてしまったのだ。

「・・・何てこと、あの胞子に触れたらきつと、人間もアツと言う間に腐って、茸の養分になってしまふのね。」

ノーマが震える声でつぶやく。マーティは眉をひそめ、膝まづいて手を組んだ。恭しく掲げた槍に刻んだ聖なる印が輝き始める。

「偉大なる我が父トレフィノ大神よ、志し半ばで倒れた旅人たちの魂を清め、その御元へ導きたまえ・・・」

美しい光が槍からあふれた。その光は朽ちた白骨たちに降り注ぎ、染み付いた苦しみの魂は、静かにフワリと立ち上ぼると、ゆつくりと消え去っていった。マーティはその様をじっと見つめ、神々しい光が消えるまで、瞬きひとつしなかった。

チャンスは続けてエキシイに合図を送る。エキシイはきょとんとしたが、すぐにうなずき返して構えた。鳶色の宝石をあしらった魔術師の指輪を閃かせながら、透き通る声で呪文を詠唱し始める。

「猛る炎の力もて、紅蓮の猛火よ、我が意に従え。」

エキシイの両手から、凄まじい炎が吹き出した。真紅の炎は舐めるように茸の絨毯に広がって、瞬く間に、胞子ともども茸をすべて焼き尽くした。その土壌となっていた木屑や白骨も、灰も残らず焼失する。

「ん？」

サージはその白骨の中に、一瞬、人間のものではない骨を見た。

「おい、今その骨の中に、牛の骨が混じってたみたいだぜ。」
「牛だって？」

「ああ、ねじれた角が見えた。あの手の角の形は確か・・・マール牛かナブ牛じゃねえかな。」

「マール牛って、最高級の牛の代名詞よ。このデュファ大陸原産っていう・・・」

マーティが槍を抱えたまま首をひねった。

「豊穡祭できちんと競り落とされた牛なら、殺さずに連れ戻す方が賢いやり方ですよ。また次の市で売ればいいんですから。」

その言葉の間、横穴の脇を覗き込んだノーマが息を飲む。

岩と横穴の隙間、ちょうど街道からは死角になる位置の空間に、大きな牛が倒れていたのだ。死骸かと思ったノーマだったが、その牛がゆっくりと息をしているのが分かる。眠っているにしては、少し様子がおかしい・・・眼はうつすらと開き、呼吸が通常よりも細かい。

チャンスとサージがノーマの後ろから牛を眺めた。

「・・・あの商人たちが引いていた牛・・・だな。」

「多分、毒師にやられたんだろう。勝手に逃げ出さないように麻痺させてるんだ。この状態なら見張りもいらねえしな。」

「・・・横穴に、入ってみるか。どこへたどりつくか楽しみだ。」

チャンスは厳しい瞳で横穴を見つめた。

「サージ、エキシィ、ついてこい。」

「おう。」

「はい。」

マーティとノーマが顔を見合わせた。

「チャンス、私たちは？」

「おまえたちは、アンビーカに向かつてくれ。先に行つて、街に何
が起きているのか把握するんだ。明日の昼には合流できるはずだ。
いいな。」

チャンスはそれだけ言うと、さつさと横穴へ向かつて行つた。サ
ージもそれに続き、エキシイも入つて行く。エキシイは少しだけ振
り返り、すまなそうにノーマを見て、手を振つていった。ノーマは
口をすぼめてうつむいてしまう。マーティは困つた顔をして肩をす
くめた。

「・・・行きましょうノーマ、ああなつたらもう誰もチャンスを止
められませんよ。」

ノーマはマーティの言葉に、黙つて小さくうなずき、ゆつくりと
二人は歩き始める。

「何だか悔しいわ。」

ノーマはふと、そう言った。

「ああいう狭いところに、私は入っていけないもの。時々、この翼
が邪魔でしょうがないわ。」

「・・・ノーマ、神は、人に必要なものをお与えにはなりませんよ。
一人の人が持つものは、すべてその人に必要なもの。それを疎んじ、
それを損なう時、その当人と同じく、神も嘆き哀しむでしょう。」

「・・・」

「私だって、チャンスについていきたい。でもチャンスには、リーダーとしての考えと責任があります。私たちに課せられた使命は、彼からの信頼の証し。頑張りましょう。」

マーティの微笑みに、ノーマはやがてそつと微笑み返し、うなずいた。洞窟を越えて、アンビーカへの道に行く。チャンスたちの身を案じながら・・・

毒師フィン

恐ろしい腐敗毒を持つ茸の群れを焼き払い、狭い横穴へと進んで行くチャンス。その後を追いながら、サージとエキシイは言葉もない。灯りをつけることもできないそこでは、手探りで進むしか方法はなく、湿った岩壁の感触にエキシイは顔をしかめていた。夜目のきくサージに、背中から合図を送ってもらいながら進むチャンスたちは、やがて広い石畳の回廊へとたどり着いた。ひんやりとした、カビ臭い空気が漂う。

「……ずいぶん変な場所へ着いたもんだな。ひょっとして、どこかの遺跡の内部かもしれないぞ。」

「ねえサージ、人の気配は？」

エキシイに言われ、サージはすつと耳を済ます。が、聞く限りでは、何の物音もなかった。

「怪しい気配はしないぜチャンス、灯りをつけてみないか。」

「エキシイ、頼む。」

エキシイは返事の代わりに、パチンと軽く指を鳴らした。チャンスの手にするランタンに、パツと炎が点る。

「わあっ……！」

サージが思わず声を上げそうになる。チャンスが必死にサージの口を押さえるが、そのチャンスでさえも、一瞬心臓が飛び上がるほどに驚いた。

「・・・何だこりや・・・石像じゃないか！」

その広い石畳の回廊は、一定間隔に窪みがあり、その窪みの中に、まるで待ち伏せるかのように戦士の石像が置かれていたのだ。その形相たるや、今にも飛び掛かってきそうなほどの迫力だ。その石像の台座には、古代文字がいくつか刻まれているようだ。驚きで声も上げれずにいたエキシイは、ようやく我に返り、その台座の字を見つめた。

「・・・第二十五、豊穰の女神を護りし百の戦士・・・だって。台座の真ん中の大きい数字が、この戦士像の番号らしいね。・・・百のうちの二十五人目って意味になるのかな。」

「てことは、この回廊には百の戦士像が並んでるってことだよな。まさか、一斉に動き出したりしねえだろうな。」

サージの不吉な言葉に苦笑しながらも、チャンスは回廊の奥を睨んだ。

「・・・遺跡に間違いなさそうだな。でも問題は、なぜあの横穴が、ここに通じていたかってことだ。荷車を襲った奴等も、きっとここにいる。遺跡にも興味はあるが、まずは荷車盗人の方を調べてみないとな。」

「おいチャンス、足跡があるぜ！」

サージが床の一部を指差している。見るとかすかに、湿り気を帯びた砂利のついた足跡が、回廊の奥へと走っているようだ。チャンスはうなずき、今度はサージに先頭を歩いてもらう。遺跡に付き物の罠などを見破るのは、自称大盗賊のサージの仕事だ。

石像の並ぶ回廊をしばらく歩いて行くと、やがて回廊は鋭く左へ折れていた。

「気をつけるサージ、曲がり角だ。」
「しっ……」

サージが息を潜め、すぐさまランタンの火を吹き消す。何か感じているようだ。そしてそのまま振り返らずに、チャンスへ合図を送る。

『何か、いる』

チャンスの手が剣の柄にかかる。エキシイも息を飲んで、魔術師の指輪を握り締める。サージは懷を静かに漁り、小さな丸鏡を取り出した。そつと曲がり角の隅に鏡を掲げ、その反射で奥の様子を伺う。サージは少しずつ角度を変え、じつと食い入るように鏡に見入るが、ようやく振り返ってうなずいた。

「この先に扉があるぜ。」

「扉？」

「ああ、行き止まりだ。さっきの気配は見張りか何かだろう、今は姿が見えねえ。行くなら今だぜ。」

「……よし。」

チャンスたちは足音を潜め、静かに奥の扉へと向かった。扉からは、わずかに灯りが漏れていて、三人が聞き耳を立てると、小さな話し声が聞こえてきた。

『……いつまで、こういう生活が続くんだ……』

『仕方無かるう、わしらの力では、もうどうにもならん。』

『フィンに、任せるしかない。』

『……あんな流れ者に頼って、本当に大丈夫なのか。金だけ持ち

逃げでもされたら・・・」

話し声は、いずれも男の声だ。チャンスたちは顔を見合わせた。

「どうも、盗賊とかいう雰囲気の声じゃねえな。どう聞いても、街の寄り合いみてえだ。」

「・・・流れ者のフィン・・・に、何を頼んだのかしら。ねえ、奥に入ってみたら？」

と、エキシイがつぶやいた、その瞬間。

三人は一斉にゾツとして振り返った。小さく風が吹いたような気がしたその時には、もう背後に、何者かの影が立ち尽くしていたのである。振り返った姿のまま、扉の前で身動きもできないチャンスたちの前、黒いローブを羽織った影が、恐ろしいまでの威圧さを放って、チャンスたちを見据えている。

「・・・貴様ら、何者だ。」

見掛けの割に、甲高い声が漏れた。らしくもなく震えながら、エキシイが小さく答える。

「・・・あ・・・あちきたちは、馬車盗人を追ってきたの、ただの旅の冒険者よ・・・」

「馬車盗人？」

影が問い返す。チャンスがうなずいた。

「アンビーカの街へ抜ける街道の洞窟で、アンビーカの商人が三人も殺され、荷車が奪われていた。事情があって、俺たちもアンビー

力の商人ギルドへ用がある手前、黙っているわけにはいかない。消えた荷車の跡をたどっていったら、ここへ行き着いたってわけさ。」

影は大きく一步踏み出した。いちばん影に近いエキシイがひっと息を吸い込む。

「・・・アンビーカの商人ギルドへ、何用あつてやつてきた。返答次第では、生かして返すわけにはいかん。」

チャンスは、ゆつくりと体を動かし、しっかりと影へ向き直った。サージとエキシイを自分の後ろへ下からせて、黒いローブに包まれた影を睨んだ。

「俺たちはある依頼を受けて、その情報を得るために商人ギルドを目指しただけだ。商人のことは、商人に聞いた方が早いからな。けど、あんたみたいな素性の知れぬ輩が、商人ギルドと聞いただけで目の色を変えるってことは、すでに商人ギルドは、俺たちの思惑を遙かに越えた問題を抱えちまったんだな。」

影は、少し押し黙ってから再び問う。

「貴様たちの知りたい商人とは、誰だ？」

「エーネツカⅡヘルマンって奴のことだ。」

チャンスは、平然と言つてのけた。サージとエキシイが目を丸くしている。敵か味方かも知れぬ者に、と慌てふためくサージ。だが、影はチャンスの言葉を聞くと、それきり黙り込んでしまった。チャンスはようやく、小さく微笑んだ。

「あんだだろ、あの商人たちを殺したのは。」

影が伺うようにチャンスを見た。

「毒師……って言うらしいな、あんだたちのことは。あんだの名は、フィンでいいのかい？」

「……」

「荷車を引いていた牛を、横穴のところへ置いてあったが……あの黄色い茸に食わせるためかい？　しかも餌にしたのは、牛だけじゃないよな。」

黒いローブの影は、それだけ聞くと、大きなため息をついた。そして大袈裟に肩をすくめてみせ、ローブのフードに手をかけた。

「……降参だ。だが残念なことに、あんだたちの目当ての商人ギルドは、もうアンビーカの街にはない。」

フードがふわりとはね除けられる。そこに現れた素顔に、三人は思わずハツとした。

「あんだみたいな目利き腕利きの冒険者なら、あの街に起こった不幸の原因が分かるかもしれない。突然の失礼は許してくれ、これから事情を説明しよう。私はフィン＝ラシュパニ。お察しの通り、暗殺稼業の毒師だ。」

「あ……あ……」

エキシイが目皿のように丸くして呻く。その黒いフードの下から覗いたのは、紛れもなく、若く美しい女の顔だったのだ。

フィンと名乗った女毒師は、扉を軽くノックして、チャンスたち

を招き入れた。扉の向こうは何と、古めかしくも厳かな、祭壇になっている。

「これは・・・」

サージが辺りを見回していると、フィンの手袋を嵌めた手で祭壇を指差した。

「ここは、豊穡の女神エーラの神殿跡だ。ここにたどり着くまでに、百の戦士像が回廊を守っている。横穴から出た時に見ただろう。」

その説明を聞きながらチャンスは、そこにひしめく数十人の人影を見ていた。女子供の姿はなく、すべて男である。彼らの首にかかっている鋼性のプレートには、見覚えがあった。フィンは三人を連れて祭壇の奥へと歩いて行き、そこに鎮座していた、いちばん年嵩の男のそばで何事が囁く。すると男は大きくうなずき、チャンスたちへ向かって歩み寄った。

「・・・こんな形でお会いしたくはありませんでしたが・・・はじめまして、わしがアンビーカ商人ギルドの長、タジムです。」

「はじめまして、チャンスⅡダグと言います。こちらは仲間のサージと、エキシイ。・・・ところで、あの・・・」

タジムはチャンスの言葉を手で遮り、うんうんとうなずいた。

「分かっております、すべてお話ししますから、どうぞおかけ下さい。」

タジムに言われるまま、チャンスたちは、申し訳程度に作られた小さな椅子に腰掛ける。その椅子に触った途端、サージは顔を上げ

てフィンを見た。

「・・・こいつは、荷車の骨組みじゃねえのか？」

「その通りだ。残りの屑は、茸に全部くれてやったがな。」

フィンは事もなげに言い放った。タジムはそつと腕を組んで、苦悩に満ちた顔をした。

「・・・ここにいる者たちは、わしを含めてすべて、アンビーカの商人ギルドの一員です。先月行われた豊穰祭以後、ずっとここに隠れておるのです。この遺跡はわたたちが独自に発見したもので、まだ誰にもその存在は知られていません。」

フィンは少し離れた壁際に立ち、チャンスたちの様子を見ている。

「なぜ、わたたちギルド員がここに隠れ住むのか。それはアンビーカの聖なる祭りである豊穰祭をきっかけに、恐ろしい不幸が襲いかかったせいなのです。」

災厄のアンビーカ

「なぜ、わしたちギルド員がここに隠れ住むのか。それはアンビーカの聖なる祭りである豊穰祭をきっかけに、恐ろしい不幸が襲いかかったせいなのです。」

「不幸……」

「……アンビーカの豊穰祭は、一月に渡って行われる賑やかなもの。家畜の競り市は特に有名です。その豊穰祭最後の一週間は神酒祭と呼ばれ、夜昼となく酒が振る舞われるのです。その時に……」

そこでタジムは言葉を切り、一人の髭もじやの男を呼んだ。丸々と肥えた体のその男は、人の良さそうな顔に似合わぬ、反り身の小剣を腰に携えていた。

「その時の詳しい状況は、わしよりも、このオルトスから聞く方がよいでしょう。オルトス、話して差し上げなさい。」

「承知いたしました。」

オルトスは、タジムに会釈をして、チャンスたちにも会釈をした。礼儀正しいオルトスはまず、自分は酒を扱う専門の商人であると述べ、街で飲み交わされる酒は、すべて自分の目を通して持ち込まれるものであると説明した上で、こう切り出した。

「豊穰祭はすべて、私たち商人ギルドが仕切って行う伝統的な祭事です。でもネクタル祭は、最近になって行われるようになったもので、人集めの要素が多分に含まれているのは否めません。」

オルトスの腰掛ける椅子は、今にも壊れてしまいそうに歪んでいた。

「そして年々その規模は拡大し、ネクトル祭だけは、私たちアンビ
ーカの商人ギルドだけでは、まかない切れなくなってしまうたので
す。そこで、デュファ大陸全土の街や村に、ネクトル祭に限り酒を
売ってもよいという呼び掛けをしたのです。その反響は予想以上で、
ネクトル祭目掛けて、たくさんの余所の街の酒が、アンビーカへ持
ち込まれるようになりました。」

「はーん・・・」

サージが目を細めた。

「先月のネクトル祭には、あらゆる酒が露店に並びました。それを
目当てにやってくる旅人もいるくらいですから、その人数たるや相
当なものでした。それでも、何とかネクトル祭も終了し、大成功の
うちに豊穰祭は終わったと、ギルド員全員がそう思いました。しか
しその直後、突然街の警備隊が狂ったような勢いで、私たちギルド
員を、次々と連行し始めたのです。」

「警備隊が？」

「はい。私は親しい知人から危険を知らされ、すぐさまギルド員た
ちに連絡を取り、着の身着のまま街中を逃げ回ったのです。商人
ギルドのあった建物は、焼き討ちされたのか、煙を上げていました。
・・・。たくさんの者が連行される中、私たちは逃げおおせて、何と
かこの遺跡に身を潜めているのですが、残された家族たちのことを
思うと・・・。」

打ちひしがれた様子で頭を抱えるオルトスの代わりに、フィンが
小さく続けた。

「そこで、私が雇われたってわけだ。」

「・・・あなたが？」

「ああ。ギルドの一人が危険を冒して隣町へ出向き、藁をもずがる思いで、私に白羽の矢を立てたのさ。こっちも暗殺稼業とはいえ、金になることは何でもする。遺跡に閉じこもるギルド員のために、あの横穴を掘るように勧めたのも私だ。」

するとタジムが大きくうなずいた。

「そう・・・最初は面食らったよ。まさかこの遺跡が、あの街道の洞窟に繋がるなど、思いもしなかった。熱心に説明してくれるフィンを信じてよかったと、今では感謝しとる。」

「街の地図と遺跡の位置を照らし合わせたら、あの街道の洞窟に必ず行き当たる確信があったんでな。まずはここでの生活に必要なものを揃えることから始めたよ。馬車を持ち去ったのはそのためだ。何しろここには、水も食料もないからな。」

「じゃあ・・・」

言いよどむエキシイの言葉を察知したのか、フィンは小首を傾げてうなずいた。

「チャンスの言う通り、私は三人の商人を殺して、荷車の牛を奪った。奴等は確かにアンビーカの商人で、ギルド員だった・・・それは認める。」

「何だって、フィン、それは・・・」

「続きがあるんだよ、タジム。」

驚くタジムを制して、懷から巻き物を取り出しながら、フィンは言った。

「あの連中がギルド員であることくらい、すぐに分かったさ。ちゃ

んと話し合いもした。でも駄目だった・・・あの連中は、これを持って、ブーベルデルへ行くつもりだったのさ。見るがいい。」

フィンは、タジムの目の前で、その巻き物を広げて見せた。何とそこには、今、この遺跡に隠れているギルド員の、詳細な手配書だったのだ。驚きで言葉もないタジムの前に、チャンスも、死んでいた商人たちから外してきた、ギルド員の鋼性のプレートを差し出した。

「警備隊に捕まったギルド員は、徹底的に洗脳されている。大方ブーベルデルの商人仲間にも、聞き込みに行く途中だったんだろう。荷車を引いてたマーユ牛は、多分その手土産になるはずだったのさ。」

「横穴の入り口に転がってた牛だな。」

「ああ。食料に困ってるんだ、そのまま茸の餌になんざしない。ちゃんと肉だけ頂戴するつもりだよ。競り市では言い値で売れる高級牛を殺すのは惜しいが、空腹には勝てん。」

齒に衣着せぬフィンの言葉を聞きながら、タジムは鋼性のプレートを握り締め、ぶるぶると怒りに震えて呻いた。

「・・・何と言うことだ・・・誇りあるギルド員が、こんな・・・！」

そのあまりの嘆き様を横目にしながら、チャンスは静かに、ブーベルデルでの事件を話して聞かせた。恐ろしい悪魔の酒の存在と、その恐るべき習慣性、そしてそれを操る謎の商人エーネツカヘルマン。それを聞くと、その場にいた誰もが、フィンですらも、息を飲んだ。

「・・・じゃあ・・・警備隊は、その悪魔の酒を飲んで、操り人形になつてゐるって言うのか？」

「恐らく、間違いない。ネクトル祭最後の日、警備隊にその蜂蜜酒が届いたんだろう。祭りの最中におおびらに酒を飲めない連中のことだ、祭り終了と同時に酒盛りでも始めて、酒の虜になつちまつたんだ。」

「でも・・・待って、チャンス。」

エキシイがチャンスの話を遮った。

「・・・変よ。何かが違うわ。」

「何がだよ、エキシイ。」

サージが聞き返す。

「・・・警備隊をおかしくしているのは、バータ・ラカッティじゃないかもしれない。」

「え・・・」

「バータ・ラカッティは意識まで冒したりしないわ。確かに、その力に逆らうことは無理かもしれないけど・・・でも、何か引っかけがあるのよ。その強烈な洗脳作用・・・ひょっとしたら、傀儡草なんじゃないかしら・・・」

フィンが目を丸くした。

「・・・馬鹿な。傀儡草は寒い土地柄に適応した毒草だぞ、この暖かいデュファ大陸にあるはずが・・・」

「忘れたのかよフィン、俺たちの敵は商人なんだぜ。船と金さえあっても、奴隷だろ？が毒草だろ？が、仕入れてきちまうんだぜ。」

「・・・」

フィンが眉をひそめる。と、突然その祭壇の間に、小さな鈴の音が鳴り響いた。フィンはそれを聞くと、バツと顔を上げて立ち上がった。

「誰かきた。侵入者だ。」

「・・・さすが毒師、面白い細工をしてあるみてえだな。」

サージがにやりと笑うと、フィンも、口の端を歪めて笑った。

「あの腐敗茸だけが、私の切り札と思われては困る。さつき、あんなたちが回廊に入った時も、すぐにこの仕掛けが反応したんだ。あんたは盗賊らしいが、それに気付いたかい？」

「えっ？」

「一緒にくるなら来い、この音は別の入り口のものだ。おいギルド員たち、この部屋から一步も出るなよ！別の鈴の音が聞こえたら、いつものように隠れるんだ、いいな！」

フィンはそれだけ叫ぶと、風のように素早く祭壇の部屋を駆け去っていった。チャンスたちもそれに続き、冷たい空気の漂う遺跡の中を走って行く。

戦士像が立ち尽くす回廊を抜けていくと、狭い行き止まりの部屋に出くわした。その部屋は奇妙な六角形をしていて、その壁面に五枚の大きなレリーフが嵌め込まれている。

「ここだ。静かについてこい。」

フィンはそう言って、果物をもぎ取る女神たちを描いたレリーフをぐい、と押した。するとレリーフはゆっくりと押し開かれていき、その向こうに通路が見えるではないか。エキシイが感心して見てい

ると、フィンは手招きして奥へと滑り込んでいった。静かにその後へ続くと、小さな扉らしきものの前にたどり着いた。

「もうすぐここへ、侵入者がくるはずだ。一人でも逃したら、この遺跡はすぐに引き払わなきゃならん。心してくれ。」

「お手並み拝見と行こうか。」

程なく、遠くから足音が聞こえてきた。

「・・・二人ね。」

「耳がいいな、お嬢さん。」

フィンがそつと手袋を外す。女性の手とは思えぬ、筋張った手・長い爪は黒く塗られている。小さなつぶやき声が、段々と近くなる。だが、いち早くそれを耳にしたサージは、突然ぎよつとしてフィンを押さえた。

「ちょ、ちよつと待ったフィン！」

「何を言い出す、怖じ氣付いたのか？」

「違う、あの声はマーティとノーマだ、俺たちの仲間だよ！ここに来る前に別行動をとってたんだ！」

サージはフィンを押し退けて、扉を開けて通路に飛び出した。明暗の差に目をしばたかせながらも、サージは人影に向けて叫んだ。

「マーティ、ノーマッ！！」

すると、人影がぴたりと立ち止まる。

「・・・サージ？」

サージがうなずいて返事をする、人影はすぐさま駆け寄ってきた。それは紛れもなく、マーティとノーマの二人だったのだ。

「どうしたのサージ、こんな所に・・・！」

「そりゃこつちが言いてえよ。アンビーカの街へ行っただけじゃなかったのか？」

サージがそう言うと、マーティが複雑な顔をして肩をすくめて見せた。

「それが・・・アンビーカの街は、完全に封鎖されていたんです。部外者は立ち入るなど、警備隊にすげなく追い返されてしまっ

て。」

「何だって!？」

チャンスとエキシイも、通路に飛び出してきた。そして、フィンもゆつくりと姿を現して、マーティとノーマを見つめた。その見慣れぬ姿に気付いた二人に、チャンスが順を追って説明した。街を襲った異変のこと、逃げ出したギルド員がここに隠れていること、そして、そのギルド員たちに雇われた、女毒師フィンのこと・

・
フィンはマーティとエキシイを見つめ、マントのフードをとって改めて名を名乗った。

「アンビーカが封鎖とは・・・。その詳しい状況を教えてくれないか。」

「え・・・ええ。」

ノーマが、チャンスたちと別れた後の道程を話し始めた。

・・・

夜明前に、アンビーカの街の明かりを見た二人は、すぐさま街の門へと足を運んだ。しかし近付くにつれ、それが街明かりでないことに気付いた。

「あれは・・・炎だったわ。まるで火事みたいに勢いが良かったもの。」

驚いて街へと駆け寄ったマーティとノーマは、その炎とは裏腹に、街が異常に静かすぎるのを感じて、その足を止めた。街の門に立つ門番が、微動だにせず立ち尽くしているのを見て、何かが起こっていることに感付いた。

「半鐘も鳴らさず、騒ぎもない。炎の勢いは衰えない。門番は平然と私たちを睨んでいる。私たちがなくとも、その状況は異常だと感じたことでしょう。」

門に近付いた二人を見ると、門番の一人が奥へと引っ込んでいき、数人の仲間を引き連れて門を塞ぐ形に並びだした。

「マーティが門番の一人に、休む場所を探しているので街へ入れてもらえないか、と頼んだのよ。そうしたら、今この街は封鎖中で、部外者の立ち入りはできないと、断られたの。それ以上の話し合いはできなかったわ・・・全員の持つ槍の矛先が、一斉に私たちに向けられたのよ。」

「彼等は軽装でしたが、警備隊の人間だとすぐに分かりました。腰の皮ベルトが全員同じ、小剣を吊せる独特のものでしたからね。」

街への立ち入りを拒否された二人は仕方無く、街の近辺をそれと

なく歩くことにした。街への入り口は三か所あり、そのうちの二つには門番が立っている。もう一つは昔に使われていた古く小さな門で、すでに閉鎖されて久しい。遠巻きに歩きながら、街の様子を伺うが、炎の勢いはまだ衰えないでいる・・・

「チャンスたちと落ち合う時間になるまで、探索でもしていようかって、私が言ったのよ。ここいらは『降臨の地』と呼ばれる遺跡の宝庫だつていうのを思い出して。でもまさか、偶然見つけた遺跡にチャンスたちがいたなんて、本当に驚いたわ。」

「・・・入り口に仕掛けてあった細工を見て、誰か中にいるってことは、分かっていましたけどね。」

マーティはフィンを見た。

フィンも、一瞬表情を堅くしてマーティを凝視する。

「フィンさん・・・でしたか。あなたは、聖職につかれていたことがありますね。」

「!・・・」

「な、何だよマーティ、藪から棒に。」

サージが笑うと、マーティもにこりと微笑んだ。

「彼女が使ったのは、大昔から伝わる伝統的な仕掛けのひとつです。もともとは教会所有の牧場の家畜を、野犬や野盗から守るために使われたものでした。」

「へえ・・・」

「神との深い関わりがなければ使えない、代表的な仕掛けです。そうですね。」

フィンは、答えなかった。

聖域の奈落

フィン、マーティの言葉に答えなかった。

答える代わりに、腰に差した小剣をすらりと引き抜き、マーティの目の前にずい、と無遠慮に突き出す。その刀身には、美しい印が刻んであった。

エキシイがぼつりとつぶやく。

「それ・・・ユヌの印だね。月の女神の・・・」

「あらゆる病を払う清き乙女・・・だが反面、あまりの美しさに人を狂気に陥れると言われる。満月の夜に水辺を歩くと、水に映った月の中に引きずり込まれるって迷信を、昔聞いたことがあるな・・・」

「詳しいのね、チャンス。」

フィンは静かに剣を鞘に収め、サージを見た。

「・・・盗賊のあんたが私の罾を見破れなかったのは、そのせいさ。その神官さんの言う通り、私は十になるまで、教会の巫女として『先読』をしたり、神のお告げを施したりする役目をしていた。」

「ねえ、・・・先読って？」

エキシイがマーティの袖を引っ張って尋ねると、フィンは続けて答えた。

「先読とは予言のようなものさ。ただ、予言と違って先読は、必ず真実を口にしなければならないがな。」

フィンはそつと手招きをして、五人をもとの祭壇の間へと案内し

ていく。

「真実は、人を幸せにできる代物なんかじゃない。私はそれを、己の先を読んで、初めて気が付いたんだ。」

「己の先・・・自分の未来を読んだのですか？」

通常、先読の力を持つ巫女や神官は、自分の未来を読むことを禁じられている。それによって己のすべて、不運や死期などを見通してしまふからである。先読は昔、神の意志に背く力であるとされ、神の定めた道を勝手に覗き見てはならないとの名目で、弾圧を受けた。がしかし、先読は今や、寺院や教会の収入を支えるまでに大きな存在となり、弾圧の事実も、歴史の狭間に埋もれようとしている。

「私は捨て子で、教会に引き取られた。司教も司祭も、修道士たちも、みんな私を可愛がってくれたが、その笑顔の裏に隠された真実を見破った時はもう・・・遅かったのさ。」

フィンは振り返らずに、ぽつりと言った。

「・・・シャズフィールを、知ってるかい。宗教都市で有名な・・・」

「もちろんです、聖地シャズフィールは、神々の住まうヤーテオール山脈のふもと・・・でしたね。」

「確かその街、皆殺し事件があったわね。大教会の修道士たちが、一夜のうちに、みんな殺されたっていう・・・」

ノーマが思い出したようにフィンの後ろ姿に呼び掛けると、フィンは立ち止まり、振り返った。その顔は、にやりと冷たく笑っていた。哀しみと嘲りと、怒りが・・・浮かんで・・・

「シャズフィール大教会の大虐殺・・・それは、私の仕業さ。復讐にしては、あっけなく終わったがな・・・」

「復讐・・・って・・・」

フィンは、レリーフの仕掛けを抜けて、真っ直ぐ祭壇の間へは行かず、最初にチャンスたちが入ってきた、横穴の回廊へと足を向けた。フィンの漂わせる雰囲気が変わったのに感づいたのか、エキシイは、そつとノーマの後ろに隠れながら歩いていた。

やがて無言のまま、横穴を通り過ぎ、幾多の戦士像を越えていくと、小さな部屋へたどりついた。ランタンの炎に浮かび上がる、白い大理石の部屋。継ぎ目のない大きな石が、二つだけ、まるで食卓のように鎮座している。フィンはそのひとつに腰掛けた。

「・・・神官さん・・・マーティと言ったか。シャズフィールは、聖地に最も近い地獄さ。その掃き溜めにいた私が言うんだ、間違いないよ。」

「・・・ど、どういうことですか？」

マーティが息を飲むと、フィンはおもむろに、黒いローブを大胆に脱ぎ去った。驚くチャンスたちには目もくれず、フィンはなおも、下に身に付けていた絹のシャツすら、脱ぎ捨てて笑った。

「よくごらん。これが、神の名のもとに、あいつらが私にした仕打ちだ！」

ランタンの炎が、フィンの体をこうこうと照らしていた。

「・・・・・・・・！！」

チャンスたちは、瞬きも、息すら忘れて、フィンの体を凝視した。フィンの白い肌を、埋め尽くすかのように広がる、無数の傷、傷、傷。

切り裂かれた傷のみならず、焼けた灼熱の鉄を押し当てられ、炭化してしまった部分もある。豊かな乳房になるはずであった胸には、いくつもの抉られた傷が走り、不様に赤黒く盛り上がり、女性のものとは・・・いや、人のものとは思えぬほど醜悪な様を見せている。およそ無傷の部分を探すことが不可能なほど、その体は無残に痛め付けられていた。

「・・・・・・・・な・・・・・・・・」

ノーマの瞳から、涙がこぼれた。マーティは、あまりの凄まじい情景に、体中をがくがくと震わせている。エキシイは、口を押さえて床にへたりこんでしまっていた。

「私が六歳になってすぐだ。大司教、司祭、修道士・・・代わる代わる、毎晩のように容赦なくなぶるのさ。終わった後は、よく効く痛み止めを大量に塗り込まれてさ。おかげで傷は病まず熱も出ない寺院に引き取られる孤児は皆、私と同じ慰み物になっていた。地獄はきつと、ここ以外にないと・・・心の底から思ったよ。」

脱ぎ捨てた絹のシャツをそつと拾い上げ、フィンは続ける。

「私は小さくても女だったから、奴等に毎晩犯されもしたよ。焼けた鉄を押し当てられ、ナイフで切られながら・・・。おかげで、私は女じゃなくなっちゃった。最後に、焼けた鉄を・・・押し込まれてからね。」

「・・・酷い・・・何て酷いの・・・!!」

「私にあるのは、先読の力だけ。だから殺されてしまう前に、自分の未来を読んで、生きる可能性を探そうとした。そして、そこに見えたのは、私の死骸じゃなく・・・奴等の死骸だったのさ。」

フィンシャツを着ながら、そつと髪を撫で上げる。美しい顔だちの影にある、壮絶な運命の波が、彼女の美しい体を容赦なく削り取って、女である喜びすらも、奪ってしまったのか。

いたたまれない思いで、言葉もなくただ立ち尽くす、チャンスたち。フィンはシャツを着ると、にやりと笑ってチャンスを見た。

「私は自ら毒師の道を選び、不幸の運び手となって、真実という残酷な神に従うことにした。聖職者の成れの果てどもを皆殺しにして初めて、私は先読の力を棄てることができたんだ。・・・知ってるかい、女神ユヌはあまりにも清い乙女なために、不浄のものには恐ろしい呪いを振りまくという、善と悪の二つの顔を持つ神なのさ。毒師として生きるのは私の幸福であり、ユヌ神への信仰は罪悪であり、永遠に続く罰ということだ・・・」

フィンはマーティを見た。しかしマーティは、フィンの視線すらまともに見ることができなかった。込み上げる哀しみと無力感で、小刻みに震える体すら押さえることができない。フィンはうつむいた。

「・・・悪かった。あんまりあんたが真つ正直で清らかすぎたから、つい悪ふざけをしちまった。だが、あんたらが眼を背けたくなる世界も、清らかな世界の裏側に必ず存在することだけは、この身体が証明している。・・・残酷な真実が・・・すべて。」

黒いローブを羽織り直すと、フィンの手招きした。驚きと衝撃で言葉もないチャンスたちは、ただ黙ってフィンの後ろへついていく。もと来た道を帰る途中、フィンは、回廊を守る戦士像の一体の前で立ち止まり、その台座を指差した。

「この文字を読んでみな。」

あまりのことに頭が真っ白になっているマーティをそつと押し退け、おずおずとエキシイが進み出て、台座の古代語を静かに読み上げた。

「えと・・・第四十九、豊穰の女神を守りし百の戦士、戦車を駆る勇猛なる兵・・・」

「じゃ、今度はこっちだ。」

フィンは、隣にある次の戦士像へ進む。エキシイもそれについていて、同じく戦士像の台座の文字を見た。

「あれ？」

目を丸くするエキシイ。

「・・・第五十一、豊穰の女神を守りし百の戦士、鷹を射落とす良き瞳の兵・・・」

「え、五十番目の戦士像じゃねえのか？」

「・・・番号がとんでるわ。」

フィンがにやりと笑った。

「アンビーカの一件が片付いたら、好きに探索するといい。私たちはここを見つけて隠れているだけで、遺跡荒らしは一切していない。結構な掘り出し物があるかもしれん。」

皆の顔が強張っているのを見つめ、フィンは、ランタンの火に背を向ける。

「・・・私の話を気にせんことだ、復讐を遂げた私にはもう、何のわだかまりもない。今はアンビーカの一件を解決するのが先だ。急ぐ旅なら止めないが、気の毒なギルド員たちを救う手助けを、ぜひお願いしたい。私一人ではどうも、手に余るようだ。」

フィンはそれだけ言うと、祭壇の間へと、ひとり歩き去っていった。その後ろ姿が曲がり角から消えるまで、チャンスたちはやはり、無言のままだった。

ふと、マーティがくりとうなだれ、戦士像に寄り掛かって頭を抱えこんだ。・・・余程の衝撃だったのだろう。声にもならず、ただただ、噛み殺すようにして、マーティは泣いていた。気の毒そうに目を細めるノーマですら、声をかけることもできずにうつむいている。だがそこで、チャンスが大きくうなずいて、一際響く声でまくしたて始めた。

「よし、俺たちも祭壇の間に戻って、もう一度タジムに話を聞こう。街の詳しい見取り図を書いて、突破口を見つけるぞ！」

「チャンス・・・」

「しっかりとしろマーティ、めそめそやる前に考えるんだ。乗った船の舵がボロボロなら、俺たちがこの手で漕ぐんだ。海図がないなら、俺たちがこの目で星を見るんだ。過ぎたことより今をどうするか考

えろ。」

マーティは顔を上げた。袖を濡らしながら、チャンスをとつめてうなずく。

「フィンに刻まれた真実は残酷かもしれないが、それだけじゃない。真実つてのはユヌ神のように、必ず二つの顔があることをフィンは知らなきゃいけないんだ。分かったら行くぞ、時間が惜しい。」

チャンスが回廊を歩き出すと、サージが呼び止めて戦士像を指差した。

「チャンス、タジムのじいさんに見取り図を書かせてる間だけ、俺にも時間をくれよ。この戦士像の謎、どうしても解きてえんだ。手間はかけねえからさ。」

「あの・・・私もサージと一緒にいていいですか。古代語も神語も読めるから・・・お願いします。」

マーティが、おずおずとチャンスに頭を下げた。頭一つ分も背の高いマーティの肩をポンと叩き、チャンスはにこりと笑って言った。

「好きにしろ。危なくなったら、いつもの通りな。」

「・・・はい。」

チャンスとノーマ、エキシイは、サージとマーティを残して祭壇の間へと走っていった。残った二人は、じつと戦士像を睨んで立ち尽くす。マーティは鼻を小さくすすって、台座を眺めながらつぶやいた。

「恐らくこの遺跡は、女神エーラが降臨した時に、一番最初にこの

土地へ施した奇跡を奉っているんだと思うんです。入り口付近の碑文に、それらしき文章があったので・・・」

「奇跡を奉る？」

「ええ。女神がこの地に降りて最初に行った奇跡・・・その秘密が、この遺跡に眠っているはずですよ。」

サージはふん、と鼻を鳴らし、もう一度マーティに台座の文字を読んでもらう。

「戦車を駆る兵と、鷹を射る兵。神話の戦車つてのは、獅子に乗るのが普通だよな。じゃあこっちは・・・」

サージは、四十九番目の戦士像の、足の付近を丹念に調べ始める。すると、戦士像の左足が、僅かに捻れるようになっていた。続いてサージは五十一番目の戦士像に近付き、今度はその戦士像の目を、じっくりと調べていく。やはり、こちらの戦士像の瞳も、僅かに動かせるようになっていた。同時に、どこからか小さな音が、かちん・・・・と響いた。

奉られた奇跡の謎

どこからか小さな音が、かちん……と響いた。

「……何か音がしましたよ。」

「鍵が外れたみたいだな、行くぞマーティ、さっきの部屋だ。」

先ほどフィンの話を聞いた、あの白い大理石の部屋へと戻るサージは、慎重に部屋の中を眺め、ゆっくりと足を踏み入れる。テーブルのように並んでいた、継ぎ目のない大きな大理石二つを、じっくりと見つめる。

「……これだ。」

大理石の一部、床すれすれの位置に、拳大の穴がぽかりと開いていた。そつと屈み込み、その穴を覗くサージ。だが穴は意外に深いようで、覗いただけでは分からない。仕方無くサージは、穴にゆっくりと腕を伸ばしていく。

「気を付けて下さいねサージ……」

「……話しかけるな、気が散るっ……ん？」

ちやり。鎖の音がした。

「輪っかのついた鎖がある……どうするマーティ、このまま引いてみるか？」

「あ、危なくないですか？」

「畏ならもつと分かりやすいところへ仕掛けてあるもん……」

ぎゃあっ！」

突然サージが悲鳴を上げて、差し込んでいた腕を引き抜いた。その腕に何と、サージの腕と同じ位の太さの、長い粘液質の触手が絡み付いている。ぐいぐいと、サージはその小さな穴へと引きずられていくようだ。

「サージッ!!」

驚いたマーティは短剣を引き抜き、触手へ切りかかった。だが触手は恐ろしく堅く、短剣では切り付けることもできない。サージの腕が見る間に青くなり、締め上げる触手の強さを見せつける。マーティはすかさず、耳のリングを外して口に当てた。鋭く高い音が辺り一面に響き渡る。

...

「マーティだ！」

祭壇の間でタジムたちと共に、アンビーカの街の構造について話し合っていたチャンスたちにも、その鋭い音が聞こえた。

「あちき行ってくるわ！」

「私も！」

チャンスが腰を上げる前に、ノーマとエキシイがすぐさま駆け出していった。声を出す間もない素早い行動に、タジムもフィンも、唖然としていた。腰を上げかけていたチャンスは、ゆっくりとまた椅子に腰掛け直して、見取り図の作成に取りかかり始める。

「い、いいのですかチャンスさん、お仲間のところへ行かずに・・・」

「ああ、大丈夫。すぐにけろりと戻ってきますから、ご心配なく。」

平然と言い放つチャンス。その時遠くで、ドン、という地響きが聞こえた。

「・・・あれはエキシィだな。魔法を使っただけでしょう。それよりタジム、中央広場の池が街の外に繋がってるって話は、本当なんでしょうね。」

「あ、はい、それは私の名にかけて保証いたします。幼い頃、あの池にしばしば、森にしかない木の実が浮かんでいるのを見ましたし、遙か昔には、その池から森向こうの敵陣に先手を打った戦記があると言われていて・・・」

「・・・頼りないけど、そっちから進むしかないみたいだな。」

チャンスが言うと、フィンも街の見取り図をみつめながらうなずいた。

「使われていない古い門の方にも、今は門番が立っている。堀を乗り越えるには手間がかかりすぎるし、空を飛ぶか、地に潜るかしない、と、街への侵入は困難だぞ。」

「ノーマに飛んでもらう手もあるが・・・今の堅い警備の前ではそれも難しいだろう。一斉に矢を射られたりしたらたまらないしな。」

すると、祭壇の間の扉が乱暴に押し開かれ、エキシィとノーマが叫びながら入ってくる。

「チャンス、大変よ!」

「フィンも一緒に来て、凄いのが出たわ!」

何事かと首を傾げながら、チャンスとフィンは一キシイたちの後ろについて走る。戦士像の回廊を抜け、突き当たりの大理石の部屋までくると、埃っぽい空気がチャンスたちを迎えてくれた。

「よおチャンス〜・・・やられたぜエ・・・」

「サージ？わつ、何だよその腕、真っ青！」

「そっちの化け物に迫られたのよね。」

ノーマが微笑んで指差す先に、まるで無数の蛇がこんがらがって丸まったような、触手の固まりが転がっていた。塊の真ん中にある口は吸盤状で、それが吸血生物であることを物語っている。幸いサージは血を吸われるまではいかず、締め上げられて腕が痺れるくらいですんだようだった。

「あちきの魔法が遅かったら、あんた今ごろ干物になってたわよサージ。ちよつと加減を間違つて大理石まで壊しちゃったけど、おかげで、こんなのが出てきたのよ。見て。」

「・・・おお・・・」

チャンスとフィンは息を飲んだ。

砕けた大理石の中はほぼ空洞になっていたらしく、そこに、第五十番目の戦士像が静かに横たわっていたのだ。戦士像は手に、輪っかのついた鎖を持っている。薄っぺらな台座の文字を、フィンが読んだ。

「・・・第五十、豊穡の女神を守りし百の戦士、聡明な雨引きの兵・・・」

「雨引き？」

マーティは、焼け焦げて絶命している触手の固まりを指差す。

「この化け物は、水生生物です。恐らくあの戦士像の手にする鎖を引くと、雨を引く、すなわち、水が沸き出すのではないかと・・・」
「!・・・水・・・か。」

チャンスの目が輝いた。

「ノーマ、水の精霊に頼めば、この水の流れがどこに通じるか、知ることはできるか？」

「え、ええ。もちろんよ。」

「よし、鎖を引いてみようぜ。」

「ちょっと待ってチャンス、遺跡丸ごと水没したりする危険は・・・

!」

「あ、そうか。」

しかしチャンスはすでに、戦士像の鎖を力一杯引いてしまっていた。

重々しい鎖の音が響き、次いで何かがゆっくりと動く音が聞こえてきた。地鳴りのような響きはどんどん高くなり、あたりがびりびりと震えてくる。サージが青くなつて喚き出した。

「おいチャンスッ、俺アこんなところで遺跡と心中したかねーぞオ!」

「それより、この部屋の扉が閉まって、水責めの罠になってたりする方が怖いわよ!」

「どっちもやめて下さい!・・・あっ!？」

二つ並んでいた大理石の、もう一方がゆっくりと地面に埋まり始

めた。それはぐんぐんと沈み、かなりの深さまでいってようやく止まる。大きな丸い穴が二つ側面に見え、地鳴りが一層強く辺りを揺るがした。

がくん。

「あ……」

何かが外れる音がして、清らかな水の音がごうごうと響き渡った。大理石が沈んでできた穴に、勢いよく水がたまっていく。側面の穴は、水が流れ出る穴だったのだ。しかも水は、勢いよく渦巻きながらも、床の上までは決して溢れることがなかった。水責めにならずにすんだ安堵感で、皆からため息が漏れる。

「……こんな仕掛けがあったのね……」

「女神エーラが降臨の地に、最初に施した奇跡とは、雨を降らせて大地を潤すことだったんですね。」

ノーマは渦巻く水へむけて屈み込み、腕輪に手を添えてつぶやいた。

「水の精霊シユヌカンよ、我が名において命ずる。この流れの行く先々を我に示せ。」

途端に、腕輪から青き光が迸り、渦巻く水の中へすらりと溶け込んでいった。水は一瞬光を発し、すぐに綺麗な鏡面のように静まって、ぼんやりとした映像を映し始める。

「……ここは森みたいね、暗がりでもハッキリしないけど……どうやら、水の中から見た周囲の景色が映されているみたいだね。」

映像はすぐに途切れ、歪みながら場面が変わって行く。

「あ、絵が変わる……」

「これはどこかしら……」

物音と騒ぎにつられてやってきた商人ギルドの者たちも、珍しうにその情景に見入っていた。が、不意にあつと大声を上げて、映像を指差した。

「そこは、アンビーカの中央広場だ！」

「間違いないよ、中央広場の池から見れば、教会の鐘はその位置に見えるはずだ。本当だよ！」

チャンスはうなずき、にやりと笑った。

「ノーマ、水の中でも息ができるように、精霊に頼めるか？」

「もちろん大丈夫よ。……行くのね？」

ノーマは立ち上がり、水の精霊を一旦収める。サージとマーティにもこりと笑い、エキシイはフィンを見上げて微笑んでいた。

「……フィン、あんたの助言のおかげで、予想より早くカタがつきそうよ。」

フィンは、エキシイの自信満々の表情を見て、一瞬押し黙った。しかし、そんな笑みを浮かべているのは、エキシイだけではなかった。チャンスたちは皆、ひとかけらの不安もない顔をして、フィンを見つめているのである。フィンは呆氣にとられながらも、我知らずうなずいていた。

「・・・そう・・・願いたいね。」

・・・

アンビーカの街は、宵闇に包まれていた。街の中央広場で、赤々と燃え盛る炎は未だ衰えず、その宵闇を追い払うがごとく、勢いよく煤煙を上げ続けている。

その様を見守るのは、正義を忘れた警備隊の面々である。次々に手渡して、何かを火の中へ投げ込んで行く。その傍らに、大柄な色黒の男が立っていた。

「ねえ、母様。わたしたち、どうなっちゃうの？父様はどこにいったの？」

「シッ・・・静かにおし、大丈夫、大丈夫だよ・・・今にきつと助けがくる、必ずくるから・・・」

「おなかすいたよ、母さん・・・」

怯えた子供たちのつぶやきで満たされている建物は、街の教会だった。商人ギルドの家族は皆この教会に閉じ込められ、一日に、一人一個の堅焼きパンしか与えられない、酷い仕打ちをうけていたのだった。商人ギルドに関わりのない普通の街人たちも、家から出ることを許されず、監禁状態に置かれていた。

空腹を訴える子供たちを抱き締め、ひたすら耐えるしかない母親たちは、一心に神へ祈りを捧げていた。夫たちの無事と、自分達に救いの光があらんことを、ただ一心に、祈り続けるのだ。

その教会を背にし、炎を見つめ続ける大柄な男が、側にいる警備隊のひとりに、ぼそりとつぶやいた。

「まだ、かかるのか？」

「・・・モノが多いですから・・・明日まではかかると思います。」

警備兵たちが、次々に手渡しで炎にくべているもの。それは、干し草や飼料であった。油粕を混ぜてある飼料はこのほかよく燃え、また乾燥した干し草も、言うまでもなく炎の勢いを増す。男はにやりと笑って手を振り上げた。

「ようし、作業やめ！食堂へ言って夕食だ、たらふく食って、たっぷり飲みやがれ！いいな！」

男の声に、返事をする警備兵は、いなかった。ただ、ぴたりと動きを止め、人形のように無気力にぞろぞろと、食堂へと流れていく。しかしそこで、突然中央広場の池が、不自然な勢いをもって、ざわざわと波立ち始めた。

「!？」

大柄な男がハッとして、池を凝視した。波は次第に大きくなり、やがて池いっぱいに広がる渦となる。男が慌てて、警備隊の者たちに戻るよう指示する声と同時に、池の水は勢いよく吹き上がって、辺り一面に大粒の雨を降らせる。その勢いの中から、人影が次々に現れ、男と池の間に凜として立ち塞がる。

「な、何だ貴様たちは!？」

大柄な男が驚きを隠せずに叫び立てると、人影のひとりが鋭く言い返した。

「それはこっちの台詞だ。アンビー力をここまで貶めた張本人はてめえか、それとも・・・」

物怖じする気配もなく、ずいとい歩踏み出す人影は、使い込んだ長剣を構えた。

「・・・エーネツカ＝ヘルマンの差し金かい？」

「!」

チャンス VS オーネウス

「・・・エーネツカ」ヘルマンの差し金かい？」

「!」

男は息を飲んだ。

「俺はチャンス、名前はもう知ってるな。無敵のグループ人のためえは、バイドルか？それともオーネウスか？」

チャンスがつぶやく間に、マーティの槍から、凄まじい光が放たれる。波を描いて放たれた光は辺り一面を照らし出し、ざわめく空気が次第に静まっていくのが分かる。ふと、人形のように歩き回っていた警備兵たちが、次々に地面に倒れ付していく。男が驚いて辺りを見回すと、目に付くすべての警備兵は、声もなく、ぐったりと横たわってしまっていた。

マーティは槍を掲げ直し、男に向けて鋭く言い放つ。

「毒を浄化する光を紡いだのです。彼等の中に巣くう毒は、間もなく完全に取り払われるでしょう。でも、あなたのように強い毒に犯された人間には、この光もただの光にすぎません。」

男は、一瞬押し黙る。

しかし次の瞬間には、大きく笑い転げていた。目を大きく見開いたまま、嘲るような笑いを、チャンスたちに向ける。

「言ってくれるぜ、毒に犯された人間だア？ハッ、安っぽく見ちゃ困るぜ、その毒は俺たちに無限の力を与えるんだ！ナプの奴に何を

吹き込まれてきたか知らんが、俺たちにとつちゃあ、あの酒は天国の酒さ！」

エキシイがキツと男を睨んだ。

「歴戦の勇者も、堕ちると惨めなもんね・・・地獄と天国の境目も分からないんじゃ、何を言っても無駄ね。」

「天国の酒を飲んで地獄へ落ちたことくらい、百も承知さ。だが・・・」

男は、ゆっくりと腰から、巨大な戦斧を引き抜いた。研ぎ澄まされた戦斧に、傍らで燃え盛る炎が反射する。

「・・・その地獄も、住み慣れちまうと、天国に変わるもんなのさ。俺の名はオーネウス、岩石碎きのオーネウスって言やあ、故郷では知らない奴はいなかったぜ。」

「あいにくと、田舎の無駄話に興味はないんでな。そっちがやる気なら、容赦しないぜ。」

「容赦できる余裕があればいいがな。ものの数秒で勝負が決まっちゃうかもしれんぜ・・・」

チャンスとオーネウスは向き合った。

残りの五人は一斉に退き、サージとフィンを残して、マーティとノーマ、エキシイは別方向へと駆け出した。

サージとフィンは、身構える二人の脇で、じっと黙って腕を組んでいる。アンビーカーに入る前、遺跡での話し合いでチャンスに、こう言われていたからだ。

「相手が警備隊だけなら、マーティの力でどうにでもなるだろう。だがもしグラップ人がいたら、俺が最初に戦う。サージとフィンは

俺が戦っている間、相手の隙を、絶えず狙ってるんだ、いいな。』

『三人でかかるんじゃないのか?』

『違う。順番に、だ。』

『?・・・』

オーネウスは、色黒の肌におよそ釣り合わない、真っ白い歯を見せて、にやにやと笑いながらチャンスににじり寄る。チャンスは間合いを取りながら、少しずつ下がっていく。

「・・・貴様らが、この街に入らないようにするのが本当の狙いだつたが、俺にとつちや返って好都合だぜ。のこのこ出てきてくれてありがとうよ。思ったより機転がきくらしいから、ここいらで潰しておかんとな・・・」

「そんなに重要な何かがここにあるのか?」

チャンスの言葉が終わるが早いか、オーネウスの戦斧が唸りを上げてチャンスを襲う。チャンスは素早く剣でそれを流し、後ろへ大きく飛びすさる。

「ぐ・・・」

軽く流しただけで、チャンスの両腕はしたたか痺れていた。恐るべき剛腕のオーネウス。

「ここには、我が主、エバ・ヘルマンの秘密が眠っているのさ。」
「・・・エバ?」

ブルーベルデルで、召喚術師のワイスも言っていた名だ。

「エーネツカ様は、数年前に亡くなった。エバ様は新しい我等の主

さ。さあ、無駄話は嫌いなんだったな。さつさと地獄へ叩き込んでやろう。」

オーネウスがつい、と前に出た。そこでチャンスも怯まずに前へ突っ込む。振りかぶる戦斧の間をすり抜け、チャンスは擦れ違いざまに長剣を振り抜いた。軽く、血が飛んだ。

「うはははは、死に際の一撃って奴か？残念だな、魔法も剣も、俺の体には大して通用しないのさ。」

わずかに戦斧をかすめたのか、チャンスの左の額から、血が流れ出ていた。一方のオーネウスは、チャンスを感じた手応えほどの傷はなく、肩口に軽い切り傷が走って、血が滲んでいる程度だった。

「全身の入れ墨は太陽神オスアロスの守り。彫り込まれた言霊が鎧となって身を守るんだ。貴様の剣もこの程度よ。」

と、高笑いするオーネウスの視界に、すらりと光が走った。ハッとして視線を変える間もなく、鋭い痛みが走る。

「な・・・」

目にも止まらぬ早業で飛び込んで来たのは、サージだった。巧みに巨体のオーネウスの死角に入り込んだサージは、チャンスがつけた肩口の傷を、さらに鋭く短剣で切り付けたのだ。小さかった傷が一瞬にしてバクリと開き、鮮血がどつと溢れ出た。

「破れた鎧は脆いもんさ。てめえみてえな鬼畜生に、言霊の鎧なんざ勿体ねえよ。」

「く・・・このちび野郎が!!」

怒りの形相のオーネウスは、流れ出る血も構わずにサージ目掛けて襲いかかる。サージは短剣を素早くしまつと、次々と繰り出される戦斧を軽々とかわす。そうしてかわしざまに、サージはフツと小さく息を吹いた。

「がっ！」

途端に、口を押さえて戦斧を取り落とすオーネウス。サージはとんぼ返りをしながら間合いを取り、にやりと笑った。

「馬鹿みてえに、大口開けてる方が悪いんだぜ。何でも入れて下さいつて言ってるようなもんだ。」

「んがああっ！」

口を押さえて悶絶するオーネウス。サージが得意の吹矢で、オーネウスの口目掛けて、数本の針を吹いたのだ。舌や喉に突き刺さった針の痛み到我を忘れるオーネウスへ、音もなくフィンが近付いていった。

「貴様も運が悪いな。こんな腕利きの冒険者相手に、余裕を出しちゃいけなかったのは、貴様の方だ。」

フィンはそう言い捨てると、肩口の開いた傷口に、右手の指をぐっと突き刺した。絶叫を上げるオーネウスから、ひらりと飛び退くフィンは、手袋をゆっくりと嵌めていく。

「貴様のような巨体には、それで妥当だろう。本来ならこの片手で、少なくとも二百人以上は殺せるんだがな。」

「がっ、がっ、がっ・・・」

オーネウスはフィンの言葉が終わらぬうちに、すでに呼吸困難に陥っていた。色黒の肌がますます黒くなり、目玉が異様に黄色味を帯びる。ぶくぶくと口から泡を吹き出す頃には、もう全身に痙攣がおき、すぐにオーネウスは白目をむいて絶命した。

チャンスたちは、ナプから聞いてすでに、グラップ人の『言霊の鎧』について知っていた。並の攻撃では歯が立たないことは分かっていたので、三段構えの攻撃を計画していたのである。

「見事だな、フィン。凄いぜ。」

チャンスがにこりと微笑んでいた。

「大丈夫だったかチャンス・・・」

「かすり傷さ、大丈夫。サージもよくやってくれたよ。」

「あれくらいは屁でもねえよ。ところで・・・マーティたちはうまくやってるかな。」

チャンスたちが戦っている間に、マーティは警備隊の人間一人一人に、浄化の祈りを捧げていた。完全なる浄化には聖水を与えなければならず、マーティは素早くそれをこなしていった。目を覚ました警備兵にも手伝ってもらい、すべての警備兵に聖水を飲ませるのに、さして時間はかからなかった。

一方ノーマは、街の家々を訪ねてギルド員の家族たちの消息と、その状況を聞き回った。空腹に苦しむ家族たちが教会にいたことが分かると、すぐさま街のパン工場に飛んでいき、たくさんのパンを焼いてくれるように頼んで、教会の裏口から、家族たちを脱出させるノーマ。彼女たちに、裏道を通ってパン工場へ行くよう告げ、捕らえられたギルド員たちを助けに警備隊の地下牢へと急ぐ。

エキシイは、街の正門へ急ぎ、閉じていた門をこじ開けると、すぐさま駆け出して森へと向かう。そこには遺跡に隠れていたギルド員たちが待機していて、エキシイの合図があったら、街へ入っても大丈夫と言われていたのだ。森からエキシイの姿を確認した時のギルド員たちの喜び様は、まさに飛び上がらんばかりであった。

・・・

「しかし・・・この男を殺してしまつて、よかったのか。何かこいつから、聞くことがあつたんじゃないのか？」

フィンは、そつと伺つようにチャンスを見る。チャンスは、屍と化したオーネウスに一瞥をくれ、すぐさま首を振つた。

「・・・いいんだ。最初の会話でそいつの本心は分かつたし・・・何より、あそこまで毒に冒された仲間を、ナプに見せるわけにはいかない。」

「地獄の酒から永遠に解放されただけでも、救われたんじゃないかな。ナプは分かってくれるよチャンス。マーティもきつとそう言うぜ。」

燃え盛っていた炎は、今や小さく、静かになっていた。

門から一斉に入ってきたギルド員たちは、我先にとパン工場へ押しかけ、最愛の家族と抱き合つて再会を祝つた。閉じ込もっていた街の人間も、すべてが終わったことが分かると、ようやく次々に外へ出て、大変な目に遭つたギルド員たちへ労いの言葉をかける。

「チャンス！」

マーティが駆け寄つてきた。脇に一人の警備兵を連れている。警備兵は一本の酒瓶を持っていた。

「チャンス、これがネクトル祭の時に警備隊に届けられた酒だそうです。」

「これを荷車一杯に持ってきたのは、そこに倒れている大男です。何でも、スリスの街から特別の酒を持ってきたとかで・・・」

「スリスの街・・・」

「チャンス、一度警備隊へ行つて、詳しい話を聞きませんか。」

「そうだな。フィン・・・あんたはどうする。もう、どこかへ行つちまうのか？」

フィンチャンスの問いに、寂しげにうなずいた。

「・・・ああ。報酬は前払いで貰っているし、事件は解決したから、もうここにいる理由はない。またどこかの街へ潜り込んで、暗殺稼業に戻るつもりだ。」

フィンはそう言うと、マーティの方へ向いて握手を求めた。

「・・・私のために、泣いてくれたな。ありがとうマーティ。」

「あ・・・い、いえ。」

フィンの手をそつと握ったマーティ。その女性らしからぬ、骨張った手の感触を確かめながら、ほんの少しだけ顔を赤らめる。そして戸惑いながら、マーティは思い切つて口を開いた。

「・・・フィンさん、真実は・・・あなたが思うほど、厳しいものではありません。今、喜びに涙しているギルド員の真実は、あなたが導いたものです。」

「・・・」

「あなたは自分を不運の運び手と言ったけど、たくさんの人に幸運を運ぶこともできたじゃないですか。ユヌ神が二面性を持つ神であるように、あなたにも善の顔があります。もともと、あなたの善の顔を・・・大事にして下さい。これからはあなたの分も、私が祈りを捧げますから・・・どうか・・・」

フィンは、くすつと笑った。美しい笑顔だった。

「・・・私が毒師でなかったら、その麗しい顔中に口付けをしているところだ、マーティ。あんたがそう言うなら、私はもう少し、自分を大事にするでしょう。」

微笑みを湛えたフィンは、チャンスとサージにも握手を求めた。

「さよならフィン、またいつか、どこかで会えるといいな。」

「間違っても敵にはならないでくれよな。毒師相手は願い下げだ。頼むぜフィン。」

フィンは笑顔でうなずいた。

「私も、あんたたちだけは敵に回したくないよ。そうだチャンス、あんたたちの旅には毒がついて回るようだから、これをやろう。」

フィンはロープの裏に縫い付けた隠しポケットから、小さな茶色い包みを取り出した。

「こいつは毒師秘伝の解毒剤だ。ほんの一つまみで効果があるから、五人で飲んでも二回分は使えるはずだ。例のバータ・ラカッティの毒性に、耐えることができるかどうかは、自信がないが・・・」

「ありがとう、フィン。」

「彼女たちにもよろしく言ってくれ。さよなら、友よ……」

黒いローブのフードを目深にかぶり、フィンは静かに歩み去っていった。傍らで燃える炎からのびる影は、フィンの後を追って、そつと闇に消えていく。その後ろ姿を見送りながら、チャンスたちも心の中で、さよなら、友よ……とつぶやくのだった。

「……さあ、警備隊へ行こう。」

オイディエの峠

デュファ大陸随一の商人ギルドを持つ街、アンビーカ。その賑やかな街に以前、ギルド員の父を持つ、ある一人の少女がいた。早くに母を亡くし、父と少女は二人きりだったが、その仲の良さは街でもよく知られていた。

少女は十五になると、腕利き商人の父と連れ立って、大陸を旅して回った。少女の父は主に美術品を扱う商人で、その観察眼の鋭さには定評があった。少女はそんな父を尊敬し、自分もそうなりたいと願って、日々を送ったという。

大陸で最も大きな街スリスに立ち寄った、そんなある日。問屋との商談中、父は突然倒れた。旅の疲労と、もともと丈夫ではなかった胸の病が悪化したのだ。街の医者は、十分な静養と滋養ある食事をとらないと、父の命は長くは持たぬと断言した。

「・・・それで？」

「親子はとりあえず、安宿に腰を落ち着け、それまでの蓄えで何とか食いつないでいく・・・とありました。でもその蓄えだって、あのスリスの街で、どれだけもったか・・・後は、働けない父のために、あの子・・・エバが必死に働いたのでしょうか。」

「あなたと・・・エバの父との関係は？」

「わしも当時商人ギルドにおりまして、彼と共に美術品を扱っておったのです。彼とわしは、同じ美術品でも扱う品が違ったので、普通にありがちな争いも、彼との間には、まったくと言っていいほどありませんでした・・・わしたちは、親友だったのです。」

エバの父は、幼い身を粉にして自分のために働いてくれる娘、エバを気の毒に思い、アンビーカの親友にエバを養女として引き取ってもらえないかと、手紙を出していたのだ。もちろん、エバには内

緒で。老い先短い父のために、若いエバに苦勞をさせるのはこれ以上耐えられないと、父の苦惱が手紙に記されてあったという。

「わしにとつても、エバは可愛い娘です。彼女を養女として迎えることに、何等問題はありませんでした。でも・・・わしがその返事を出す前に、商人ギルド宛てに、彼の悲報が届いたのです。」

それは、エバからの手紙だった。手当ての甲斐無く、父は眠るよ
うに亡くなったと書かれてあった。アンビーカ商人ギルドから、父
を除名してくれるよう頼む言葉で、手紙は結ばれていた。手紙には
ただ、

『スリス、エイブル通りより。エバ〓モーリス』

とだけ、短く署名されていた。

「エバ〓モーリスが、彼女の本名なのか？」

「はい。ちなみに彼女の父親は、カドウル〓モーリスといいます。」

「彼女がスリスで働いていた場所は、分からないか？」

「・・・カデイからの一通の手紙の中には、彼女の働き先について
は何も。・・・私がいるから住込みで働けない娘が哀れだ、という
文があったくらいです。」

・・・

アンビーカ中央広場で燃え盛っていた炎は、無残な一塊の灰とな
って残っていた。結局、火にくべられたものは、街特産の家畜を育
てるための飼料が主で、街の総数三分の二の飼料が、灰となって焼
失したことが分かった。

「あたしや、教会の窓からずっと見てたんだ。あの色黒の大男が、古めかしい黒い背表紙の、厚い綴りの本を、炎の中へ投げ込んだんだよ。嘘じゃないよ。」

「ええ、あたしも見ていたわ。恐ろしいあの男が、彼女の言う通り、黒い背表紙の本を無造作に炎の中へ放り込むのを、ね。一冊や二冊じゃなかったわ、結構な数の本よ。」

膨大な飼料で燃え躍る炎の中にくべられた、黒い背表紙の、数十冊の本……

「……商人ギルドの名簿と、取引の記録？」

「はい。最初はギルドの建物そのものが焼き討ちされたのですが、あまり火は回らなかったようで、小火^{ほや}程度で済んでいるのです。大事な書類や契約書などは、地下に保存しておりますから、燃えたのは机などの家具類でした。」

「その地下の書類倉庫がこじあけられて、特定のものが盗まれたってことね。」

「はい。調べてみたら、歴代ギルド員の名簿と、ギルド創設初期から大切に綴ってあった取引記録だけが、抜き取られていました。それらは他の書類と区別するために、黒い背表紙をつけてありますから、燃やされたのはそれらに間違いありません。地下倉庫内に火をかけることもできたはずですが、他の資料には用が無かったようです。」

「ところで、なぜ飼育用の飼料を燃やす必要があったのかしら。心当たりはある？」

「いいえ……でも確か、あの大男はスリスから来たと言いましたよね。」

「そうらしいわ。」

「実はスリスも、アンビーカと同じく畜産業が盛んな街なのです。事件の発端となった豊穰祭の折、大陸中の街から自慢の家畜を持ち

込まれ、大規模な競り市を行うのですが、その時に最も高値がついたのが、私どものアンビーカ産の牛だったのです。スリス産の牛は惜しくも二番手に甘んじています。心当たりがあるとすれば、あくまで推定ですが、それに理由があるのではないかと……。幸い、これから牧草がよく育つ季節に入りますから、深刻な影響は出ないと思います……。」

「なるほど……。大事な飼料を燃やせば、牛は十分に育たないから、次の競り市ではスリスの牛が勝つってことね。卑劣なやり方だわ。」

・・・

アンビーカの商人ギルド員たちは、チャンスたちが旅立つ前夜、ネクタル祭にも似た盛大な宴を催してくれた。街が解放された喜びも含んだその宴の中、ギルドの長タジムは、チャンスに厚い感謝の礼をのべた。

「フィンにも、もう一度お礼が言いたかったのですが……。残念です。でもむしろは、彼女のことを決して忘れません。そしてもちろん、チャンスさん、あなたがたのことも。」

「ありがとうタジム。フィンもあなたの言葉を聞けば、きっと喜ぶよ。」

そうしてチャンスたちは宴の喧騒の中、静かにひっそりと、去っていった。タジムが用意した謝礼金も受け取らず、少しの食料だけを持って、スリスに向けて旅立っていく。窓の外を見てぼんやりとするタジムに、巨漢オルトスが微笑みかける。

「……。彼等は、行ってしまいましたか。」

「うむ……。結局謝礼金は断られたよ。フィンを手助けしただけで、直接依頼されたわけじゃないから受け取れない……。とき。ああいう生粋の冒険者には久しく会わなんだ。もっとゆっくり、異国の話

でも聞きたかったの・・・」

山々の頂きから朝日が顔を出す。その朝日に向かって歩いていく
チャンスたちの無事を、タジムは心の中で、静かに祈っていた。

・・・

鬱蒼とした森の中を走る街道沿いに、二頭の黒毛の馬が引く、大きな馬車が止まっていた。その馬たちの脇に立つのは、その馬ほどもあるう大柄な、色黒の女。恐るべき悪魔の酒に魂までも冒された、
グラップ人の女戦士マハンダだ。

「・・・やっぱり、あんたの出番が来ちまったようだね。」

マハンダは、生い茂る木々の向こうに呼び掛けた。返答はない。

「オーネウスからの定時連絡がないんだよ・・・どうも、例のチャンスとかいう冒険者の一行に、やられちまったようだね。ベッドの上じゃない男だったのに、惜しいねえ。」

マハンダは唇をぎりりと噛んだ。怒りの形相で森の奥を睨むマハンダは、大きく叫んだ。

「いいかい、必ず奴等を仕留めるんだ！絶対にスリスの街に近付けるんじゃないよ、分かったね！！」

すると、木々の奥から、白い人影が浮かび上がった。遠過ぎて輪郭しか分らないその人影は、黙ってマハンダを見ている。マハンダは握り締めた拳を振り上げた。

「もし失敗してごらん、あんたの大事な子供を、ぐしゃぐしゃに握り潰して、酒瓶に詰めてやる。無事に子供を返してほしければ、下手な考えを起こすんじゃないよっ!!」

マハンダはそう怒鳴ると、勢いよく馬車に乗り込み、馬たちに鞭をふるって駆け去っていつてしまった。白い人影はその馬車が去ると、再び静かに森へと溶けていった。

・・・

アンビーカを出たチャンスたちは、デュファ大陸の街を繋ぐ大きな街道から逸れ、山を越える峠の街道を進んでいた。緑深い森を抜けるのは、どこの土地でも非常に危険な行為ではあったが、その峠の街道を越えることが、スリスの街への一番の近道だった。

周囲の景色がやがて、平地から林に変わり始めると、古びた案内版がチャンスたちを出迎える。

「オイディエの峠か。洒落た名前だな。」

「豊穡の女神に仕える精霊の呼び名ですよ。木々に宿る精霊と言われるています。」

少しずつ歩みを進めて行くチャンスたち。木の葉の雲をすり抜けた木洩れ日が、かろうじて街道に光を落とすそこは、薄暗く、不思議な空間だった。

「結局アンビーカの警備隊に届けられた酒には、傀儡草が入ってたわけだけど、エバつてもともと美術商の娘なんでしょう？そういう毒草に、よく精通してるわね。」

「エーネツカの後釜を継いだだけって考えもあるが・・・アンビーカの一件はエバの差し金に間違いないしな。」

「イーネツカ」ヘルマンの女房なんじゃねえのか。女房だったら、旦那の死後にその仕事を継ぐのは、別に不自然じゃねえし・・・」

辺りはさらに鬱蒼と、緑の影が濃くなっていく。

そよ風が木々を揺らすと、辺り一面からざわざわと、森の話し声が聞こえてくる。チャンスたちは半日ほど歩いたところで、ようやく休息を取ることにした。アンビーカでもらった、ナブ牛の乳で作った極上のチーズを取り分け、パン工場自慢の堅焼きパンと一緒に食べる。

「何ておいしいチーズ！ワインが欲しくなっちゃうわ！」

エキシイが満面の笑みでつぶやくと、ノーマが苦笑いで返した。

「ここから先は、酒は厳禁よ。峠を抜けるまでは、気を引き締めていかないと。野盗や追剥ぎが襲ってくるし、何より凶暴な獣がいるとも知れないし。それに・・・アンビーカでも言ってたけど、この峠には、ソーヤ人が住んでるらしいの。」

別名を「森の人」と呼ばれる、グラップ人と同じく希少な人種であるソーヤ人は、このデュファ大陸にのみ住んでいとされる。森に根差した彼等は例外なく弓の名手であり、その恐るべき弓術は、遙か遠くから小さなネズミの目を、やすやすと射抜くとさえ言われている。

森に溶け込む薄緑色の服をまとう彼等は通常、白い布で顔を覆い隠し、目だけを出している。顔は神聖な魂のあらわれであり、それをさらすのは最大の恥であるという考えがあるらしく、一族以外にその顔をさらした者は、二度と集落に戻ることを許されない。また彼等ソーヤ人の額に、角らしき突起が四つあることでも知られている。どちらかというと触覚に似ているそれは、皮膚が堅く隆起した

もので、本当は角ではない。しかしそれは長く『角』と誤解され、悪魔として迫害されたこともあった。

「そのせいで彼等はひどく閉鎖的で、自分達の集落を守るためなら、ためらいなく人を射殺すそうよ。街道から外れないようにしないと、きつとたちまちやられてしまうわ。」

「へえ・・・それならあちきたちアルファードーラ人も同じよ。この尻尾と大きな耳が、悪魔の証しとか言われた時代があったみたい。けど、こんな可愛い娘が悪魔なら、結構な話だと思わない？」

エキシイは意味ありげにやりと笑う。

「・・・とにかく、下手な争いは極力避けよう。エーネツカ・・・いや、エバの出方が分かった以上、ゴタゴタはないにこしたことはない。」

チャンスはそう言って、口の端についたパン屑を拭くと、再び峠の街道を歩き始めた。森を縫うようにうねる街道の道は、次第に上り坂になっていく。右に左に、くねくねと曲がりくねる街道は、周囲の暗さも手伝って、気怠い疲労感をチャンスたちに与えてくる。そうするうちに、やがて木洩れ日が茜色に変わり、森の木々が殊更に黒々と見え出した夕刻、チャンスたちはその日の歩みを中断することに決めた。

街道をすぐ脇にのぞむ、小さな空間に焚き火を起こし、寄り添うように固まる五人。ずっと静かだったサージは、しきりに周囲を見回し、そわそわと落ち着きがない。マーティがそれに気付いてサージを覗き込むと、いつもなら茶化してふざけるサージが、真剣な顔でうなずき返した。

「ああ・・・何か嫌な雰囲気なんだ。昼の休憩以降ずっと続いている。」

俺の勘はよく当たるんだ、もしかすると尾行されてるかもしれないねえ。」

「この森の中で尾行なんて、そう簡単にできやしないわよ、考え過ぎよサージ。」

エキシイが鼻で笑ってサージの肩を叩く。だが気を張り詰めているのは、サージだけではなかった。

「・・・いや、俺もそう思う。」

「チャンスも？」

「誰が見てる気がするんだ・・・獣じゃない何かが。」

チャンスも、同じように真剣な目を辺りに向けている。マーティは不思議そうな顔をして二人の顔を見つめ、首を傾げた。

「そうですか？・・・二人がそれほど言うなら、我が父トレフィノ大神に、安息の守りをいただきましょうか・・・」

マーティは木に立て掛けた槍を携え、印を刻んだ部分に手を組んで、祈りの言葉をつぶやこうとした、その瞬間。

ひゅっ。

「あっ!？」

突然の空気を裂く音と共に、焚き火の炎が一瞬にして消え去った。

森の人

ひゅっ。

突然の空気を裂く音と共に、焚き火の炎が一瞬にして消え去った。舞い降りた暗闇が、チャンスたちの視界をひどくまごつかせる。サージとチャンスが次々と叫んだ。

「左だ、左から狙ってる！木の影になれ！」

「みんな固まるな、散らばれっ！！」

全員が一斉に散開し、森の闇に散った。しかし二人の言葉とほぼ同時に、恐ろしい早さで次々と矢が繰り出された。

「きゃああっ！」

「ノーマツ！？」

悲鳴は、ノーマからだった。

いちばんノーマの側にいたエキシイが振り返ると、闇に慣れたエキシイの目に、倒れ込んだノーマの姿と、その白い翼に突き立った三本の矢が見えた。エキシイはノーマに駆け寄りたい衝動を必死に押さえ、魔術師の指輪をぐっと握り締めた。

「出よ疾風、鋼の刃を持つ矢となりて、我が意に従え！」

白い閃光が、魔術師の指輪から迸る。エキシイは矢の飛んできた方向目掛けて、魔術師の指輪を嵌めた指を差し向ける。すると、白い軌跡をなびかせた疾風の矢が、次々と森の奥へと放たれた。

一方サージは、図らずもマーティと背中合わせになってしまい、

大木の影に隠れていた。エキシイの魔法が放つ光が、時折森中を白く浮かび上がらせる様を見たサージは、マーティにも森を照らせるかと聞いた。

「ええ、それはもちろん・・・」

「一瞬でいい、敵の姿さえ見えりや、勝負はこっちのもんだ。頼むぜマーティ。」

サージは低く屈み、マーティは静かに槍を掲げて強く印を組んだ。途端に、鋭く走る閃光が森中を突き抜ける。その一瞬の閃光の中に、サージは確かに人影を見た。マーティが放った一瞬の閃光はたちまち消え、サージは勢いよくザツと森へ飛び出す。そして飛び出しざまに、サージは懷にびっしりと並んだナイフダートを、矢継ぎ早に暗闇に向けて投げつけた。

「くっ・・・」

小さくうめく声と、手応えを感じたサージ。そこでもうひとつダートを投げようとしたその時、反対側から、それを待っていたかのようにチャンスが勢いよく走ってきた。

「おりやつ!」

どんつ。

チャンスは力任せに、人影の乗っている木に体当たりをぶちかました。ばさばさと枝が揺れ、幹がぐらぐらと軋む。人影も同じくぐらりと体勢を崩し、必死に枝をつかもうとしながら、地面にあえなく落下する。弓を引くには両手を使わなければならず、まして枝の上という不安定な姿勢のところにダートを受けては、チャンスの体当たりの揺れを堪えることができなかったのだ。

「よくもノーマを！とどめたっ！！」

「サージ！」

サージが短剣を振りかざし、人影目掛けて振り下ろす。だがチャンスがとつさに、そのサージの短剣を弾くように長剣を突き出し、寸でのところでそれを制した。

「ちょっと待てサージ！」

「チ・・・チャンス、何でだよ！俺たちみんな殺されかけたんだぜ！？」

いきり立つサージの向こうから、マーティとエキシイに抱えられながら、ノーマがふらふらと歩いてきた。白い翼に血が滲み、顔が青褪めている。チャンスはその痛々しい姿に眉をひそめながらも、落下した人影に振り返った。人影は白い布で、目以外の顔全体を覆い、薄緑色の服と軽装の皮鎧を着込んでいる。しかし何より目を引いたのは、額から伸びた、四本の突起・・・

「あんた、ソーヤ人だな。」

「・・・」

人影は腕に受けた二本のダートの痛みには耐えながら、うつむいたまま、ゆっくりとうなずいた。驚きに目を見張るサージ。

「・・・どうして俺たちを襲った？あんたたちの集落を脅かすような場所を、俺たちが通ったのか？」

「・・・」

すると、同じように痛みには耐えながら、ノーマもゆっくりとしゃ

がんで、ソーヤ人を見つめた。

「・・・お願い、教えて。あなたたちは、どんな時も集団行動をとるのが常だって聞いたわ。単独で行動するからには、何か理由があるんでしょう？」

「・・・」

そのソーヤ人は、男だった。華奢な体つきがアルル人のマーティに似ている。ソーヤ人は、自分が傷つけたノーマの、静かな問い掛けにも、しばらく黙ったまま答えない。痺れを切らしたサージが、ソーヤ人の胸ぐらを引っ掴んで睨み付けた。

「答える気がねえなら、このまま五体満足で帰すわけにやいかねえぞ、この野郎！てめえの事情なんざ知ったこっちゃねえが、今すぐ答えて楽になるか、この俺に首を折られて楽になるか、どっちか選べー!!」

「サージ、乱暴はいけません！」

マーティが慌てて止めに入るが、サージは怒りに燃える目を、ソーヤ人から放そうとしない。自分より頭二つほど背の低いサージに、万力のような力で締め上げられるソーヤ人はやがて、苦しげに呻きながら、ゆっくりと口を開き始めた。

「・・・あんたたちを、殺せと・・・命令された・・・」

「誰にだ!？」

「名前は、し、知らない・・・大きな、色黒の、髪のない女に・・・」

「

サージはチャンスを見た。チャンスは苦々しげにつぶやく。

「・・・グラップ人か・・・マハンダだな。」

「あの女のことを、知ってるのか・・・？」

サージがなおも詰問する。

「何でマハンダなんかと繋がりがあるんだ、てめえも奴等の仲間か！」

すると、ソーヤ人は激しく首を振った。

「違う！・・・我等が森の神に誓って・・・それは違う・・・！」

目に涙をためながら、ソーヤ人は絞り出すように言葉を続ける。

「・・・息子が・・・俺の息子が、奴等の人質になってるんだ・・・！」
「！」

サージの手が、緩んだ。

「・・・人質？」

ソーヤ人はがくりとうなだれた。

「息子が重い病に冒されて、特別な薬がないと助からないことを知った俺は、ソーヤ人であることを隠して、息子と共に街へ出た。その時訪ねた、ある薬屋のところに、その女がいて・・・」

サージはようやく手を放した。ソーヤ人は黙ってその場に座りこむ。

「・・・薬の代金は、目の飛び出るような高値だった。狩った獲物の毛皮を売って、絶対に支払うからと言っても、金を貰わなければ薬はやれないと、断られた。そのときにその女が、薬代を立て替えてやろうと、申し出てきたんだ・・・」

『その代わり、あたしの頼みを聞いてもらえるかい。何、難しいことは言わないよ、ちよつとした用事を済ましてくれりゃいいのさ。どうだい？』

ソーヤ人は固く目を閉じた。

「・・・信じなければよかった・・・騙されたと気付いたのは、息子と薬屋のいたその部屋を、あの女に呼ばれて離れた時だった。」

・・・

『あんた、相当の弓の使い手だね、手を見りゃ分かる。・・・隠しても無駄だよ、ソーヤ人。』

『・・・』

『頼みつてのはね、あたしの奴隷になってもらうことさ。息子の無事な姿を見たけりゃ、素直に言うことをきくんだね。』

『何だつて！？』

『あの薬屋はあたしの子飼いさ。あたしの言葉ひとつで、あんたの息子を死体に変えちまうこともできる。でもあたしは約束は破らないよ、あんたの息子にかかる金は、すべてあたしが責任を持つ。もちろん・・・死んだ場合は棺桶代までね。』

『！・・・』

『返事はひとつしかないはずだね、ソーヤ人。息子の命はこのあた

しが握ってるんだ。元気な息子を返してほしければ、あたしの命令には絶対服従してもらうよ。』

・・・

ソーヤ人は一粒、涙をこぼした。

「見も知らぬあんたたちを襲ったのは、そのせいだ・・・すまなかった・・・。このまま、私を殺してくれ。あの女の命令を守れなかった以上、息子は殺されてしまうだろう。私だけが生き残るわけにはいかない・・・!」

ノーマは、そっとソーヤ人の手を取った。ハツとして顔を上げるソーヤ人に、ノーマは真剣なまなざしを向けて問い掛けた。

「息子さんの居場所は分かってるの?」

「あ・・・あの薬屋のところに・・・いると・・・」

エキシイもつぶやいた。

「どこの街の薬屋?」

「・・・スリスの街の手前、峠からすぐの、マーシュベイの街だが・・・」

チャンスはそこまで聞くと、ソーヤ人の腕をつかんで、ぐいっと立ち上がらせた。驚くソーヤ人に、チャンスはにっこりと微笑んだ。

「それじゃ今すぐ、息子を迎えに行こうじゃねえか。道案内をしてくれるかい?」

「し、しかし、下手に手を出せば息子が・・・!」

するとサージが、再びソーヤ人の胸をつかんだ。今度は、軽く。

「馬鹿野郎、俺たちをなめんな！今すぐ息子を助けにいくか、この俺に首を折られて楽になるか、どっちか選べ！」

サージはそう言い捨て、ソーヤ人の首に手をかけた。ソーヤ人はチャンスたちの顔を見渡した。傷ついたノーマも、荒々しいサージも、ふと気付くと、みんな優しい目をしていた。

ひよつとしたら、もしかしたら・・・

「・・・お、俺の名は、アスターだ。街道を下るより早い道を知ってる、マーシュベイまで、案内・・・させてくれ。」

・・・

小さなマーシュベイの街に、まるで似合わない大きな屋敷。薬屋の表看板からは想像もできない、異常なほどの羽振りのよさで、その薬屋は街人から敬遠されていた。いつも数人の用心棒らしき男たちを引き連れている薬屋の主ガストンは、その日は普段とまったく違う愛想笑いを浮かべていた。

「これはようこそマHAND様、何かお変わりでもございましたかな？」

マHANDはガストンに一瞥をくれる。

「例のソーヤ人の子供は元気かい？」

「ええ、暴れるようになったので、地下室に閉じ込めてあります。」

「チャンスの奴等さえ殺せば、あのソーヤ人はもう用無しだ。チャ

ンスたちの始末をつけたら、マーシユベイへ来いと言っておいたから、遅くとも明日の昼までに姿を現すはずだ。その時息子と一緒に、仲良く死んでもらうことにする。」

マハンダの後ろから、屈強な男たちが数人現れた。

「ソーヤ人が来たら、こいつらが始末をつける。後のことは・・・分かったね。」

「はい、かしこまりました、マハンダ様。」

「明日の夜にまた来るよ。その時に例のモノをたっぷり渡すから、準備しておきな。」

「はいはい、もちろんでございますー!」

嬉しげに何度もうなずき、ガストンは恭しく頭を下げた。

マーシュベいの街 ガストン邸

暗闇の森の中を疾走するアスター。森の人と異名をとるソーヤ人の機敏さは想像以上で、まるで夜目のきく狼なみの素早さで、深い森の中を事も無げに駆け抜けていく。街道から外れ、道なき道を下り降りるアスターの後ろを、チャンスたちは文字通り必死についていった。アスターの傷は、マーティの聖なる癒しによってすっかり完治している。もちろんノーマの傷も。鞭のようにしなる、木の枝を躲しながらチャンスが言う。

「アスター、マハンダは、俺たちの始末を付け次第マーシュベいへ来いと、そう言ったんだな？」

「そうだ、その時に息子も返すと・・・」

「・・・嘘だな。おまえが来たら、親子ともども一緒に殺すつもりだ。今ごろ用心棒どもが、おまえの殺し方を酒の肴に話してるだろうぜ。」

サージがさらりとつぶやくと、ノーマがサージの背を思い切りひっぱたいた。

「だからこうして急いでるんでしょっ！意地悪ばかり言わないでよ！」

「痛ってえなア、分かった分かった、悪かったよ！」

「アスター、マーシュベいまでどれくらいかかりますか？」

マーティが問い掛けると、アスターはスツと左へ方向を変えて下り始める。

「このまま走り続ければ、明け方になる前にたどり着けるはずだ。」

でも少し休まないと、彼女が・・・」

アスターにそう言われてふと気付くと、エキシイがちょっと遅れている。すでに息を切らし、汗だくになっているエキシイ。よろめきながら木の枝につかまるエキシイにマーティが駆け寄り、水袋を差し出した。

「大丈夫ですか、エキシイ!？」

「はあ、はあ、ご、ごめん、こんな長い山道走るの、久しぶりだから・・・」

一行は立ち止まり、肩で息をするエキシイを見守る。するとチャンスが、エキシイをひょいと背に乗せた。驚くエキシイに、チャンスはにこりと笑ってみせる。

「こういう時、頼れる男が誰か分かるだろ、エキシイ。」

アスターは目を細め、再び斜面を駆け降りていく。エキシイをおぶったチャンスがそれに続いて走る。アスターは小さな声で、すまなそうにつぶやいた。

「・・・すまない、俺のために・・・」

「いいのよ、マハンダが関わってる以上、私たちは黙ってるわけにいかないの。」

「そうですよアスター、息子さんが巻き込まれてしまったのは、私たちのせいでもあるんですから・・・」

ノーマとマーティが、口々にそう言っとうなずくと、アスターは静かにうなずき返した。

「……ところでチャンス、あの女……マHANDは、どうしてあんなたちを狙うんだ？」

「それはな……」

チャンスは、かいつまんで事情を説明した。するとアスターは、覆い隠した顔をあからさまに歪ませ、苦々しげにつぶやいた。

「……バータ・ラカッティ……その名をつけたのが誰かは知らんが、もともとその毒草は、我々ソーヤ人が古から、純粹に、狩りのために使っていたものだ……！」

「何ですって!？」

「ほ、本当かよ！」

アスターは走りながら、もちろんだと言うように大きくうなずいた。

「我々の間では、それはエプスと呼ばれる。罪人の魂を救うために神が遣わした、導きの弓を引く乙女エプスが、その由来だったという。すでに滅びて久しいはずのエプスが、なぜ今ごろ、あんな女に……」

「滅びて久しい、はず？」

「そうだ。我々ソーヤ人でも、エプスはひどく扱いにくい毒だった。いくら獲物を傷つけずに狩れるからといっても、自分がその虜になつては身も蓋もない。子供たちが触るのを防ぐために、我々の祖先は、エプスを残らず摘んで、焼き払ったはずなのだ。その時の唄がちゃんと残っているくらいだから……」

森の密度が、ようやく薄くなってきた。木の葉の屋根の間から、

星の瞬きが美しく見え隠れし始める。

「エプスは、栄養が豊富な、薄暗い場所では育たない、そういう性質をもっている。それが異国のものでないとすれば、もしかしたら・・・エプスの種がどこに残っていて、それを見つけた奴がいるのかも・・・」

そうするうちに、突然森が大きく開けた。

「でなければ、我々ソーヤ人の祖先に、エプスを広めてしまった、卑怯な裏切り者がいたかの・・・どちらかだ。」

立ち止まったアスターが哀しげに振り返った時、小高い丘の上に立つチャンスたちの眼下に、マーシュベイの小さな街並みが飛び込んでくる。東の空は、ようやく山並みを白く縁取る程度にしか明けていない。

「あそこに、大きな屋敷が見えるだろう。そこがガストンの薬屋・・・息子の捕らえられている場所だ。」

エキシイはチャンスの背から降ろしてもらい、寝静まっている街を眺めた。

「・・・その屋敷だけ、妙に明るいな。寝ずの番で待機中・・・つてところかな。」

「そうになると、時はまさに私たちに味方しているということですね、サージ。」

マーティがサージに微笑みかけると、サージも意味ありげにやりと笑った。

「そういうことだ。大盗賊サージ様の腕がなるぜ。なっ、チャンス。」
「本命のお宝は、俺とアスターで探す。その他のことはみんなに任せるよ、好きにやってくれ。ただ薬屋の主には、聞きたいことが山ほどある、覚えておいてくれ。」

不安げにしているアスターの肩を、そっと叩いて微笑むチャンス。

「大丈夫、きつと助け出せる。信じるんだアスター。」

「・・・分かったよチャンス、みんな。俺に・・・力を貸してくれ！」

アスターがひらりと身を返し、丘を下る小道を駆け降り始めると、チャンスたちも意気揚々とそれに続いていった。

空の端がうつすらと白み始めたその頃、ガストンの薬屋でたむろす用心棒たちは、猛烈な眠気に耐えられず、大半がすでに寝入ってしまったっていた。獲物が来るのは昼頃のはずと、確信を持つがゆえの余裕である。

その眠気と朝冷えに、かろうじて抵抗しているのは、屋敷の外を交替で見張っている用心棒たちだけであつた。正面の薬屋入り口に三人、それに似合わぬ大きな表玄関に五人、裏の二つの勝手口に二人ずつ、時折うとうとしながら、無駄話にも飽きたのか、黙って地面を見つめていた。

と、一瞬の空気を裂く音。

「！」

勝手口のひとつに立っていた用心棒の一人が、突然どさりと倒れ伏した。ぎよっとして振り返ったもう一人が、あっと声を上げようというその瞬間、間髪入れず再び響いたその音に、同じく、倒れた。

「さすが弓の名手だ、声を上げさせず、どっちも急所の頭を貫通とは。……森で殺されずにすんだのは、ほんとど奇跡だな。」

チャンスが感心して目をしばたかせた。アスターはにこりと笑って、それほどでも、と言うように小さく首を振る。

「……俺は、今にも心臓がどうにかなりそうだよ。あんたは強いんだなチャンス……」

「場数を踏めば、嫌でもこうなるさ。さあ、こっちはこっちで自由に行こうぜ。」

一方、ノーマとエキシィ。二人連れ立って、薬屋の正面を臨む路地に潜んでいた。

「ねえノーマ、どう料理する？」

「……マーティが聞いたら怒るだろうけど、私は子供を人質にするような連中に、手加減はしたくないわね。」

「ははっ、あちきも同じよノーマ。じゃあ最初はあちきからいくね。」

エキシィは魔術師の指輪に手を添え、一瞬にして鋭い瞳に変わり、呪文を詠唱する。

「惑いし者たちに安息を、心静め瞼を閉じよ。」

エキシイはひらひらと、魔術師の指輪を嵌めた手を、薬屋の正面に向けて振り始めた。

「・・・何だ、眠・・・い・・・」

薬屋の正面入り口にいた三人は、次々と目をこすり、ふらつき出す。そこでノーマがすかさず、腕輪に手を添えてつぶやいた。

「氷の精霊フィジックよ、我が名において命ずる！凍て付く息もて、かの者たちを凍り付かせよ！」

腕輪から、白い光がすらりと伸びた。それは三人の用心棒たちの前を、すっと、通り過ぎる。その途端、用心棒たちは目を見開いた。

「・・・が・・・」

「あう・・・！」

眠気に押されて声が出ないところへ、猛烈な冷気が体の底から沸き上がる。震える間すらなく、一瞬にして用心棒たちは氷の彫像と化す。エキシイとノーマはゆっくりと歩み出ていくと、氷と化した用心棒たちの体を、まったく無遠慮に、がしやりと踏み砕いた。

・・・

「お早うございます、皆さん。」

突然の呼び掛けに、うとうとしていた表玄関の用心棒たちはハッと顔を上げる。そこには、美しい神官、マーティが微笑んでいた。

「私は旅の神官です。ぜひ神の導きについての説教をお聞かせした

いと思ひまして。」

「・・・説教だア？夜明け前だつてのに、そんな話に付き合つてられるか！とつと消えろ！」

「おや、付き合えとは言つておりませんよ。どうあつても聞いていただくんです。」

マーティは、掲げた槍にすつと手を添えた。聖なる印から白い光が放たれる。その閃光に目がくらんだ五人に、マーティは一気に突つ込むと、槍の柄を巧みに振るい、瞬く間に五人まとめて気絶させてしまう。

「いやあ、おまえの槍術は壯観だね。相変わらずいい腕前だぜマーティ。」

「サージ・・・勝手口の見張りを倒しに行つたのでは？」

「おいおい、大盗賊をなめちゃいけねえぜ。たった二人の見張りを黙らせるくらい、瞬きの間で十分だ。それより、早く屋敷内に入りちまおうぜ、他の奴等に気付かれちまう。」

「・・・そうですね、行きましようか。」

マーティが先に、屋敷内へと侵入する。

サージはその姿を見送ると、倒れている五人にそつと歩み寄りながら、短剣を取り出す。そしてひとりの男の脇腹に、素早く短剣を突き立て、無遠慮にぐいと捻つた。男は声も出ず、簡単に絶命する。まるでただの作業のように、手早く五人を始末したサージは、その懷を漁りながらつぶやいた。

「おまえらみてえなごろつきは、神さま本人から、たつぷり説教を聞いた方がいいぜ。」

ガストン邸 地下室の秘密

勝手口から侵入したチャンスとアスターは、忍び足で広い屋敷の廊下を歩いていった。大きな台所と食堂を通り過ぎ、小間使たちが休む小さな休憩室前に差し掛かると、大きないびきが聞こえてきた。アスターが、物問いたげにチャンスに目配せすると、チャンスはうなずいて、そつと休憩室に忍んで行く。

狭い休憩室に、四人の屈強な男たちが眠り込んでいた。チャンスは短剣を抜き、いちばん手前の男の脇腹に素早く突き刺す。その手首を捻ると、目を見開いた男は声もなく、がくりと崩折れた。小さな声でチャンスは言う。

『サージから教えてもらったんだ。闇討ちに似合いの技だろ。』

そうして次々と静かに息の根を止めていき、残りの一人になった時、チャンスは男の腕を背後からいきなり捻り上げた。

「うがつ・・・な、何だ、誰だ!？」

「大声を出すな。仲間たちみたいになりたいのか？」

男は目の前に転がる、ぐったりとした屍と化した仲間たちを見て仰天する。慌てて口を嚙み、かくかくとうなずいた。

「主の部屋はどこだ。正直に言わねえと、耳を殺ぎ落とすぞ。」

「に、二階の左隅の部屋だ、嘘じゃない!」

「それと、ここにソーヤ人の子供がいるだろう。どこに閉じ込められているか、もちろん知ってるな。この立派な腕の肉を殺ぎ落とされたくなきゃ、正直に言うんだ。」

チャンスは短剣の刃先を、男の腕に軽く突き刺した。男は一瞬で脂汗を吹き出し、狂ったようにうなずいた。

「ち、地下だ、地下室にいる！鍵はガストン様が持つてるんだ、た、助けてくれえ！」

「ようし、上出来だ。約束通り肉を殺ぎ落とすのはやめよう。」

ホツと息をつく男に、チャンスは短剣を突き立てる。もちろん、脇腹に。男はホツとした表情のまま、がくりとうなだれ息絶える。

「命を助ける約束は、した覚えはないんでね。いちばん楽に死ねたんだ、悪く思うなよ。」

「二階の左隅の部屋だな、行こうチャンス！」

チャンスとアスターは静かに廊下を進んでいく。
と、突然右脇の扉が押し開かれた。

「！」

ギョツとして壁際に張り付くチャンスたち。だがそこから顔を出したのは、ノーマとエキシイの二人だった。

「何だア、脅かすなよノーマ！」

「それより、息子さんの居場所が分かったの、私とエキシイで先に地下室へ行ってるわね。どうせ見張りの連中がいるでしょうから、綺麗に片付けておくわ。」

「分かった、俺たちも鍵を取り次第、地下室へ行くよ。」

チャンスとアスターは再び静かに歩き始める。間もなく階段に差し掛かるうという時、ひそひそと小さな声が聞こえてきた。どうや

ら争っているようだ・・・
チャンスはピンときた。

「こら、サージ、マーティ！」

「あつ、チャンス！サージに何とか言ってやって下さいよ！部屋という部屋に忍び込んで金品を漁ろうとするんですよ、私たちはアスターの息子さんを探しにきたっていうのに！」

サージはと見ると、どこ吹く風で部屋を物色し続けている。
チャンスは小さくため息をつき、マーティにそつとつぶやいた。

「・・・盗賊団の仕業に見せるための、偽装工作だと思えばいいさ。
どうせロクな金の儲け方をしていない奴の屋敷なんだから。」

「そうそう、チャンス、頭いい！」

サージがつきつきとそう言うと、マーティはキッとサージを睨み付けた。

「・・・チャンスがそう言うなら、分かりました。納得しましょう。
サージ、私はチャンスたちと一緒にいきますからね、後は勝手にして下さいよ！」

マーティはぷりぷり怒って、階段を上っていく。チャンスとアスターは顔を見合わせ、次いで、いきいきと部屋漁りを続けるサージを見つめる。アスターがぼつりと言った。

「・・・やはり神官と盗賊は、ウマが合わないようだな。」
「こついう時だけは宿敵になるね。」

二人が階段を上っていくと、ほどなくマーティが立ち止まっていた。マーティはチャンスに目配せし、階段の一部をそつと指差す。チャンスがその先を見てみると、重厚な手すりの足元に施された、細い絹糸のわずかなきらめきが眼に入った。マーティはすぐさま階段を降りていくと、サージの耳を引つ掴んで戻ってくる。

「あいてて、耳はやめろよ、何だよおい！」

「サージ、そろそろ二階に掘り出し物を探しに行きたいんだが、こいつをどうにかしてもらえるかい？」

チャンスがそう言うと、サージはその絹糸の方を見、一瞬で目付きが変わる。

「・・・ほう・・・この手口は俺と同業者か、でなきゃ暗殺稼業だな。おいアスター、階段の手すりの裏側を覗いてみな。」

アスターがひょいと手すりから身を乗り出して見ると、目立たぬように、小さな仕掛けが取り付けられていた。

「触るなよ、毒が塗ってあるぞ。それとこっちには多分・・・ああ、あったあった。見るよ、こっちの糸は、二階の用心棒どもの部屋に繋がってるはずだ。二階の方が随分手強いみたいだぜ、どうするチャンス？」

サージは、手際よく罌を取り外しながらつぶやいた。チャンスは、それを聞くのか、と言いたげにしてにやりと笑った。

「マーティは、主の部屋の前で待機してくれ。俺とサージで、先に二階の番犬を全員黙らせちまう。アスターはマーティの側で、弓で援護してくれ。」

階段を上がりきったところで素早く二手に別れると、マーティたちは左隅の扉の前でじつと身を潜めた。チャンスたちは奥まった通路の続く右手側を、忍び足で進んでいく。だが途中からサージひとりで、廊下を音もなく歩いて行き、ひとつひとつの扉の前で聞き耳を立てていく。そうして全部の扉の前に立った後、チャンスに向けて手を振った。

「そこか。」

チャンスは静かに、右開きの扉の左側に立った。

それを見計らい、サージは短剣を二本取り出して、わざとそれを小さく握り合わせた。当然、かすかだが確かな金属音が、静かな廊下に響く。途端に扉の向こうの気配が強まり、扉が突然、バンと蹴り開けられた。

そこでチャンスは、目にも止まらぬ素早さで引き抜いた長剣を、開いた扉ごと勢いよく突き刺した。

「ぐあああつ」

サージの側に気を取られていた用心棒たちは不意をつかれ、一気に浮き足だつ。長剣に貫かれた男がどさりと倒れると、廊下に躍り出ようとしていた男たちの視線はチャンスの方へ向いた。そこでサージがずっと男たちに近付いていき、腕を数回振り抜く。大袈裟な血飛沫が舞い上がり、二人が崩折れた。最後に残った一人が、慌てて剣を抜こうとするとところへ、アスターの放った矢が唸りを上げて襲いかかる。

「ぎゃあつー！」

狙い変わらず、男の耳が射抜かれた。しかし次の瞬間、チャンスがハッとして叫んだ。

「マーティツ！後ろ！」

マーティはすぐさま大きく飛び退いて、扉の前から離れた。いつの間に開いたのか、主の部屋の扉の隙間から、ひとりの男が忍び寄ってきていたのだ。アスターも同じように飛びすさり、矢をつがえようとする。その瞬間、男から鋭い光が走った。

「うあつ・・・！」

サージが使うものとよく似たナイフダートが、アスターの弓を持つ手と、矢をつがえようとした手を容赦なく突き刺した。恐るべき早業である。ものも言わずに踏み込んでくる男が、弓を取り落としたアスターに向けて、反り身の短剣を振りかざすのを見たマーティは、槍で応戦しよう構えるが、男はその動きを読み、紙一重でそれを躲してアスターに突っ込んでいった。

「アスター！！」

どん。

鈍い衝撃音がした。

もつれるように血が滴り落ちて廊下を汚していくのを見たチャンスたちは、一瞬息を飲んだ。

「馬鹿め・・・我等ソーヤ人の武器が、弓だけだと思っなよ！」

どさりと倒れ伏したのは、男の方だった。見ると、男の喉ぶえに鋭い刃が突き刺さっている。それはアスターの腕から伸びていた。

「・・・か、隠し武器・・・」

サージが目を丸くして呻いた。

「腕や足に、こうして刃を隠しておくんだ。邪魔にならないし、いざという時、こうして役に立つからな。」

マーティはすぐさまアスターの傷を癒し、チャンスとサージは、耳を射抜かれてもがき苦しむ男を締め上げる。

「ひいい、何でだ、どうして夜明け前なのにここへ来れるんだ、マハンダ様は昼頃だと言ったのに・・・！」

「そのマハンダは、いつここへ来る？」

「今日の夜だ、ガストンに金貨を渡しに・・・！」

「こここの親父に金を？なぜ？」

男は血だらけの耳を押さえ、泣きながら首を振って、それは知らないと訴えた。

「その答えは、直接聞いた方が早いですよ、チャンス。」

マーティの声に振り返ると、そこには寝間着姿の老人が、怯えた顔で縮こまっていた。アスターに襟首をつかまれているその老人こそ、薬屋の主ガストンだ。

「た、助けて、助けてくれ、殺さんでくれ！子供は返す、今すぐに返すから・・・！」

サージはガストンを一瞥しながら、無造作に短剣を振り降ろす。

耳を射られた男の胸から、勢いよく血が吹き出した。ガストンは青褪め、必死に命乞いを繰り返した。

「おまえとエバ、マハンダの繋がりは何だ。なぜおまえに金を持つてくるんだ。正直に答えねえと、死ぬより痛え目を見るぜ。」

サージが、血まみれの短剣をガストンの前に突き出した。ガストンは震えながら叫んだ。

「へ・・・ヘルマン様とは古い付き合いで、よく一緒に商売をさせてもらったんだ！その時に、ある毒草の話をしたただけだ、本当だ！」
「バータ・ラカッテイのことだな？」

「そ、その通りだ。わしはその草の栽培を管理しとるんだ、それで金を貰えるんだ！」

「さ・・・栽培だつて!？」

「地下に栽培しとるんだ、あれを栽培できるのはわししかおらん、だからヘルマン様はわしを大事に面倒みて下さるんだ！」

ガストンを引き連れ、地下室へ向かいながら、チャンスたちは驚きで息が詰まるのを感じていた。

「エーネツカ」ヘルマン様は、奴隷商人の顔を持っていた。あの毒草はそれに利用されたんだ、飲ませさえすれば、健康を損なうことなく奴隷にできるんだから。エーネツカ様が亡くなり、その養女エバ様に権限が移ってから、付き合いは変わらずに続いている・・・

「養女・・・エバが？」

「奥様のなかったエーネツカ様には、当然お子様もいない。エバ様は、もともと秘書のような形で雇われたらしいのだが、その有能な働き振りをエーネツカ様に認められ、養女として迎えられたのだ。」

エバ様も、エーネツカ様に劣らぬやり手だよ、エバ様が主に変わってから、毒草の栽培をもっと増やせと、催促ばかりされているから・
・・」

「・・・」

地下室へ降りると、そこにはノーマとエキシイが待っていた。足元に転がる男たちは、黒焦げになって事切れている。おどおどしながら、ガストンは首に下げた鍵を外し、鍵穴に差し込んで捻った。かちやり。ゆっくりと扉が開き、中へ入っていくと・・・

「お父さん・・・?」

「・・・アービイ・・・アービイ! 迎えにきたぞ!」

開かれた格子戸から、可愛らしい六つほどの男の子が飛び出してくて、アスターにすがりついた。アスターは目に涙を浮かべ、息子を愛しげに抱き締めた。

「すまなかった、辛い思いをさせて・・・! さあ森へ帰ろう、お母さんも心配してるぞ。」

チャンスはアスターの肩を優しく叩き、にっこりと微笑んだ。

「アスター、後は俺たちに任せて、早く森へ戻れ。夜明け前に街を出た方がいい。後は俺たちの領分だ。」

「今度何かの病にかかった時は、薬屋よりも先に、教会へ足を運んでみて下さい。必ずそれなりの治療をしてもらえますよ。」

マーティが自信を持ってそう言うと、アスターもそれに応えて微笑みを返す。

「アービー、この人達はおまえを助けるために、父さんに力を貸してくれた、勇敢な人達なんだ。おまえもお礼を言っておくれ。」
「うん。助けてくれてありがとう、おじちゃん、お姉ちゃん。」
「お、おじちゃん・・・」

サージがのけ反る。

アスターはアービーをしつかりと抱き締めながら、チャンスと固い握手を交わす。そしてアスターは、小さな青い巾着袋を手渡した。薬草の香りがする。

「チャンス、これを貰ってくれ。これがあれば、俺の仲間はある。俺たちを決して襲わない。獣よけの効果もあるから、きっと役に立つはずだ。・・・ありがとうチャンス、あんたたちのことは、一生忘れない。」

「また、会えるといいな。」

アスターはしっかりとうなずき、息子アービーとともに、振り返りながら、ゆっくりと去っていった。

「さて・・・それじゃガストンさん、バータ・ラカッティの栽培場所へ案内してくれ。」

「で、でも・・・」

「何よ、この期に及んで逆らう気なの？」

エキシイが鋭くガストンを睨むと、ガストンは慌てて首を振って、格子戸の先にある通路の突き当たり、小さな落とし格子へと、チャンスたちを案内した。その鍵を外し、ゆっくりと格子を取り外すと、そこに細い梯子が見えた。

「・・・この梯子を降りれば、そこが栽培場所になつとるよ。」

チャンスは、その暗闇に続く梯子を覗き込んだ。
ちよつと考え、ガストンに振り返る。

「・・・じゃ、あんたが先に降りろ。」

「えっ・・・」

「何をためらう、降りてみるってんだ。」

チャンスはぐいとガストンを引き寄せ、乱暴にそこへガストンの
体をつっ込んだ。悲鳴を上げるガストンは、梯子をつかみ損ねて、
真つ逆様に暗闇に落ちていった。

「チャンス、何てことを！乱暴すぎますよ！」

マーティが、いつになく乱暴なチャンスに小言をついたその瞬間、
けたたましい吠え声が暗闇の穴から響いた。次いで、ガストンの悲
鳴。恐ろしい唸り声と悲鳴が交錯した後、ほどなく、穴は静かにな
った。

「主は飼い犬に餌を与え、飼い犬は餌を平らげた・・・ってわけだ。
穴を覗いたとき、獣の匂いがしたんで、すぐに感付いぜ。大体、こ
んな狭い穴の奥に、栽培場所があるもんかい。」

「じゃあ、どこに・・・」

「見当はついてるよ。」

チャンスが、目の前の壁を指差した。

「壁と壁のつなぎ目部分の床が、妙に綺麗だ。しょっちゅう動いて
る場所でないや、こつはならねえぜ。」

落とし格子を元通りに嵌め直し、その壁の前に立つと、チャンスは壁全体をじっくりと眺め始める。

「ここ・・・だな。」

石を塗り込めて作った壁の、一部。丸い小さな石を押すと、その石壁がゆっくりと軋み、開き出した。奥には細い階段が続いている・

戦斧の墓標

「ここ・・・だな。」

石を塗り込めて作った壁の、一部。丸い小さな石を押すと、その石壁がゆっくりと軋み、開き出した。奥には細い階段が続いている。

「足元に気をつけろよ。階段全体が苔でぬるぬるしやがる。」

「すごい厚みの苔ね、絨毯みたいだわ。たかが地下室の階段に、この厚みは異常ね・・・」

「・・・ねえ、サージ・・・」

エキシイが、鼻を押さえてサージを引っ張った。サージもしかめ面をしながら、うなずき返す。

突然、階段を降り切ったチャンスが立ち止まった。ランタンを持った手をそのままに、チャンスは絞り出すように呻いた。

「・・・何てこった・・・!」

美しい、小さな赤色の花。

広い地下室を覆うように広がる、夢のような空間。

しかしそれは、地獄の景色でもあった。腐りかけた生き物の屍が、地下室いっぱいにとろ狭しと横たわり、その美しい赤い花の、土壌となっていた。エキシイとサージが感じたのは、これらの屍臭だったのだ。もちろん階段を覆う厚い苔は、これらを引き摺り入れた時、階段にこびりついた血糊を、栄養にして育ったに違いない。

「薄暗く、栄養豊富な土に生える・・・アスターが言った通りですね・・・」

マーティが、やるせない顔をしてうつむいた。ランタンに照らされた赤い花には、何の罪もないかのように見えた。しかし・・・

「チャンス・・・！」

ノーマが悲鳴のような大声で叫んだ。皆が振り返ると、そこには、動物ではない屍が幾つか転がっていた。

「なるほど・・・邪魔者は消せるし、花は育つし、一石二鳥ってわけか。・・・虫酸が走るぜ。」

だがそこには、人間の屍よりも特徴的なものが、数多く横たわっていた。その屍には特に、美しく瑞々しい花が咲き誇っている。

「・・・スリスも畜産業の盛んな街だっていうのは、ひょっとして・・・」

地下室に入る大きさにぶつ切りにされていたが、それは紛れもなく、牛の屍だ。立派な角を持った牛の頭が、花の群れの間から顔を覗かせている。チャンスは唇を噛み締めた。

「マーティ、後は頼む。」

「・・・はい。」

マーティは静かに槍を掲げ、目を閉じた。

「さ迷える神の御子たちよ、我が父トレフィノ大神の導きによって、光の国へ帰り賜え。暖かき安らぎの国へ、帰り賜え・・・」

ぱあつと、美しい白亜の光が染み出した。薄暗い地下室が、まるで真昼のように照らされたかと思うと、赤い花に埋もれていた屍たち、それよりも眩く光を放ち始める。光に包まれた屍はゆっくりと、静かに、光の砂となつて崩れていき、後には小さな赤い花だけが残つていった。

「・・・栽培場所はここだった・・・じゃあ、加工場はどこかしら。摘み取つて数時間で枯れてしまう花を加工するのに、スリスに持ち帰つてからじゃ間に合わないんじゃないかな・・・」

エキシイはそうつぶやくと、屍の消え去つた地下室をぐるりと眺める。

「あれがそうかしら。」

「・・・？」

エキシイは、天井からぶら下がっている鎖を指差した。その鎖には大ぶりの桶が吊してあり、どうやら上の部屋へと、巻き上げられるようになっていふらしい。チャンスタちは急いで地下室をかけ上がり、上の部屋を探してみた。

「これは薬草の調合室かな。ずいぶん色々な薬がありますね・・・」

いかにも、薬屋らしい部屋だった。あらゆる類いの薬が乱雑に置かれていて、その中で唯一、整頓されているのが、あの桶を引き上げるための一角であつた。そこにはちゃんと、バータ・ラカッティを圧搾するらしい機械と、その絞り汁を瓶に詰める機械が並べてあつた。瓶詰め機械の脇に、大きな木箱が置かれてあるのを見たサージが、何気なくその蓋を取つてみると、たつぷりのおがくずの間から、八本の黒い瓶が覗いていた。

「チャンス！これ、全部バータ・ラカッティの原液だぜ！」

「・・・マハンダが夜に金を持ってくるってのは、これと引き換えについてことなのか。」

チャンスは注意深く瓶を取り出して、それらの中身を全部、小さな流し場へぶちまけた。空っぽになった八本の瓶を見つめ、チャンスはいつになく厳しい目をしてつぶやいた。

「地下室のバータ・ラカッティは、放っておけば枯れちまうだろう。そうなったところで燃やせば、煙でこっちがやられることもない。取り敢えずナプとの約束のうち、ひとつは果たせるわけだ・・・」

「マハンダは、どうする？」

サージが聞くと、チャンスはうなずいた。

「話からすると、相当したたかな女らしい。オーネウスの時と同じ展開になるだろうが・・・それをためすのに、この瓶を利用してやる。」

チャンスは、夜明けの美しい陽射しを反射させる、八本の瓶を指差した。

・・・

片隅にかしこまって膝まづく、グラップ人の女戦士マハンダは、目の前で身繕いを続ける主に向けて、礼をした。

「それでは私は、マーシユベイへ行ってます。ガストンへの報酬は、一瓶につき千五百ツークで、よろしゅうございますね。」

マハンダが念を押す。主は大きな鏡に向かって、豊かな栗色の髪をとかしながら、マハンダを鏡越しに睨んだ。

「頼みましたよマハンダ。ガストンはわたくしの大事な商売道具。金さえ十分に与えていれば、裏切りなど思い立ちもせぬはず。丁重に扱ってあげて下さい。」

「かしこまりました、エバ様。」

美しい横顔が、マハンダへと振り返る。その緑の瞳に睨まれると、相変わらず震えがくるマハンダ。その瞳の冷たさは、あの前主人エーネットカを、すでに凌いでいる。

「・・・オーネウスの二の舞いにならぬよう、気を引き締めてお行きなさいな。」

「か、かしこまりました。」

マハンダが膝まづいたまま深々と頭を下げると、エバはついと立ち上がって部屋を出て行った。皺ひとつない白い肌、すらりとした体。美貌の才腕と誉れ高い女商人、エバ＝ヘルマン。だがその裏の顔を知るマハンダは、同じ女ゆえか、その後ろ姿にはいつも、尋常でない何かを感じるのだった。

馬車を駆り、スリスの街を後にしながら、エーネットカ＝ヘルマンの奴隷になった時から繰り返されている、このマーシュベイへの行き来について、マハンダはいつも考える。馬車にはいつも、不必要なほどたっぷりのツーク貨幣・・・通常千五百ツークと言えば、仕事もせずに、半年は遊び惚けて暮らせる金額だ。一瓶の薬にそれだけの大枚を払うからには、それを上回る利益があるのだろうが、マハンダはその裏側を、漠然としか理解していない。

でもそれを知ることがあったとしても、現状には何の変わりもな

いことも、マハンダは知っていた。自分が、あの酒がないと生きていけないことも、その酒を得るために、エバに一生涯従わねばならないということも。

『・・・邪な生き方に慣れちまうと、その住みやすさにも慣れちまうのさ。勇者呼ばわりされていた時の、正義振った振る舞いなんざ、今じゃすべて道化のお遊びさ・・・』

グラップ人という恵まれた人種に、かなう者はそういない。力なき者をねじ伏せ、殴り飛ばせば、彼等は怯えた目で許しを請い、何度も頭を下げる。それは、自分達が飲む酒と、同様の高揚感を与えるものだと気付いた時、頭のどこかで、絶望を覆い隠す極彩色の興奮が沸き起こった。極彩色の興奮に隠された絶望は、それでも時折、勇者と呼ばれた日々を断片的に思い出させてくる。その栄光の日々を振り返るたびに、あの時だったら決して許されない悪事に荷担している自分を、ほんの少し哀しく思うこともあった・・・

「？」

間もなく、マーシュベイへの峠道に差し掛かるという時、脇道に小柄な男が立って、マハンダに向けて手を振っていた。マハンダはふんと鼻を鳴らし、いつものように無視して通り過ぎようとした。しかし、通り過ぎる瞬間、その男の持っていたものに目を奪われた。

「どう！どうどう！」

黒毛の馬の手綱を引き、馬車を急停止させたマハンダは、急いで飛び下りて男の前へ駆けていった。

「さすがに目敏いじゃねえか。こいつの価値が分かるのは、あんた

らグループ人の他にないと思ってさ。」

大胆にそう言った小男は、何とサージであった。手には、四本の黒い瓶を携えている。たつぷり皮肉のこもった口調に応えず、マハンは大きく手を振り上げて、サージにつかみ掛かるうとした。サージはヒョイと体を躲けてせせら笑った。

「おいおい、いいのかよ。俺が手を放せば、こいつは割れちまうんだぜ。ちなみに残りの四本は、俺が全部捨てちまったから、無駄に俺を怒らせない方がいいぜ。」

「な……んだって!？」

「タベ、ガストンの屋敷に忍び込んだ時、こいつを頂戴したのさ。馬車にはこいつをかうための金が、どっさり積んであるんだろ?」

サージはにやにやと瓶を弄ぶ。マハンはぎりぎり唇を噛み締めた。

「……貴様、何者だ?」

「答える必要はないね。ただ、ガストンの屋敷には前々から目をつけてたのさ、あんたらが出入りするようになってから、妙に羽振りが良過ぎるんでな。こいつの存在をつきとめるにや苦労したんだ。その馬車の金全部を頂戴してもまだ足りねえな。」

サージはわざとらしく流し目で馬車を見る。そして、一層わざとらしく、思い出したようにつけくわえた。

「タベは、六人の冒険者風の連中がガストンの屋敷に押し入って、用心棒どもを全員ぶつ殺してくれてな。おかげで俺は、こいつを楽に盗み出せたってこった。ガストンもぶち殺されちまったし……それがどういう意味か、あんた分かるだろ。」

「ガ、・・・ガストンが殺されただと!？」

「ああ、嘘じゃねえ。俺はそいつを踏み越えて、こいつを手に入れたんだからな。」

マハنداはがくがくと震えた。常々、ガストンにしか、バータ・ラカッティは栽培できないとエバから言われていたのを思い出し、目の前がぐらぐらするマハندا。ガストンが死んだ・・・あの酒が飲めなくなる、あの酒が・・・

「そ、その瓶をよこしな!」

「でけえ口叩くなよ。割っちまうぜ!」

サージは一本を振り上げた。マハنداは慌てて口を押さえる。全身に汗を浮かべていた。

「た、頼む、瓶を・・・瓶を頂戴!馬車の金は全部やる、全部やるよ!だから・・・!!」

「最初からそう言やあいなんだ。ほら、こいつらだろ。くれてやるよ。」

サージは、ゆっくりと一本ずつ、黒い瓶を空中に躍らせた。マハنداは見開いた目を瓶から放さず、必死の思いでそれを受け取る。そして四本目を受け取った瞬間、それらを地面に置き、大きな戦斧をガツと構えた。

「こうなったら、こいつらを持って地の果てまで逃げるしかない・・・!その金は渡さないよ、あたしのものだ・・・あたしのものだあつ!」

戦斧を振り回して突進するマハندا。サージは素早く身を返して

草むらへと逃げ込む。そうしながら、サージはおかしそうにつぶやいた。

「あんな水入りの瓶がそんなに大事かよ。やっぱりグラップ人てのは頭が足りねえや！」

「なっ・・・！？」

マハンダは立ち止まった。

踵を返して瓶の所へ戻り、急いで蓋を開けて匂いを嗅いでみる。わなわなと震えるマハンダが叫んだ。

「み・・・水・・・そんな・・・！」

「残念だったな。原液はみんな、俺が捨てちまったぜ、マハンダ。」

マハンダが蒼白な顔で振り返ると、そこに、サージも含めた五人の冒険者が立っていた。

「チャ・・・ンスか・・・貴様・・・！！」

「花もみんな処分した。おまえらの大事な悪魔の毒草は、この世にはもうない。あきらめるんだな。」

「ああ・・・あー・・・そんな・・・そんな馬鹿な！」

絶望に歪んだ顔で絶叫するマハンダ。すでにその目には理性はなかった。むき出しの狂気によって瞬きすら忘れている。

「あんたが巻き込んだ、罪もないソーヤ人の子は返してもらったわよ。観念するのね。」

ノーマが鋭く言い捨てる。マハンダは血走った目をチャンスに向け、さらに叫んだ。

「何てことを！何てことをしてくれたんだ・・・ちきしょう、ちきしょおおっ！！」

「！」

怒りと絶望に我を忘れたマHANDAが、大きな戦斧をチャンス目掛けて投げ付けた。チャンスとマーティが同時にスツと身を屈め、長剣と槍でそれを大きく弾き飛ばす。重々しい音を立ててそれが地面に突き刺さると、マHANDAは狂ったように突進してきた。

「があああつ、殺してやる、殺してやる、殺してやるううあああつ！！」

チャンスは長剣を脇に引き締めて構えた。突進してくるマHANDAの勢いを、飲み込むような素早さで、恐れ気なく立ち向かう。

どんつ。

マHANDAの巨体と、チャンスの体が、同時に宙に浮いた。マHANDAがチャンスの両肩をつかんでいる。そしてチャンスの長剣は・・・

「う・・・ぐっ・・・」

グループ人自慢の言霊の鎧も、あまりにも真っ直ぐなチャンスの剣と、正気を失って勢いをつけすぎたマHANDAの軽率さに、その効果を失っていた。腹部に深々と突き刺さった長剣を、確かめるように見つめると、マHANDAはチャンスの肩を、ゆっくりと揺さぶった。

「・・・なあ・・・チャンス、おまえたちも、勇者なのかい？あたしたちが、かつて呼ばれたような・・・勇者・・・」

チャンスは、小さく首を振った。

「違うよ。」

マハンダの目は虚ろだったが、どこか、満足げだった。

「たとえ誰かにそう呼ばれても、俺たちは俺たちだ。怪物と宝物の溢れる、危険の坩堝^{るつぼ}へ飛び込みたがる、ただの冒険者さ……」

「……冒険者か……ああ……」

マハンダはうつすらと微笑みを浮かべ、がくりと膝をついた。

「……ナプに……すまないと、言ってくれ……」

「約束する。」

「あたしは……先に、里へ帰ろう……懐かしい里へ……帰……」

そのまま、天を仰ぐように、マハンダは地面に倒れた。その死に顔は……安らかだった。

「……」

長剣を引き抜いたチャンスは、マーティに目配せする。マーティは、ゆっくりとマハンダへ歩み寄り、そつとその大きな手を握り締めた。

「我が父トレフィノよ、哀れな運命の小羊を、その無限の慈悲によって導きたまえ。暖かき光の国へと・・・導きたまえ・・・」

ゆつくりと、マハンダの体が光に包まれていく。その様を見つめるチャンスたちに、言葉はなかった。その屍が光の粒となって消え去るまで、そこに立ち尽くしたままだった。後には・・・マハンダの大きな戦斧が、墓標のように、地面にそそり立つのみだった。

港町スリス

「ご主人様、ご主人様！」

「何です、騒々しい。どうしました？」

慌ただしい執事の様子に眉をしかめながら、エバ＝ヘルマンは顔を上げた。

「お屋敷の正門に、マハング様の馬車が・・・！」

「！」

エバは小走りに駆け出した。長い廊下を抜けて階段を下り、贅沢な作りの玄関の扉を乱暴に開け放つ。

「これは・・・！」

エバの目の前には、黒毛の馬二頭が引く馬車と、見慣れぬ初老の男が立っていた。初老の男は慌ててお辞儀をしながら、たどたどしく口を開いた。

「あ、あの・・・若い神官様から、この屋敷へ馬車を届けてくれと、街の入り口で頼まれまして、はい・・・」

エバは男の言葉を聞きながら、馬車の中を覗いた。その途端、ぎよつとして息を飲む。それを見た男が必死に腕を振って弁解する。

「し、信じて下さいエバ様、わしが馬車を受け取った時にや、もうそいつらは割れていたんです、本当です！」

たつぷりのツーク貨幣の詰まった麻袋を覆い隠すように、黒い瓶の破片が散乱し、ぎらぎらと輝いていた。馬車の底板には、あのマハンドの戦斧が突き立てられ、くわえて、ガストンの眼鏡が、その横にさりげなく置かれてあった。

「・・・あなたに馬車を託したその神官様は、何かおっしゃっておりましたか？」

努めて冷静な振りを装いながら、エバは男に微笑みかける。男は幾分ホツとしてうなずいた。

「はい、確か・・・こうです。悪魔の草は滅びました、邪な企みもまた滅ぶでしょう・・・」

エバの瞳が鋭くなった。

エバは執事に合図し、足早に屋敷内へと戻る。執事は男に何枚かの金を渡し、追いつ返す。エバは階段を上がりながら、拳を握り締め

「・・・あれほど気をつけなさいと言ったのに・・・役に立たない女ね・・・！」

怒りに震える声を、柱時計の鐘の音に紛らわせて、エバはある扉を大きく開け放った。そこには、戦斧を磨く最後のグラップ人、バイドルがいる。

「これはエバ様、いかがなされました。」

エバは後ろ手に扉を閉め、バイドルを睨む。

「ガストンとマハンダが、殺されましたわ。」

「！」

「あなたたちを支える大事なもの……失われてしまったようです。彼等はすでにスリスに入っている様子……バイドル……最早、あなただけが頼りです。」

エバはバイドルのもとへ歩み寄り、その大きな手を取った。

「チャンスという邪魔者たちを、あなたの手で葬り去って下さい。いいえ……そうしなければならぬ、あなたは。」

「……」

「あれがなければ、あなたは惨めに狂い死ぬのです……誇り高いグラップ人が、そのようにして死ぬのは屈辱でしょう？」

バイドルは、そつとエバの手から自分を放して背を向けた。

「……おつしやりたい事は重々承知いたしました。邪魔者たちの始末は、私にお任せ下さい。ところで……」

振り返るバイドルは、どこか哀しげにしてつぶやく。

「酒は、まだあるのですか。」

エバはにこりと微笑んだ。

「ええ……いつもの酒場の地下室に、腐るほど積んであります。」
「では、酒場の主にこの事を知られぬようにお気をつけ下さい。立場を利用して、エバ様を強請^{ゆすり}にかかるかもしれません。そうなる厄介ですから。」

エバはうなずき、ほっとした様子で部屋を出る。

そうして扉を背にしながら、先程の見知らぬ男が言っていた言葉を思い出していた。

『・・・若い神官・・・チャンスたちの仲間に聖職者がいるのね・・・』

エバは足早に自室へと戻り、急いで手紙を書き始めた。そうして書き終わると、手元の呼び鈴を鳴らして小間使いを呼び、それを手渡してこう言った。

「この手紙を、今すぐ教会のエンフィース大司教へ届けて頂戴。急ぎの用事ですから、頼みましたよ。」

「かしこまりました。」

若い小間使いが部屋を出るのを見届け、エバはにやりと口の端を歪める。

『このスリスの街が、他の街と同じだと思ったら大間違いよ。異国の冒険者風情が大手を振って歩けるような所じゃないわ・・・それをわたくしが教えてあげてよ。』

エバの部屋には、真珠色の輝きを放つ、美しい美術品が並べられている。在りし日の父が、最も愛したそれらを見つめるエバは、アンビー力で過ごした、最も幸せだった頃の自分を思い出していた。

「・・・誰がわたくしをこうしたのかしら。エーネツカなの、それともこのスリスの街？」

自嘲気味に微笑み、エバはうつむく。

「それとも・・・お父さん、あなたなのかしら。」

・・・

デュファ大陸で最も大きくて賑やかな港街スリス。独特の白煉瓦作りの家々が、街並みの美しさを際立たせ、その庭先に鈴なりになる真っ赤な果物たちは、その風情をまるで絵画のように見せる。よい風に恵まれた平原では、肉質のよい家畜がのんびりと草を食み、そこから臨む大海から採れる、豊富な海産物がスリスの街を大いに潤している。街外れの丘には、豊穡の女神エーラが滞在していたという大神殿跡があり、スリスの街は豊穡の女神のお気に入り場所であつたとされている。女神を崇める熱心な信徒たちによって建造された、由緒ある教会が街のそこかしこに見られ、礼拝の日には街人の豊かな祈りに満たされる。

「・・・だつてさ。」

ブーベルデルでもらった観光案内の地図を、チャンスは無造作に丸めてしまいこむ。スリスの小さな宿屋の一室で、互いの顔を確かめるように眺めるチャンスたち。テーブルに頬杖をついたまま、サージは呆れたようにつぶやく。

「・・・しかし、ここは嫌な街だな。どいつもこいつも、まるで泥棒猫か腹黒狐つて顔してやがる。ここに来るまでに、何人のスリ野郎をぶっ飛ばしたのか・・・」

「街に入る前に、サージにお金預けておいてよかったわ。あちきたちがつ持ってたなら、たちまち一文無しよね。」

エキシイも相槌を打つ。

スリスの街の入り口から、中心街に程近いこの宿屋に入るまでの間、夕闇の雑多な人込みに紛れ、抜け目ないスリの連中がチャンスたちの懷を執拗に狙った。見慣れぬ旅の者たちを狙う手口は、この街や村でもさほど変わらない。

皆の持つ貴重品や所持金を、最も敏捷なサージに預けたのは、アンビーカのギルド員の助言があつたせいだったが、それはまさしく正解であつた。誰彼となく、何度となく現れるスリたちの手際はまったく見事なもので、チャンスですら、懷に一瞬忍び入る指先に気付かなかつたほどだ。その点サージは、盗賊として暗躍する以前、スリの手腕を磨いていた前歴がある。鋭い感覚と敏捷性に特に優れたサージにとって、自分に近付く危険はもとより、仲間たちに近付こうとする危険でも、察知することができる。

「おっと、今すり盗つた物を返しな。黙って返せば見逃してやるぜ。」

サージは何度この言葉を繰り返したろう。ある者は、自分の技を見破られた悔しさに震えながら逃げ去り、またある者は開き直って喚き散らした。その度にサージの鉄拳が繰り返されたが、街人はそういういざこざに極力関わり合いたがらない様子で、誰が何を言ってくることもなかった。警備隊の者たちも、あくび混じりで一瞥するだけ。

「・・・港街の警備隊が往々にして呑気なのは知ってるけど、あんなに無関心な態度だから、スリの連中がつけあがるのよ、きつと。」

ノーマがひとりつぶやいてうなずいた。

「結局、頼りになるのは金の力だけね。宿屋の親父だって、あちき

たちの所持金を見て目の色を変えたじゃない。この街の情報にはすべて、値札がついてると思った方がいいわ。それにしても・・・」

エキシイはちらりと扉を見て、魔術師の指輪を嵌めた指を、くりと一回転させた。その指先から鋭い光の矢が走り出たかと思うと、扉の鍵穴からすらりと外へ飛び出ていった。

「うぎゃっ!」

扉の向こう側、何者かが倒れ込んだのたうつ音と、続く悲鳴。やがてそれは階段を転げるように駆け降りていく。エキシイはため息をついた。

「今夜は寝ない方が良さそうね。闇討ち志願のごろつきがわんさといるみたい。立ち聞き野郎はこれで五人目よ。」

「・・・きつと何か、この街を荒ませるものがあるんですよ。立派な教会が点在していることですし、私はこの街を最後まで信じたいですね・・・」

マーティは、沈痛な面持ちで肩をすばめた。

旅先での乱暴な出来事には慣れているマーティでも、やはりこういった荒んだ状況を目の当たりにすると、やるせなさに胸が痛むのだった。その平和主義を知っているチャンスたちは、こんな時のマーティに、下手な慰めはしないことにしていた。

「ま、下の酒場で少し飲もうぜ。何かいい話が聞けるかもしれねえしさ。」

沈黙に耐えられないサージが、空笑いで立ち上がる。正面切つてエバの屋敷に乗り込む前に、確かめなければならぬ情報は山ほど

あるのだ。

「おう親父、ラムをくれ。五つな。」

「へ、へい・・・」

下の階に降りたチャンスたちに、おどおどしながら頭を下げる宿屋兼酒場の親父は、耳を布截れで押さえていた。先程、エキシイの光の矢で酷い目を見た盗み聞き野郎は・・・

「・・・まったく、油断のならない街ね。ここの酒なんか、一滴も飲みたくないわ。」

ノーマが親父を睨み付けながら、吐き捨てるようにつぶやく。酒場には結構な数の客がいて、その誰もがチャンスたちを食い入るように見つめている。それがチャンスたちの懷を狙う目なのか、ノーマやエキシイの美しさを嫌らしく觀賞する目なのか、チャンスたちにはもう興味はなかった。

「あの・・・」

親父の運んできたラムをちびちびと啜るチャンスたちに、不意に二人の男が話しかけてきた。目線の先は、マーティだった。

「旅の方とお見受けしますが、その出で立ちはもしか、神官様では・・・」

思いのほか丁寧な口調だ。二人の若い男の首には、豊穡の女神エーラの信者の証し、葡萄の葉をあしらった豎琴を模した首飾りが下がっている。どうやら二人は修道士のようなのだ。

マーティはにっこりと微笑んだ。

「ええ。私はトレフィノ大神の神官です。」

「やはりそうでしたか。突然こんな事をお頼みするのは失礼なのですが、貴方様のお力を、ぜひ我が教会にお貸し下さい。今我が教会は、大変な危機に陥っておりますのです。」

「危機？」

マーティの表情が強張った。その隣でチャンスは、ラムの入ったデカンターをそっと脇へ寄せ、睨むようにその修道士を見ている・・

修道士たちは、さらに口を開いた。

狙われたマーティ

「突然こんな事をお頼みするのは失礼なのですが、貴方様のお力を、ぜひ我が教会にお貸し下さい。今我が教会は、大変な危機に陥っております。」

「危機？」

マーティは身を乗り出した。

しかし、チャンスたちはその様子を冷静に見つめている。

「我が教会のエンフィース大司教様が、原因不明の病に倒れられ、様々な薬草を試しましたがまったく効果がなく、このままでは大司教様は天に召されてしまいます。」

「けっ、大司教が天に召されて困るのかい。地獄にでも落ちてもらった方がいいのかい？」

サージがわざとらしく茶々を入れる。

二人の男はサージをちらりと見たが、特に何を言い返すこともなく、話を続ける。

「敬愛する大司教様の説教を聞くために、礼拝に訪れる熱心な信奉者の方もおられるのです。皆大司教様のために祈っております……どうか、貴方様のお力で、大司教様の病を取り払って下さい。お願いです……」

修道士二人は頭を下げた。そう言われて、断れるマーティではない。マーティがゆっくりと腰をあげようというその時、チャンスが

マーティの腕をぐつと掴んで引き止めた。

「ちょっと待て。まだ二、三聞きたいことがあるぞ。あんたらの大事な大司教様の他にも、力ある神官や司祭はいるだろう。そいつらの助力はちゃんと仰いだのかい？」

「は、はい・・・でも病はいつこうに・・・」

「そんな連中が癒せないような病なら、いくらトレフィノ大神の高位神官のマーティだって治せやしねえよ。修道士のあんたらが、それを知らないわけじゃねえだろう。おとなしくあきらめて葬儀の準備でもするんだな。」

修道士たちは顔を見合わせ、もじもじとうつむいてしまう。困った顔のマーティには目もくれず、チャンスはさらに二人を睨んでこう言った。

「・・・それでもマーティを引っ張って行こうってんなら、理由を言ってみろ。誰に命令された？」

「そ、それは・・・」

すると、マーティがチャンスに向けて首を振った。小さく、三回。

「もうやめて下さいチャンス、私は彼等を信じます。どうか行かせて下さい。」

「ちょっとマーティ、正気なの!？」

「・・・マーティ・・・」

チャンスはマーティを睨んだ。耳を掻き、頭を掻いて、ちょっと考え・・・あきらめたようにうなづくチャンス。

「分かった、分かったよ。好きにしてくれ。もう何も言わないよマ

ーティ。」

「チャンス！これは絶対罠よ、そうに決まってるわ！行っちゃだめよマーティ！」

慌ててマーティを引き止めるノーマとエキシィ。しかしマーティは微笑みながら、二人の修道士たちについて、静かに酒場を出ていつてしまった。ノーマとエキシィが、酒場の戸口を呆然として見つめる。だがチャンスとサージは、そんな二人をすぐさまテーブルにつかせ、そつと耳打ちした。

「これからマーティの後を尾行するぞ。準備をしてすぐに外へ出るんだ、いいな。」

「えっ……」

「マーティはわざと、心底奴等を信じた風に見せかけてるのさ。あの首の振り方は、その合図なんだよ。奴だつて分かてるのさ、あんな話は全部嘘っぱちだつてことが。」

「何だア……ずるいわ、あちきたちの知らない合図を作ってたなんて！」

「恨み言は後で聞くから、早く支度してこい。マーティを見失っちゃうぜ。」

チャンスとサージが先に酒場の外へ出る。足音が三つ、裏通りの方向へ去っていくのを捕らえたサージは、一足先に、マーティたちの後を追つていった。ほどなく外へ飛び出てきたノーマとエキシィを引き連れ、静かに尾行を始めるチャンス。遠目に見えるマーティの後ろ姿と、その後をぴつたりと付けていくサージ。そのサージの背中を見逃さぬように、ノーマとエキシィも必死だ。

「おっと、さつそく出やがった！」

突然、サージの行く手に数人の男たちが立ちふさがった。駆け出そうとしたチャンスたちの背後にも、同じような男たちが列をなして並んでいる。いばだらけの顔を歪ませる男のひとり、ノーマとエキシイを舐めるように見つめながらぼそりと言った。

「いい女二人も連れて、しけこむ先でも探してるのかい、色男。俺たちがいい場所へ案内してやるぜ。」

「・・・墓場って場所なら遠慮しとくよ。」

チャンスがにやりと笑う。その微笑みの端から、白い刃の軌跡がすらりと走った。あまりにも素早い長剣の動きの前に、瞬く間に二人の男が切り裂かれて絶命する。

「エキシイ、先に行ってサージを援護してやってくれ。」

「はい。」

場慣れしているエキシイは、その血まみれの場面に眉をしかめもせず、明るくそう言って駆けていった。

「あいにくと、長い前振りは好まないんでな。手っ取り早く片付けさせてもらうぜ。」

チャンスはふつと体を沈めた。最初のチャンスの一撃に怯んだままの男たちに、その姿はまさしく悪魔のように映ったことだろう。的確な技、機敏な動き。自分達が手を出すべき男ではなかったと後悔する暇もなく、男たちは無残に骸と化していった。しかし一人だけ、チャンスではなくノーマに忍んでいた男がいた。腕を組んで黙って見守るノーマをはがいじめにしようと襲いかかる。ノーマはすかさず、腰に下げた何本もの短剣のうち、反り身の短剣を二本引き抜き、振り向きざまに男へとそれを突き立てる。男の振り上げて

いた短剣など、ノーマの目には止まっているも同然。やすやすとかわされた男は、前屈みになったへっぴり腰の姿勢のまま、ノーマの短剣に深々と急所を抉られて即死する。

「あんたなんか片付けるのに、精霊の力なんて、もったいなくて使えないわ。」

やがて、動く者がチャンスとノーマだけとなると、サージたちの側も決着がついたようだった。急いで駆け付けたチャンスたちの前、手酷い火傷を負った男が、エキシイに踏み付けにされながら、涙をこぼして必死に命乞いをしていた。エキシイは、その場にあふれる死体の中、神妙な顔で二人を迎えた。

「サージは先にマーティを追ってったわ。それと・・・何だか話が妙なよ。ほら、もう一度、あんたたちにこの仕事を頼んだ奴が誰か言うのよ!」

エキシイは乱暴に男の背を蹴り付けた。

「ひいつ、言う、言うよお! きょ・・・教会から頼まれたんだ、スリス教会から・・・嘘じゃねえよお!!」

「教会・・・」

「もういいわ、とつとどこかへ消えるのね。あちきたちの前にもう一度現れてごらん、今度は全身じわじわ丸焼きにしてやるよ!」

エキシイが最後に、男の尻を勢いよく蹴り飛ばす。男は悲鳴をあげ、何度も転げながら、全速力で逃げ去っていった。

「この街で、あちきたちの存在を知ってるのはエバだけよ。ふん、やってくれるわ。」

「エバは裏の実力者でもあるんだな。俺たちならともかく、神官のマーティなら御しやすいとふんだんだろう……」

「心配だわ、急ぎましようチャンス！」

三人はスリス教会へと走った。

家々の灯りはすでに大部分が消え、うつすらと浮かぶ街の路地はまるで、出来の悪い地下迷宮さながらだ。そうするうちに、闇に聳える大きな教会が見えてくる。その外堀の一角に、サージが身を潜めているのを見つけたチャンスが駆け寄ると、サージは振り返らずにつぶやいた。

「奴等、裏門から入ってったぜ。人目につきたくないみてえによ。どうするチャンス、乗り込んでみるか？」

「もちろんだ。聖職者相手だと、マーティの勘も鈍るだろう、何が起こるか分からねえ……ノーマ、頼むぜ。」

「任せて。」

サージが懷から鉤爪のついたフックを取り出す。次いで、腰に巻いていた布を解き、その下に巻いてあるロープを、するすると解いてフックにくくり付け、ノーマへと渡す。ノーマは背中中の翼を開き、一気に背丈の倍もある外堀の上へ舞い上がった。

「いいわ、上がってきて。」

壁にしっかりと食い込ませた鉤爪のロープを、エキシィ、サージ、チャンスの順によじ登ると、大きな菜園が眼下に広がっていた。

「一応、腐っても教会だな。自給自足の原則は守ってるみてえじゃねえか。」

「でも……何か変よ、ねえ、降りてみましょ。」

エキシイに促され、ゆつくりと壁をつたい降りていくと、菜園に
など立つはずのない、見張りの修道士数人がチャンスたちを見つけ、
飛び掛かってきた。

「ちつ、何でこんなところに・・・！」

いちばん最初に降りたサージが短剣で応戦しようとする、その
修道士たちは、修道士風情が持つはずのない、小剣を振りかざして
襲いかかってきた。ギョツとするサージ。エキシイはすかさず魔術
師の指輪を構えて叫んだ。

「速きを遅く、緩やかなる時をかの者たちへ与えよ！」

突然、修道士たちの動きが緩慢になる。しかも彼等自身は、それ
にまったく気付いていない。サージは突然の彼等の猛攻に驚いたが、
エキシイの呪文が効いたのを見ると、短剣で次々と彼等を倒してい
った。どさりと倒れ伏す様も、また緩やかだった。サージが毒づく。

「ここは本当に教会かよ！まるでどっかの金持ちの屋敷の見張りみ
てえだぜ。」

「・・・案外正しいかもよ。見て・・・」

エキシイが、菜園の一部を指差した。よく見るとそれは菜園では
なく、膝丈ほどの見慣れぬ草が整然と植わっているだけのものだっ
た。ノーマが顔を歪めてつぶやいた。

「・・・これ・・・傀儡草よ、全部。寒いところでしか育たないは
ずなのに・・・！」

・・・

一方、教会の中へと招き入れられたマーティは、二人の修道士によつて、小さな部屋へ案内された。

「ただいま、我がスリス教会の司教様をお呼びしてまいりますので、しばしこちらでお待ち下さい。」

「ええ・・・」

ぱたん。扉が閉まる。

そしてついでに、小さな錠が掛かる音も聞こえた。

マーティは別段慌てる様子もなく、部屋をぐるりと見回した。木のテーブルと椅子、そして小さな額縁に収まった絵画。部屋に釣り合った小さな窓には、格子が嵌まっている。マーティは立ち上がり、壁にかかった絵画を手を取った。

「仕方がないですね・・・」

聖域の汚濁

傀儡草の畑を前に立ち尽くしていたチャンスたちは、気を取り直して、教会の周辺を忍び足で探り始めた。所々に見え隠れする石造りの十字架が、不意に人影に思えてくるのは、教会という場所のせいかもしれない。

傀儡草の畑で倒した見張り番の修道士たちの死骸は、目立たぬように隠してはきたが、見つかるのは時間の問題だ。それまでに教会内に侵入して身を潜めねばならない。

「おい、こっちこっち、勝手口だ。」

サージが手招きする。勝手口の小さな覗き窓からは、人影は見えない。閑散とした長い廊下に、蠟燭の火が揺らめいている。

「よし……」

ちらりと鍵穴を覗くサージ。そしていつものように、小さな針金を鍵穴へ差し込むが、サージはすぐに手を引っ込めてしまった。

「開いてるぜ……入ってみるか。」

恐る恐る取手を回す。が、特に変化はない。静かに教会の中へ滑り込んだ四人は、突然迫ってくる足音を聞いた。慌てて手近の部屋の扉を開け、中へと隠れた四人に、修道士たちの小さな声が聞こえてきた。どうやらチャンスたちが隠れた反対側の部屋は、台所になっているらしい。

「……何もわざわざ司教様自らが、会わなくてもよさそうなもの

だが・・・」

「司教様はお戯れがお好きなのさ。特に、あの男のような美しいアルル人をいたぶるのを好まれるんだ。格好の玩具が手に入ったものだから、じつとしていられないんだよ。」

暗闇の中で息を殺しながら、チャンスたちは血の気が引いた。アルル人の男・・・他ならぬマーティのことではないか。

「いつもの薬を使えば早いんだが、司教様はそうはしないだろうな。まずは痛み付けて楽しむだろうよ。」

「必要なことを聞き出せば、後は用無しか。大司教様はこれでまた、たっぷり寄付金をいただけるわけだな・・・」

ふと、サージが部屋の扉を開けた。

驚くチャンスたちには目もくれず、サージは突然、向かいの台所の扉を蹴り開けて、中へと躍り込んでいった。

「だつ、誰だ！ぎゃつ・・・！」

小さな悲鳴の後に、チャンスたちが台所へ駆け付けると、一人の修道士が首を裂かれて事切れており、もう一人の修道士はサージに短剣を突き付けられて詰問されていた。

「この野郎、マーティはどこだ、どこに閉じ込めてある！俺は今ひどく頭にきてるんだ、さっさと吐かねえと体中の骨をへし折っちまうぞ！！」

そう言うのが早いか、サージは男の口に布截れを挟じ込み、押さえ付けた左腕をぐいと乱暴にねじった。鈍い音が台所に響き、修道士は絶叫する。だが悲鳴は、押し込められた布截れに邪魔され、さほ

ど響いていかない。サージがさらに右腕に手をかけようとすると、修道士が悶絶しながら唸り声を上げる。布截れを取ってやると、修道士は血走った目を見開いて喋り始めた。

「あ、あの男は・・・礼拝堂の奥の小部屋にいる、懺悔室の向かいだ、本当だ・・・！」

「それと、たつぷりの寄付金をくれるってのは、エバ＝ヘルマンだな！？」

修道士は必死にうなずいた。

「神に仕える教会のくせに、世俗にどっぷり浸かりやがって。おまえらのやってる悪事を白状してみろ、もちろん、傀儡草の話もな！」

怒りに燃えるサージが、修道士の右腕を限界まで捻り上げた。修道士は泡を吹き出しながら、懸命に口を動かして喋り続けた・・・

・・・

「ようこそ、スリス教会へ・・・」

「・・・マーティと申します。」

小部屋の戸口に、でっぷりと肥えた司教が、数人の修道士を引き連れて立っている。てらてらと光る額の汗を拭いながら、マーティをゆっくりと眺め回す司教。

「さるお方のご指示で、きみをここへ招待させてもらったのだよ。旅の神官というから、ただの薄汚れた乞食神官かと思ったが・・・なかなかどうして、美しい。」

「・・・ご病気の大司教様は、どうやらお元気のご様子ですね。本当のご用事は何でしょうか。」

マーティが無表情でつぶやくと、小剣を携えた修道士数人が、ずいっと前に歩み出た。マーティはそれらを睨み付けたが、すぐに目を伏せ、黙って自分の槍を差し出した。

「ほっほっ、よい心掛けた。力づくというのは好まんのでな。まあ、お掛けなさい。」

司教に勧められるまま、マーティは椅子に腰を下ろす。

「きみの話を聞きたいだけだよ、マーティ。きみたちの仲間がどこに潜伏しているか、きみたちの依頼人がどこにいるか。きみたちは依頼人にどこまで頼まれたのか。もちろん、話してくれるね。」

「・・・」

マーティは答えない。

両脇に立った修道士が、突然マーティの腕をつかんだ。司教はにやりと笑い、懐から小さな革鞭を取り出して、マーティの肩口へ、勢いよく振り落とした。

「！」

鋭い空気を裂く音と同時に、肩口に激痛が走る。だがマーティは、無表情を装い、司教を睨んだ。

「・・・先程、力づくは好まないとおっしゃっていたのでは？」

再び鞭が飛ぶ。胸に叩き付けられ、息が止まるマーティ。
司教は嫌味に微笑んだ。

「他人のする力づくは好まんがね、自分がするのは別だよ。さあ、強情を張ると、その美しい体中が腫れ上がることになるよ。」

「・・・」

マーティは、答えない。

司教の目を睨んだまま、口をぐつと噤むマーティ。司教はますます嫌らしく笑うと、喜々として鞭を振り上げた。

・・・

台所に二つの死骸を残し、チャンスたちは広い教会の中を必死に歩いていた。蠟燭をひとつひとつ吹き消して影を消し、足音を潜めて歩く。修道士から聞いた、スリス教会の裏の全貌を思い出すたびに、背筋が冷たくなる思いだった。

「解毒薬になる薬草を栽培する教会には、それに対応する毒草の知識もある。エーネツカヘルマン様と、当時まだ司教であったエンフィース様とは昔馴染で仲がよく、いつしかエーネツカ様の頼みで、教会の敷地内に傀儡草を栽培するようになったんだ。」

「どうしてこんな暖かい場所で、寒い土地の傀儡草が育つの？」

「・・・確かに傀儡草は寒冷地に適応しているが、栽培のいちばんの要素は、土壌なんだ。強い酸性の、痩せ衰えた土さえあれば、暖かくても何とか栽培できると・・・隣町マーシュベイの薬屋、ガストン様からご指導があった。菜園をすべて傀儡草の畑にしたのは、ヘルマン様から多額の寄付金を貰えるせいだ・・・」

「他には？」

「・・・ヘルマン様の邪魔をした連中は、用心棒たちの手で殺された後、死骸をすべて教会が処理しているんだ。処理の方法までは、知らない。我々がその手の輩に手を下す時もある・・・我々はそのために、小剣の訓練を受けているようなものだ。」

サージがぎりりと唇を噛み、おもむろに振り上げた短剣を、修道士の後ろ首に力任せに叩き付ける。がぶつと血を吐き、修道士は絶命した。息を荒げ、唾を吐くサージ。

「てめえらの腐った血のついた短剣なんざ、いらねえやつ！行こうぜチャンス、早くマーティを探そう！」

「礼拝堂の奥だったな・・・行こう。」

広い教会の廊下は縦横無尽につながっていて、勝手口から入ったせいか、礼拝堂はなかなか見つからない。大きな両開きの扉を見つけたのは、台所を出てからしばらくのことだった。小走りに礼拝堂をすり抜けていくと、奥に面した小部屋から、高笑いが響いてくるのが聞こえた。急いで駆け付けると、鋭い鞭の音が絶え間なく聞こえる中、野卑な叫び声がこだました。

「ひははは、さあ、不様に喚いて見せろ！その顔を歪ませて泣き叫べ！ははは・・・！」

頭に血が上ったサージが扉へ飛び付くのを、チャンスが必死に抑えた・・・マーティが、何かつぶやいているのが聞こえたのだ。

「・・・司教様ともあろう方が、このような残酷な仕打ちをなさるなど、私は・・・信じたくありません・・・！」

「おやおや、嬉しいことを言ってくれるねマーティ。きみのような

心底信心深い者をいたぶるのも、実にいいものだねえ。」

「残念ですが……ここで、このまま……慰み物になるわけには
いけないのです……我が父トレフィノ大神よ、罪深き御子らを許
したまえ……」

扉の向こうから、マーティの悲しげなつぶやきが聞こえる。

ノーマとエキシィも泣き顔になっていた。

「早く助けようよチャンス、マーティが……！」

「待て、感じるぞ……おい、耳を塞げ！」

「？」

とつさに耳を塞いだ四人。

次の瞬間小部屋から、凄まじい勢いで鋭い音が鳴り響いた。目を
閉じ、印を結んだマーティの片手が、あの小さな絵画を指している。
凄まじい大音響の中、その絵画が壁からぱたりと落ちると、その裏
の壁に、トレフィノ大神の印が刻まれてあった。

「みつ、耳が……ぐあああつ……！」

耳を塞ぐチャンスたちですら、その音の凄まじさに頭が割れそう
になっていた。ましてや、耳を塞ぐ間もなかった司教たちは、耳や
頭を押さえて、気が狂ったようにのたうち回る。マーティが印を解
くと、大音響はすぐにぴたりと止んだ。それを見計らって、チャン
スたちが部屋へ躍り込む。

「マ……マーティ……！」

チャンスたちを見たマーティは、弱々しく微笑んだ。

「・・・来てくれたんですね・・・よかった・・・」
「マーティー!!」

ふらりとよるめくマーティを、サージが慌てて支える。マーティは上半身を裸に剥かれ、背中はおろか胸までも、手酷く鞭打たれていた。赤いミミズ腫れが至る所に走り、皮膚が裂けている場所もある。

「しっかりしろマーティー!マーティー!」
「・・・大丈夫・・・ありがとうサージ・・・」

チャンスは怒りに震える手で、喘ぐ司教の胸ぐらをぐいと引っ掴んだ。

「この豚野郎・・・このまま殺しまうのは簡単すぎるぜ!ノーマツ、こいつの耳を癒せ、今すぐにだっ!!」
「え、ええ・・・」

ノーマはマーティにかざそうとしていた手を、司教に向けた。司教はすぐに、ハツとして目の焦点を取り戻す。そして目の前に、怒り心頭のチャンスを見た途端、ひっと小さく悲鳴を漏らした。

「た、助けてくれ、金なら好きなだけやる!聖職者を殺すと、じつ、地獄に落ちるぞ!」

チャンスは床に落ちていた鞭を拾い、それを司教の顔面に激しく叩き付けた。

「ぎゃあっ!」

「てめえの声なんざ聞きたくねえ。エンフィース大司教のところへ案内しろ。」

「ひい……い……」

鼻から口元にかけて、赤い筋を走らせた司教は、痛みと恐怖で失禁していた。チャンスはそれを見ると、苦々しげに司教を睨んだ。

「たった一発食らってそのザマかよ！この鞭をマーティには何発食らわせたんだ！時間があれば、こいつでてめえをなぶり殺しにしてやりてえくらいだ！さっさと案内しろ！！」

聖域の汚濁 地下道の怪物

「エンフィース大司教のところへ案内しろ！」

司教の首に縄をかけ、道案内をさせるチャンス。

マーティはノーマによつて癒されたが、消耗した体力を完全に回復するには至らず、時折ふらつくマーティをサージが付きっ切りで支えている。司教は教会の二階へと進んで行き、奥の突き当たりの部屋へたどり着くと、媚びるような目でチャンスを見た。

「こ、ここだ。ここに大司教様がいる。さあもういいだろう、助け
てくれ、頼む・・・！」

「・・・とつとと失せる。」

チャンスは、呆気なく縄を放した。司教は屠殺場から逃げる家畜のように不様に、全速力で逃げて行く。その背後を見つめながら、チャンスはエキシイに合図する。エキシイはチャンスに言われるまでもなく、すでに魔術師の指輪を司教へと向けていた。

「塵芥ですら喰い尽くす者どもよ、かの者をその牙の前に差し出そ
う。」

魔術師の指輪から、黒い光が迸った。それは階段に向かって走る司教を狙い違わず捕らえ、その瞬間、うねる黒き光は醜悪なぬめりを帯びた、無数の牙蟲に姿を変える。

「ひつ、ひあああつ！！！」

「あんだみたいな豚にこそ、似合いの魔法よ。他人に与えた苦痛を、

自分自身がたつぷりと味わってみるのね。」

牙蟲たちは司教の皮膚を食い破り、肉を引き裂く。鋭い牙を持つ牙蟲に全身を見る間に蝕まれていく司教の悲鳴は、すでに悲鳴にはならなかった。喉を食い破られ、臓物が廊下へ散らかり、司教は数分のちにどさりと倒れ込む。牙蟲たちにかかれば、血はおろか骨すらも、綺麗に片付けられることだろう。

凄惨なその様に背を向けたチャンスは、突き当たりの部屋の扉を開け放とうとして思いとどまり、一瞬息を飲んだ。

「・・・開いてる。」

「え？」

よく見ると、扉はきちんと閉まっていな。わずかだが開いている・・・サージは部屋に駆け寄って、聞き耳を立ててみた。

「・・・気配はないぜ、入ってみるか・・・」

サージがそつと扉を押し開く。蠟燭の明るい光がまんべんなく満ちている部屋の中央、ゆつたりとした大きな椅子に腰掛けた、男のうなだれた後ろ姿に目がいく。チャンスたちはゆっくりと部屋に踏み込み、その椅子へと向かう。

「・・・！」

椅子の足元にたまった、大量の血。

正面を覗き込むと、大司教の哀れな姿が蠟燭に浮かんでいた。胸元に受けた痛恨の一撃でほぼ即死状態だったのだろう。口元に張り付いた笑みが、犯人と顔見知りであったことを物語る。

「ねえ、この傷・・・剣じゃないわ、戦斧よ！」

「・・・最後のグランプ人か。バイドルの仕業だな。知り過ぎた奴はこれでいなくなっただってわけか・・・」

と、突然廊下から、別の扉が開く音がした。

ハッとして振り返るチャンスたち。

その音が何であつたか確かめようとする間もなく、音の主が呼ばわつてきた。

「お目当ての大司教様は、一足先に天国へ送らせていただいたよ、チャンス・・・」

「・・・バイドル！？」

大司教の部屋の扉を引き開けると、廊下の中央に仁王立ちとなつて、色黒の巨大な男がたたずんでいた。手にした大きな戦斧には、大司教のものであろう血糊が厚くこびりついている。

「おまえがチャンスか・・・ようこそスリスの街へ。歓迎しよう。」

「なぜ大司教を殺した。もう用済みなのか？」

「・・・エバ様の邪魔になるものは排除する。それが俺の運命だ。だからおまえたちのことも、俺は排除せねばならん。」

「・・・ブーベルデルで、今もおまえたちを信じて待っているナプの気持ちは、もうどうでもいいのか？」

「・・・」

バイドルは口を噤んだ。

返事の代わりに、手にした戦斧を勢いよく廊下へと叩き付ける。

ふと、チャンスたちの足元が浮いた。

「うわっ・・・!!」

「きゃああっ!!」

大司教の部屋から三つ目までの床板が、はめ込み模様に沿ってがばりと開いた。扉の前に立っていたチャンスたちは残らず、口を開いた暗黒の穴へと落下していった。

バイドルは床に叩き付けた戦斧を引き抜くと、穴に向かってつぶやいた。

「・・・教会は、汚いすべてを覆い隠せる絶好の場所だ。死骸ですらも、秘密裏に処理できる・・・だが、おまえたちのような活きのいい奴を始末するには、こうした仕掛けも必要なのさ。最後の質問には、おまえらがそこから生きて出られたら教えてやろう。」

口を開いたままの、壊れた罨に背を向け、バイドルは静かに去って行った。

・・・

「あいたっ!」

「誰だよ、俺の上に乗っかってる奴は!」

相当の高さから落下したチャンスたちは、暗闇の中で右往左往する。運よくと言っていいのか、それともわざとそうしてあるのか、罨の真下には大量の干し草が積み上げてあり、落下による怪我はせずすんだ。

「・・・ねえ、獣の匂いがしない？」

エキシイが鼻を鳴らす間に、ノーマが精霊の力を借りて灯りを点す。地下なせいか、灯りはほの暗く、チャンスたちの周囲をわずかに照らす程度だった。ノーマが顔を歪める。

「精霊の力が弱いわ、怯えてるみたい・・・そんなに強い何かが、ここにいるのかしら。」

「脅かさないでよノーマ・・・」

「随分落っこちたもんだぜ・・・俺のロープもこの高さじゃ足りないし・・・」

「・・・先へ進むしかないようだな。気をつけろよ、足元の骸骨になんねえようにな。」

歩き出したチャンスは、からからに乾いた人骨を蹴飛ばした。カビ臭さが入り混じる、独特のすえた匂いの地下道には転々と骨が散らばり、犠牲者の多さを物語っていた。少しずつ、辺りを警戒しながら進むチャンスの後ろで、マーティが槍を構えながらつぶやいた。

「・・・おかしいですね。」

「何がだ？」

「この人骨も、今までのものも・・・なぜかみんな、頭蓋骨だけ見当たらないんです・・・」

よく見ると、その通りだった。

明らかに人と分かる骨の山の中に、頭蓋骨だけがないというのは奇妙な話だ。

「そっついえばそうね・・・脳味噌が好きな怪物でも、いるんじゃない・・・」

」

エキシィは、そう言ったところで言葉を切った。視線に何かがあったのだ。

「何かいる！今何か見えたわ！！」

「静かにエキシィ・・・近付いてくるぞ。」

骨の山をかき分ける、乾いた音。

じりじりと迫ってくる気配に、足音というものがない。

チャンスたちを照らす光に反射して、闇の中に恐ろしげな真紅の四つの目が突然浮かび上がり、ギョツとして立ちすくむエキシィ。

それは次第に距離を縮め、闇に目が慣れたチャンスたちに、その凄まじいまでの姿を惜し気なく披露する。

鋭い鉤爪の生えた足を覆う、黒と茶の斑模様の毛皮。

大きい掌にも、足と同じ鉤爪が光っている。

二本足で立つその姿は、せむしのように背を丸めているが、それでもチャンスの背の倍はあろうか。見たこともない醜悪な頭部は、不揃いな毛皮の間から大小のいぼが見え隠れし、大きな口には嫌になるほど大量の牙が並んでいる。それだけでも十分不快な様相なのに、その醜悪な頭部が二つもついているとなると、不快を通り越して吐き気すらこみあげようというものだ。

「・・・なに・・・に、こいつ・・・!!」

真紅の四つの目が、呻いたノーマをぎろりと睨んだ。

『・・・なにこいつ・・・』

「！」

聞き苦しいながらも、その怪物はノーマの言葉を正確に反復した。どきりとして思わず息を飲むノーマ。チャンスはゆっくりと長剣を怪物に向けた。

「ここでおまえの餌になつてゐる暇はねえんだ。みんな気をつけろ、一気にいくぞ。」

『・・・なきをつけろいつきにいくぞ・・・』

「うるせえ！真似すんなっ！」

チャンスが勢いよく剣を振りかぶった。

怪物は、巨体とは思えぬ素早さでスツと身を引き剣を躲すと、あの鉤爪の生えた腕を大きく振り回した。寸でところで躲したチャンスは髪が数本、はらりと落ちる。その髪の毛が地面につかぬうち、サージの放つナイフダートが怪物目掛けて繰り出される。しかしあるうことが、急所に突き刺さるはずのナイフダートは、斑模様の薄汚い毛皮に阻まれ跳ね返ってしまう。

「ちっ、なんて皮膚してやがる！」

マーティは渾身の一撃を決めようと怪物の隙を伺うが、チャンスと同等かもしくはそれ以上に素早い怪物の隙を見出だす前に、チャンスは形勢が不利になる危険を感じ取る。怪物がチャンスに気を取られている間に大きく一歩踏み込むマーティが、槍の一撃を突き出そうという瞬間、怪物の一方の頭がぐりと振り返ってマーティを睨む。

『てひふしてやがる！』

「！」

突然わめかれて肝を潰すマーティ。

そのわずかな合間目掛け、怪物の鋭い鉤爪がマーティに襲いかかった。

「危ねえっ！！」

サージが横から思い切りマーティを突き飛ばす。鉤爪はマーティの衣服の一部をかすめて空振りし、勢い余った手が乾いた人骨を跳ね飛ばした。ノーマとエキシィはその凄まじい戦いを目の当たりにし、恐らく生まれて始めてであろう恐怖というものを感じていた。呪文を詠唱しようとする唇が震え、うまく言葉にならない。

「せやあああっ！！」

果敢に怪物へと挑むチャンス。二つ頭の怪物は四つの目でチャンスの動きを読み取り、その小さな隙を狙って恐るべき鉤爪を振り下ろす。マーティとサージも必死にそれを援護するが、怪物の巨体に傷をつけるまでは持ち込めないでいた。

「ぐあっ・・・」

「チャンスッ！！」

怪物の鉤爪の先端が、チャンスの脇腹を捕らえた。長剣を振りかぶった瞬間にかすめられたのだ。そしてそのままの勢いで、怪物はチャンス目掛けて二つの大きな口を踊らせた。チャンスに覆いかぶ

さるようにして倒れ込む怪物の巨体・・・すべてが一瞬静まり返った。

ノーマの絶望的な叫びがこだまする。

「いつ・・・いやああ、チャンスーツ!!」

ごとり。

何かが落ちた音。

「・・・チャ・・・!!」

一呼吸おいて、凄まじい量の血が吹き出した。

その血はまるで壊れた噴水のように激しく、床を吐き気がするような深緑色に覆った。雄々しく立ち上がったのは、その血で緑色に染まったチャンスだ。

『やあ・・・ちゃんす・・・』

怪物の聲がした。しかしその声はひとつだけ。

片割れの首は地面に落ちてだらしなく、口をぱくぱくさせていた。

「やあ、化け物。そろそろ終りにしようぜ。」

チャンスの長剣が白い軌跡を残して振り抜かれる。

牙の罾 炎の罾

「やあ、化け物。そろそろ終りにしようぜ。」

チャンスの長剣が白い軌跡を残して振り抜かれる。

もたついた怪物の鉤爪が繰り出される間もなく、その軌跡の後、怪物のもうひとつの首が、ごとりと落ちる。首を失った怪物の体はほんの少しだけ、未練がましく腕や足を動かした後ゆっくりと崩折れ、二度と動くことはなかった。

「チャンス、チャンスッ！！」

ノーマが駆け寄って抱き付いた。エキシイも泣き出していた。

「よかったチャンス・・・やられちゃったかと思ったよオ・・・！」

「俺も、そう思った。でも・・・」

チャンスは、緑色になった顔を拭いながら、腰に下げた小さな巾着を手にとった。

「それ・・・アスターからもらった巾着ね。」

「こいつの獣避けの匂いに、怪物が一瞬怯んでくれたんだ。こいつがなかったら俺は今ごろ首なし死体だぜ・・・」

怪物が事切れると、ノーマの精霊力がもとに戻る。地下道が一層明るく照らし出され、チャンスたちの探索を助けてくれる。周囲には想像以上に多い白骨がひしめいており、すでに干涸びて粉々にな

ったものや、ついさっきまでしゃぶられていたような、まだ肉と血のこびりついたものまで、さまざまだった。そして地下道を進むうち、少し広い窪みに行き当たったチャンスたちは、そこに慄然たる光景を見た。

「・・・そういえば、ずっと前に聞いたことがある。南の未開の奥地に二つ頭の怪物がいて、人の脳味噌を特に好んで食らう・・・つて。」

その窪みは、あの恐るべき怪物の巣であつた。うなるほど大量の頭蓋骨が散乱し、そのどれもが、頭半分を見事なまでに切り裂かれ、まるで鍋のふたのように取り除かれている。食事に邪魔だったらしい衣服や所持品も、引き裂かれて放り捨てられ、骨の間に埋もれていた。

「その怪物は脳味噌を食らうおかげで頭がよく、どんな言葉もオウムのように真似ることができるといふ・・・それを理解するまではいかないが、つてな。」

「チャンス、随分豪勢な遺品ばかりだぜ。きっと商売敵の商人がなんかを餌にしたんだろうが・・・見るよ、この財布のでつけえこと。」

「こつちには宝石が入ってるわ。」

もはや主を失った宝物の行方は、冒険者たちの判断にすべて委ねられる。チャンスたちは酷い目にあった自分たちを労う意味と、これからの反逆に備える意味で、それらの宝物を貰っていくことにした。かき集めただけでも数力月には豪遊できる宝物たちを見つめ、マ―ティが少し哀しげにつぶやいた。

「・・・私はもっと、現実を見つめるべきですね。教会の中にいる

人間がすべて善ではないことを、素直に認めなければ。フィンさんのような悲しみを、他の人に与えないためにも・・・」

「ああ・・・そうだなマーティ。死んだ連中の無念の思いは、確かに俺たちが受け取った。こいつを使って、この街の流儀にとことん付き合ってやるうぜ。」

巢を後に、辺りを探りながら歩いて行くと、突き当たりと思しき場所に出る。上から細い縄梯子が下がっているが、高過ぎる天井の様子はよく分らない。怪物もこの縄梯子を見つけて、よじ登ろうとでもしたのだろう。彼の届く範囲の縄は、ずたずたに切り裂かれていた。どちらにしろあの巨体で、この細い縄梯子を登れるわけではない。

「あれならサージのロープも届きますね。」

「ああ、大丈夫だ。でも・・・全員で体重を掛けた途端に、ぷつん・・・なんてなったら、全部台無しだ。俺が先に登って確かめて・・・」

「あちきが行くわ。」

エキシイが名乗りを上げる。

「あちきがいちばん軽いし、さつき活躍できなかった分、役に立ちたいし。いいでしょチャンス？」

「・・・分かった。気をつけてな、エキシイ。」

エキシイはにつこり微笑むと、ノーマが掛けてくれたロープを登り始めた。途中から問題の縄梯子に手をかける。最初は確かめるように、ゆっくり。少し軋みはするが、大丈夫のようだ。

「とりあえず平気みたい。上の様子を見てくるから、待ってて。」

「頑張つて、エキシィ・・・」

ノーマが心配そうにつぶやく中、エキシィは縄梯子を軋ませながら、上へと登っていった。精霊の照らす灯りの範囲からエキシィが消えると、どことなく不安に陥る四人。黙って待つことの長さで苦痛に、サージがうろろろと落ち着きなくうろつき出す。

やがて遙か上方から、エキシィの声が届いた。

「おい、ちょっと魔法使うから、真下から離れててねーっ！」

言うが早いか、どんつと鈍い音が響いた。

がらがらと何か崩れる音、そしてそれは見る間に落下してくる。

大音響をたてて地面に落ち、砕け散ったそれらは、あの石造りの十字架・・・墓石ではないか。

「死体を投げ込むための穴なんだろう。あいつはここに落ちてくる餌を、巢へ引きずっていったんだ。見ろよ、この血の跡。」

墓石が落下してきた地下の地面は、厚く染み付いた血糊でひどく汚れていた。ここに落とされた人数を考えて、寒気がするノーマ。しばらくして、上から音が聞こえる。ハッとして上を見ると、真新しい十分な長さのロープがどさりと降ってきた。

「急いでみんな！急いで上がってきて！！」

エキシィの切羽詰まった声。鬼気迫るその声に弾かれるように、チャンスたちはロープをよじ登り始める。結構な高さにまで達した時、エキシィの声の意味が初めて理解できた。

「・・・火をかけやがったのか！」

真上に口を開いた穴から、赤い炎が照らす、厚く垂れこめた煙が見えていた。必死によじ登ったチャンスたちがようやく地上へ這い出ると、そばで待っていたエキシイがホッと息をついた。

「よかった、みんな無事ね！」

「エキシイ、おまえ・・・！」

みんなを助けるために、炎の中で必死にロープを探したのだろう。体のところどころ、特に腕に火傷を負っていたエキシイ。チャンスの視線に気付くと、エキシイは愛嬌たつぷりに笑った。

「・・・平気よチャンス、あちきだって、あんたの仲間なんだから。」

マーティはすぐさま、エキシイの傷を癒してくれた。その癒しの間、燃え盛るスリス教会を目の前にして、チャンスは考えていた。

「・・・ノーマ、堀の外をちょっと見てくれ。」

返事も早々に、ノーマが翼を開いて堀へと近付くと、すぐに頭を引っ込めて舞い降りてきた。

「何だか警備兵がいっぱいいるわ、炎を見物にでもきてるみたいよ。」

「やはりな。バイドルめ、やってくれるぜ。」

「・・・どういうこと？」

癒されたエキシイがチャンスを見上げた。

「俺たちがそのまま、教会でおっ死んじまえばそれでよし。仮に生き長らえて教会を出ようとすれば、警備隊に放火現行犯で連行されるって手筈なんだろうぜ。」

「頭いいなア、グラップ人のくせに！」

呆れたサージが天を仰いだ。

しかし、ノーマが思い付いたようにしてチャンスの肩を叩いた。

「今度は私の番よチャンス、多分役に立てると思うわ。とにかく裏口へ行きましょう。」

炎が猛る教会を横目に、塀沿いに駆け抜けるチャンスたち。やがて裏口が見え始めたところで、チャンスたちは立ち止まる。裏口の格子の隙間から、警備兵が持っているらしいランタンの灯りが見えた。

「見てて。」

ノーマは腕輪に手を沿え、ふと目を閉じる。いつもならここで呪文を詠唱するはずなのに、ノーマは無言で、ただ黙ったままだ。そのうちに、辺りに異様な冷気が漂いだした。それらはチャンスたちの周囲を渦巻きだし、やがて目に見えるほどに凝縮されていく。それらは炎に照らされながらも青白く闇に浮き、恐怖に顔を引きつらせた亡霊のように凄まじい形相をしている。ノーマは腕輪に添えた手をそのままに、大きく目を見開いた。

「おっ・・・」

突然、それらは四散した。その呆気ない消失ぶりにぽかんと口を開けるサージだったが、空を見上げた途端に身を縮める。

「すつげえ！」

教会を取り巻いてぐるぐると旋回する青白い亡霊の顔は、それまでチャンスたちの周囲にいたものたちの何倍も大きく、何百倍にも多くなつて空一面を覆っていた。恐ろしげな唸り声がそこかしこから轟き、塀の外からは大の男が放つ野太い悲鳴まで聞こえる。

聖なる教会に凄まじい亡霊が現れただけでも驚きなのに、それらが無数に、しかも吠え猛りながら飛び交うとなると、普通の人間が肝を潰すのは当たり前だ。サージが裏口からそつと外を覗くと、気を失つて倒れている情けない警備兵以外の人影は、まったくと言っていいほど見当たらない。恐れをなして、一目散に逃げ去つたのだらう。

「いいぞノーマ、みんな逃げやがつた！俺たちも逃げようぜ！」

ノーマは腕輪から手を放す。すると静かに亡霊の光が薄くなり、やがて消えていった。

「精霊力を頼つて集まる、さ迷える魂を集めたの。あれは全部、この教会で・・・殺された人たちの魂よ。」

チャンスは少しだけ、燃え上がり崩れ落ちていく教会へ振り返つた。

あの炎の勢いでは、傀儡草の畑も無事ではすむまい。エバにとつて、バータ・ラカッティと同等の商売道具なはずの傀儡草までも燃やしてしまうと知っていながら、バイドルは教会へ火をかけたのだろうか。

「・・・」

恐るべき悪夢のような一夜を生き抜いたチャンスたちは、何事もなかったかのように淡々と、静かに闇の中へと消えていった。

・・・

そしてスリスの街が朝日に照らされ始めた頃、暗闇を背負う屋敷から、悲痛な声が響く。

「何てことなの・・・教会が全焼したなんて！」

膝まづくバイドルを前に、絶望的な口調でエバが頭を抱えた。

「せっかく育ててきた傀儡草まで燃えてしまった・・・ことごとくわたくしに逆らうつもりね、あの冒険者たちは・・・！」

バイドルは不様に取り乱すエバを見上げ、静かに口を開く。

「・・・なぜ、奴等は教会へ行つたのでしょうか。」

ハツとしてエバがバイドルに振り返る。

バイドルはその視線を捕らえ、睨んだ。

「エバ様、大司教様に何ごとか命ぜられましたね。教会側が動かなければ、奴等がそこへ出向くことはありません。」

「・・・それは・・・」

「私にすべてお任せ下さるとおっしゃられたはず・・・」

エバはバイドルを睨み返した。しかしその瞳に、かつての鋭さはない。バータ・ラカッティと傀儡草、二つの大きな支えを無くした

ことで、エバはひどく動揺していた。

「お黙りなさい！あなたはわたくしの奴隷よ、主人のすることに口出しする権利はないわ！もういい、下がちなさい！」

バイドルは、すつと一礼し、すぐさま扉を出て行こうとする。その大きな背中に、エバは再び叫ぶ。

「いいことバイドル、あいつらを必ず仕留めるのよ、どんな手を使つてでも！」

「・・・」

「返事をなさい！！」

バイドルは振り返った。

必死の形相のエバの背後で、艶やかな真珠色の陶器の乙女像が微笑みかけてくる。バイドルはもう一度エバに会釈をし、黙って扉を閉めた。

潮風のスリス亭

スリスの街最大にして最高の権威を持つスリス教会が全焼し、エンフィース大司教をはじめ、多数の司教や修道士が焼死した。不審な人物による放火が原因だとする警備隊の発表を、ほとんどの街人たちは信用しなかった。その夜、燃え盛る教会を取り巻く、亡霊めいた悲痛な顔を見た者があまりにも多かったのだ。スリスの街に潜む邪悪な影が、神の名を尊ぶ教会にまで及んでいたということは、誰にでも容易に想像できることだった。

「いくら神の御下に召されるにしたって、黒焦げで苦しみながらつてのは、いただけませんねえ。憎まれっ子なんとか、とか言うけど、そうは問屋がなんとか、つてとこですな。」

「・・・」

ゆっくり、だが素っ気なく相槌を打つバイドルの目の前、黒々とした立派な髭を生やした男が、そう言つて笑った。

「どうぞバイドルさん、今月分です。」

男はにやにやしながらバイドルへ会釈をし、そつと大きなバスケットを差し出した。雑な編み方のバスケットの中、美しい緑色の瓶が並んでいる。バイドルは懷から、ずしりと重い袋を取り出し、男に投げてやった。男はそれを受け止めると、そのにやついた笑みをさらに歪め、ひひひ、と笑った。

「ところでバイドルさん、マーシュベイのガストンから、まだ原液が届かないんですがね、何かあったんですかい？いつもはマハンドさんが、毎月きっちり収めてくれてたんですがねえ・・・」

バイドルは、じろりと男を睨む。卑屈な笑みの裏側で悪態をつきながらも、男が頭を掻いて謝ろうとすると、バイドルはぼつりと言った。

「マハンダは殺された。」

「・・・えっ!？」

「ガストンは、その騒ぎに怖じ気付いて、姿をくらましちまったのさ。俺が必ず見つけてくるから、気長に待ってるといい。」

「あ、あのマハンダさんを・・・いったいどんな怪物にやられちまったんですかい!？」

無敵のグラップ人が殺されたなんて、信じられませんか・・・と、男は早口でつけくわえた。バイドルは酒場のカウンターから離れながら、男をじつと見据える。

「・・・流浪の冒険者たちだ。オーネウスも奴等に殺されている。」

「おつ、オーネウスさんも!？・・・じゃあひょっとして、次は俺を狙いにくるんじゃない。」

「・・・安心しろ、オール。おまえはただ知らん振りをしてりゃいい。なまじ余計な真似をすると、マハンダの二の舞いになる。いいな。」

「へ、へい・・・」

スリスの中央通りから、港側に入る路地の途中。酒場「潮風のスリス亭」の主人オールは、バイドルの後ろ姿が角を曲がるのを見届けて、すぐさま厨房に戻った。その奥に地下へ続く階段があり、様々な酒と保存食が、静かな闇の中で眠っている。その地下室のさらに奥、美しい緑色の瓶が、隅の木箱の中からオールを見つめている。

「ガストンのふぬけ野郎め、怖じ気付いただと・・・冗談じゃねえ。こいつがありやどんな贅沢だつてさせてもらえるんだ。」

取り出した瓶を撫でて、オールはにやりと笑みを浮かべた。

「この広いスリス中から、この天国の酒を見つけ出せるもんかい。俺が、そうさせやしねえ。見てろよ・・・！」

・・・

その晩、いつものようにやってきた、騒々しい夜。船乗りや旅人がごった返す酒場のカウンターで、忙しく酒を注いでいるオールの耳に、ある話し声が飛び込んできた。

「マーシュベイの薬屋が、殺されたんだぜ。」

「！」

ぎょっとして、思わず手が止まるオール。

カウンターに近いテーブルに座る、二人の客が話し込んでいる。

「屋敷中皆殺しつてんだから、酷いもんだ。相当金をため込んでたらしいが、殺されちまっちゃなんにもならねえ。金持ちも考え物だなア。」

オールは息を飲み、思わずそのテーブルに駆け寄った。手にしていたエールのデカンターを二人に差し出し、きょとんとした顔の二人に、愛想笑いをするオール。

「話し中にすまねえな。マーシュベイの薬屋は俺の幼馴染みなんだ、

その話をもう少し詳しく聞かせてくれねえかな？」

目の前に差し出された極上エールを、酔っ払いが断るはずもない。二人の男は快くうなずき、オールの聞くことすべてに、調子よく答えてやった。

「物盗りかどうか、屋敷が丸焼けになっちまったから、皆目検討つかねえらしいや。街外れではその後、グループ人の女が殺されてたっていうし・・・」

そこでオールは、二人に礼を行って厨房へ戻った。

脳裏には昼間のバイドルの言葉が渦巻き、不信感が一気に高まっていく。

『ガストンの奴も殺されていたのか！あんな酔っ払いが知ってることを、バイドルが知らねえはずがねえ、よくも俺を騙しやがったな・・・！』

そのオールの様子を、二人の男は静かに見つめていた。そしてやがて金を払い、そつと酒場を後にする。男たちは口を拭いながら歩いて、やがて中央通りの大きな噴水へとやってきた。そこには、美しい女が待っていた。

「行ってきたぜ、エキシィちゃん。」

そこに待っていたのは、エキシィだった。

「言われた通りのことを話したら、食いついてきたぜ。極上のエールまでご馳走してくれやがった。」

「そう。ありがとう、お礼よ。」

エキシイはそう言うと、巾着袋を二人へ投げた。ずしりと重いそれを受け取ると、二人は喜んで懷へしまいこんだ。だがエキシイが立ち去ろうとすると、二人は慌てて駆け寄り、その肩を抱いて引き止める。

「気前がいいついでに、どうだい、今晚俺たちに付き合ってくれないか。」

「何なら、お礼はその体でもらってもいいんだしさ・・・な。」

くびれた腰を抱き寄せるもう一方の男。エキシイはにこりと微笑んだ。その笑みに思わずつられて笑う二人の男の肩を、何者かがい切り強くつかんだ。

「ぎゃっ！」

「い、いててて！」

その隙にするりと離れたエキシイが、声を上げて笑う。

「あはは、あちきを相手に助平根性丸出しにするなんて、いい度胸だね！でもさっさと金だけもらって帰ったほうが身のためよ。ねえチャンス？」

二人の肩を鷲掴みにしていたのは、チャンスだった。たくましい腕にぎりりと力がこもると、男たちはさらに悲鳴を上げた。

「そういうわけだ、報酬を受け取ったらとつと帰んな。それともこのまま肩を砕かれて、金をその治療費にでもするかい？」

チャンスが笑って手を離すと、男たちは転がるようにして一目散

に逃げ去っていった。

「さて・・・ようやく目星がついたな。潮風のスリス亭、だっけか。」

「俺たちが何日もかけて動くより、人を雇った方が早いつてか。さすがいい読みしてるぜ、ノーマ。」

サージが褒めると、ノーマはウインクを返した。

「スリスは広い街だもの、酒場なんか数え切れないほどあるはずよ。そこを知り尽くしてる酔っ払いの知恵に頼った方が、ずっと賢いと思ったのよ。」

チャンスたちは、スリスの街をいくつかの区画に分け、その中にひしめく酒場一軒ずつに、通りすがりの男に金を渡して送り込んでいたのだ。

「ガストンが死んで屋敷が焼けたとなれば、手元に残った悪魔の酒は金を生む宝の山に変わる。このスリスで生き抜いてきた人間だ、まずはエバに、法外な値段での取引を持ち掛けるに違いない。」

「強請ばかりで生きてるような連中ばかりだからな。」

サージがうなずきながらつぶやく。

「潮風のスリス亭へ乗り込みますか？」

マーティの問い掛けに、チャンスはしばらく考え、やがてこう言った。

「いや。その前に、どうしても知りたいことがあるんだ。」

「知りたいこと？」

・・・

暗闇に包まれた、エイブル通り。

かつてそこには、エバとその父カドウルが住んでいた。胸の病に苦しむカドウルに代わり、必死に働いたというエバ。だが努力は空しくカドウルは亡くなり、エバは独りになった。

「・・・黙って聞きゃあ美談なんだろうが、実際は違った。カドウルの病は胸だけじゃなくて、その心まで冒しちまったのさ。悪魔のような性格に変わったカドウルは、エバをひどくこき使うようになったんだ。給金はすべて自分の胸の薬と酒に代えて、エバには少しのパンすらも与えなかったのさ。」

エイブル通りで旅籠を営む主が、安っぽい煙草をふかしながら、ゆっくりとつぶやいた。

ひもじさと絶望の中、エバは自分が生き残るため、父に内緒で娼婦へと身を堕とした。

「その娼婦館の馴染みだったエーネツカが、エバに目をつけたんだ。気に入った娘は強引にでも妾にして、飽きたら捨てるってのがエーネツカって奴だったから・・・」

だがエバは、病気の父がいるからと、妾になるのは拒んだ。というより、それを口実にしても、エーネツカのものになるのを嫌がっていたという。

「だから、エーネツカが直接カドウルの所へ出向いてきて、どんと金の詰まった袋を渡したんだ。娘をこいつで売れってな。それを見

たカドウル野郎は、目の色を変えてこう言ったんだ。あんな小便臭い小娘でよけりや、旦那の好きにしてくれってな……」

その足で娼婦館に戻ったエーネツカが、カドウル快諾の様子をエバに話すと、エバはその場で泣き崩れ、エーネツカの屋敷に連れて行かれたという。

「その後、カドウルは薬のおかげで元気にはなったが、まったく働く気をなくしちまってな。酒代をせびりに、よくエバの所へ尋ねていったっけな。だがそんな毎日も、そう長く続かなかったよ。カドウルはある晩、全身を真っ黒にして、体中の血を吐いて死んじまつたんだ。実の娘を売り飛ばした罰が当たったんだろうぜ。」

そしてその後、エーネツカも同じような死に方をした。

妾という立場をごまかすために養女という建て前があつたおかげで、エーネツカの莫大な遺産は、何の疑いもなくすべてエバのものになった。だがその不可解な死を、街人はこう噂した……奴隷商人は己の売った奴隷たちの呪いにかかって死んだのだ、と。

ノーマがぼつりとつぶやいた。

「じゃあ、あの……アンビーカの、カドウル親友に送られた手紙は、いったい……」

・・・

その頃、エバのもとへ一通の手紙が届いた。それは「潮風のスリス亭」の主、オールからのものだった。

「あら、用があるなら出向いてくるのが礼儀だというのに……」

エバの優雅な指先がその手紙を開いた途端、その美しい顔は不様なまでに引きつった。

『親愛なるエバ様』

本日より、特製蜂蜜酒を値上げいたします旨、ご報告いたします。ガストンが死んだ今、貴女様が真に頼るはこの私、オールであると確信しております。一瓶につき三千ツークとなりますので、どうぞ今後とも御愛顧のほどをよろしくお願いいたします。

追伸 見張り、用心棒ともに増員しておりますので、正攻法での御来店をお待ちしております。・・・オール』

エバは荒々しく扉を開け放つと、バイドルを呼び付けた。呼ばれたバイドルが静かにかしこまると、エバは憔悴し切った顔で、バイドルにオールの手紙を投げ、頭を抱えた。

「何と言うこと・・・オールに知られてしまったわ！あれほど目をかけてあげたというのに、恩知らずにも程があるわ！」

手紙を読み終えたバイドルが顔を上げる。

「例の冒険者たちの仕業でしょう。ガストンのことは、追々オールに嗅ぎ付けられていたでしょうが・・・三千ツークとは、また随分ふっかけてきましたな。」

「あの冒険者たち、一体何なの・・・これほどにわたくしを追い詰めるなんて、どうということなの・・・！」

エバはバイドルの巨体も目に入らぬ様子で、ふらふらと部屋中をうろつきながら独り言をつぶやき続けた。

「せつかくここまで築き上げたものが、すべて崩れていくわ、ああ・
・・奴等のせいだ・・・！」

「エバ様、まだまだゲームの勝者は決まっておりますよ。」

エバはバイドルを見ずに、真珠色に輝く乙女像の数々に目をやった。その乙女はすべて、エバに似た顔立ちをしている・・・

「私にお任せを。くれぐれも、他に手立てを見いだそうなどとせず
に。」

朝陽の中の刺青

朝日が上り始め、清々しい港町の空気と、独特の喧騒が辺りに広がりはじめ。宿屋の一室で夜を明かしたチャンスたちはすでに、身支度を整えて準備万端だ。

「ねえ、酒場の主がエバに大金をふっかけるってのは合点が行くけど、それがあちきたちにどう有利に働くの？エバの報復を恐れて、用心棒が増えるだけなんじゃない？」

エキシイが素直な質問をする。

「そうだ。見張りや用心棒が増えて、酒場はさぞ物々しくなってるだろうな。だがそれは別に大したことじゃない。雑魚が何匹増えようが俺たちは負けやしないからな。」

チャンスがにっこりと笑った。エキシイはちよつと上目遣いに考えて、それもそうね、と肩をすくめて微笑む。経験に裏打ちされた確かな自信にあふれたチャンス言葉に、誰もが相槌を打つ。

「エバから、あらゆる味方を引き剥がすのが目的なんだよ。」

「味方・・・」

「そう。オーネウス、マハンダ、ガストン、そして傀儡草、バータ・ラカッティ。こいつらがあるから、エバは自信满满々怖い者なしだった。それが殺ぎ落とされちまえば、エバだってただの女だ、相当参るだろう。さすがの性悪女商人も、ちよつとは大人しくなるだろうぜ。」

「今残っている彼女の味方って、グループ人のバイドルと、あの酒だけになつたわね。」

「・・・そうだな。」

チャンスたちは部屋を出て、まだ静かな宿屋を見回し、そっと扉を開けて外へ滑り出る。まだ朝も早いせいか、人通りはそれほど多くはない。

「酒場も閉店してる頃だ。一気に力タをつけちまおう。」

・・・

潮風のスリス亭では、厳つい顔の用心棒がうろつくと、獲物にありつけないでいる熊のようにスリス亭の中をうろついていた。まるで酒場というよりは、ごろつきのアジトのような有様だ。厨房の奥にある地下階段の入り口は、二人の男に見張られていて、階段を降りきった辺りにまたも二人の男がにらみをきかせている。そのさらに奥、緑色の瓶の側に、オールが座って脂汗を流していた。

「いいか、てめえら！気を抜くんじゃねえぞ、エバの使い以外、誰が来たって一步も中へ入れんじゃねえ！殺しちまっても構わん！」

オールはいつもの勢いを失い、怯えてビクついていた。それは、バイドルからの一通の手紙のせいだった。

『潮風のスリス亭主オール殿

見張りや用心棒の数をもっと増やして、常に寝ずの番をさせるがよろしい。貴殿の酒の存在を知るのがエバ様だけではないことを忘れたわけではあるまい。流浪の冒険者たちが貴殿の酒を狙って、あの手この手を使ってこよう。こんな馬鹿なことをしなければ、私が貴殿を守ってやれたものを、誠に残念だ。

エバ様は貴殿の申し出通り金を払う気でおられるが、冒険者たち

が貴殿に差し出すのは鋭い刃だけだ。健闘を祈る。 バイドル』

オールは歯をぎりぎり鳴らして呻いた。

「ちきしょう、あのオーネウスやマハンダを殺した連中が、俺の酒を狙ってる・・・この金づるを台無しにされてたまるか・・・！」

舞い上がっていたオールはこれを読んだ途端、夢から覚めたように怯え始めた。無敵の三戦士のうち、二人をも撃破した冒険者たちに狙われていることなど、目の前にぶら下がった大金の山の幻影に、まったく忘れ切っていたオール。今更エバに許しを請うこともできず、独り恐れおののいていた。

その物々しい様相のスリス亭へと向かうチャンスたちは、皆一様に押し黙っていた。もう少しで、依頼主ナプとの約束の半分、悪魔の酒を葬り去るという約束を、真に果たすことができるのだ。

そうして潮風のスリス亭への路地を曲がろうとした時、突然の巨大な影に一同の足が止まる。朝日を背に立ち尽くすそれは・・・

「・・・どこへ行くのだ？」

無敵のグループ最後の一人、バイドルではないか。教会で出会った時とは違う、静かな口調だ。

剣の柄にかけたチャンスの手が、ぴくりと動く。

「予想通りの場所さ。」

しかし指先をそれ以上動かさず、チャンスはバイドルの静かな問いに、同じように静かに答えた。バイドルは畳み掛けるように問い直す。

「引き返す気は？」

「さらさらないね。」

あつさりと言い切るチャンス。

バイドルは、独り言のようにつぶやいた。

「・・・エバ様をここまで追い詰めたのは、おまえたちが初めてだ。」

「勘違いするなよ、バイドル。」

チャンスはバイドルを見上げた。

「俺たちがナプに依頼されたのは二つ。一つは、悪魔の酒をこの世から葬り去ること。そしてもう一つ、悪魔の酒に魅入られた仲間たちを救うことだ。悪魔の酒の隣にエバがいて、おまえの隣にもエバがいた、それだけのことさ。」

バイドルは小さくうなずき、やがてゆっくりと、立ち去ろうとした。チャンスたちが潮風のスリス亭に乗り込むということが、どういうことが知っているはずなのに。

その後ろ姿に、チャンスはつぶやいた。

「俺たちへの用事は、それだけか？」

バイドルは、黙ったままで歩き去ろうとしていた。

チャンスはなおも呼びかける。

「・・・おまえはこのまま主のエバを裏切って、どうする気だ？ナ

プのことも、自分の気持ちも裏切り続けて、このまま首でも括る気か？」

チャンスの言葉に、バイドルが立ち止まり、顔を上げた。朝陽を受けた背中に浮かび上がる見事な刺青が、沈黙のまま泣いているように見えた。バイドルは再び、静かにうつむいた。

「・・・俺は、あの酒がなければ生きてはいけん。何もかも切り捨てた後・・・自分で自分に始末をつける覚悟はできている。」

「はっ、やめときな。おまえみてえなデカブツがぶら下がる樹なんざ、どこにもねえよ。」

サージの茶化した言葉に、バイドルはわずかに振り返る。

「悪魔の酒に魅入られたままのおまえでも、その酒が無くなりさえすれば・・・もう何にも縛られる必要はないはずだぜ。」

チャンスは、懐から小さな包み紙を二つ取り出した。マーティとサージが顔を見合わせる・・・アンビーカの街で、毒師のフィンがくれた解毒剤の包みだ。

「・・・これは、手練れの毒師が調合した特別な解毒剤だ。この解毒剤がバータ・ラカッティの禁断症状に効くかどうかは分からないが・・・おまえが大博打を打ちたくなったときには、こいつを全部くれてやる。おまえの体格なら二ついつぺんに飲まないと効かないだろうからな。」

「・・・俺が、そんな博打を打つとでも？」

「負け続けの人生で終わっていいってんなら、それでもいいさ。ナプにはそうやって報告するだけだ。」

チャンスは、またもさりとそう言った。
しかしその後、さりげなく付け加える。

「・・・でも俺は、おまえがそんな終わり方をするとは思っちゃいないけどな。」

バイドルは、じっとチャンスを見ている。

「おまえは絶対、また俺と会うことになる。その時を楽しみにしてるぜ。」

朝もやの街の中へゆつくりと歩き出すチャンス。立ち尽くすバイドルは、チャンスたちの姿が路地裏へ消えていくのを見守っていた。最後に路地裏の角から、ちらりとエキシイがバイドルへ振り返った。

「・・・ナプさん、待ってるよ。」

「!・・・」

「あんたたちが塗り重ねた時間の後ろで、ナプさんはずっとあの瞬間から、止まったまま・・・待ち続けてるんだから。」

輝く金髪をなびかせてそっと消えていくエキシイ。

「ナプ・・・」

バイドルの脳裏に、あの頃・・・勇者として人のために活躍していた時が蘇る。五人で協力して旅を続けてきたあの時・・・この瞬間は永遠だと、全員が信じていたあの時。仲間の笑顔・・・ナプの、

笑顔・・・

バイドルが唇を噛み締めて拳を握った時には、街の彼方から朝日が静かに昇ろうとしていた。

・・・

潮風のスリス亭が近づくにつれ、一步一步を用心深く進んでいくサージ。ナイフダートに丁寧な毒を浸し、舌なめずりをする。

「なあチャンス、好きにやっても・・・いいんだよね？」

サージがちらりとチャンスを見る。まるで鳥かごを狙う猫が、主人に許しを請うかのような眼だ。マーティがサージを睨みつけた。

「そんな暇はありませんよ、相手の人数も酒場の間取りも、何一つ分からないんですから。」

「とりあえず最優先なのは悪魔の酒と、酒場の主だ。そいつらを確認するまでは、好き勝手は絶対にしないでくれよ、いいなサージ？」
「う・・・分かったよオ・・・」

静かだが鋭いチャンスの言葉に、サージが首をすくめてうなずいた。

そうするうちに、看板が見えてきた。

「あれじゃない？潮風のスリス亭・・・あら、誰もいないわ。」

さぞかし物々しい数の用心棒であふれていると思っていたノーマが、拍子抜けしたような口調でつぶやく。しかしマーティはその様子を見て眉をひそめた。

「・・・多分、外見上それと分からないようにしているだけではな

いでしょうか。酒場の中に大勢待機しているのでは？」

「まあ、どっちでもいいけどな。行ってみようぜ。」

「ちよ、ちよっとチャンス、正面から入るの!？」

チャンスは当たり前だとしても言うかのようににつこりと笑う。扉の前に立つチャンスの後ろで、エキシイが鼻をくくんくんさせている。

「全然酒の匂いがしないわ。昨日は早々に店を閉めたんじゃない？」

チャンスは取っ手に手をかけ軽くひねるが、またもにやりと笑った。

後ろ手に合図を送ると、サージが待つてましたとばかりに腰の道具袋を広げ、鍵開け道具を取り出す。しかしその嬉しそうな表情とは裏腹に、ぽつりとつぶやくサージ。

「・・・しかし・・・いいのかチャンス、鍵をこじ開けてまで正面からって、おまえらしくねえじゃん。」

チャンスはサージの鍵開けの手際を見つめながら、小さく答える。

「表玄関から入るからって、テーブルでお行儀よく話し合いをしようってんじゃないぜ。まあ、どうなるかは酒場の業突く張り次第だけどな。」

かちん。鍵が外れる。

ゆつくりと取っ手に手をかけ、そつと扉を開けるサージ。隙間を覗いた途端、サージは息を飲んだ。

「これは!？」

沈黙の酒場

「これは!？」

サージが勢いよく扉を開け放った。
全員が酒場の中に踏み込み、息を飲む。

「・・・何があつたんだ？」

倒れたテーブル。

叩き割られた、椅子。

カウンターにもたれかかった男の、だらりと下がった血だらけの手・・・

チャンスたちは扉を閉め、中へ入った。マーティがカウンターの側により、倒れてぐったりとした男の様子を見るが、すぐに首を振り、短く祈りを捧げる。

「・・・まだそれほど時間は経っていないようです、しかもこの傷は・・・」

剣の傷とは明らかに違う、壮絶な切り口。

「・・・バイドル!？」

「まさか、悪魔の酒を奪いに・・・!」

誰とも無く、カウンター裏にある酒場の奥へ通じる扉へ駆け寄り、大きく開け放った。地下へ続く階段にも数人の男が倒れていて、ど

れもすべて一撃で倒されていた。中には首を吹き飛ばされている死体である。屍を踏み越えて地下の酒蔵にたどりついたチャンスたちは、背筋が冷たくなるような光景に眼を疑った。

折り重なった屍は、十数体もあるうか。

血の気が失せたそれらの顔はすべてが恐怖にゆがみ、もはや誰が酒場の主なのかも分らない。流れ出た血が床を赤黒く満たし、酒の匂いと溶け合って異様な匂いを漂わせていた。そして、白目を剥いて絶命している用心棒たちの背後、緑色の瓶が積まれた一角に、大きな戦斧が立てかけてあった。

「・・・バイドル・・・」

チャンスは、その戦斧を握り締めた。

重厚な柄、見事な細工の施された刃。戦士たるもの、命と同じほどに大切であろう武器を、自ら残して行くという事は・・・

「ノーマ、エキシイ、この場は任せた！サージ、マーティ、バイドルを追うぞ！！」

「チャンス！？」

「バイドルをこのまま死なせるわけにやいかねえ！ナプの依頼はまだ終わっちゃいない！！」

チャンスが獲物を追う豹のように素早く階段を駆け上がっていく。サージとマーティも慌ててその後ろに続き、階段を上っていった。

「！！」

チャンスが階段を上がりきってホールに出た瞬間、張り詰めた空気がピンと神経に突き刺さる。

「動くな！警備隊だ！！」

「それ以上動くと、ハリネズミになるぞ！」

チャンスはぐつと身体を引いて立ち止まった。

ホール全体に、矢をつがえた警備兵がずらりと並んでいるではないか。チャンスがおどけたように大声を上げた。

「こりやまた、警備隊の皆さんじゃねえか！どうしたってんだい！？」

チャンスの背後に続いていたサージとマーティが、その声にハッとしてカウンター裏に隠れる。サージが小さく毒づいた。

『警備隊だと！？こんな時に・・・！』

『バイドルが去り際に通報していったのかもしれませんが、私たちを足止めするために・・・！』

「貴様がこの酒場に押し入った盗賊の頭か！？」

警備隊の長らしい、偉そうな男が声高に叫んだ。チャンスは大聲に首を振って言い返す。

「まさか！叫び声がしたから様子を見にきたただけだ、盗みなんてとんでもない！」

「ふん、詳しい話は警備隊の地下牢でたっぷり話してもらっぞ、連行しろ！！」

カウンター裏に潜んでいたサージが、懷から取り出した小さな丸い珠を、ひようと警備隊の真ん中に投げ落とした。チャンスの頭上を越えて空を切ったその珠は、床に落ちて軽く割れた途端、凄まじい煙を吐き出した。

「ゲホツ、え、煙幕弾だ！」

「逃げるぞ、出口を固める！！」

警備隊が右往左往している隙に駆け出したサージとマーティが、チャンスを手掴んで左翼へ引っ張り、窓を開け放って飛び出した。マーティが振り返りざま、槍に刻んである印に手を添える。

「我が父トレフィノ大神よ、しばしの休息を彼らに与えたまえ！」

すらりと空気が一閃したかと思うと、煙幕の中で次々と警備兵たちが倒れこんでいく。大いびきをかいてぐっすりと眠り込んだ警備兵たちに、すまなそうに会釈して、マーティはチャンスたちに続いて駆け出していった。

・・・

『く、苦し・・・ああ、お願い、助けて、助けてえ！』

『何でも！何でもいたしますから！どうかお慈悲を、旦那様！！』

『お願いします、どうかそれを飲ませて下さい！！』

エバは、遠い目をして窓の外を眺めていた。
アンビーカにいた頃、小さく簡素なレンガ造りの家に暮らしてい

た自分が、今やこのスリスでも指折りの豪邸に住んでいる。

「・・・お父さん・・・」

スリスで胸の病に倒れた父カドウルが、絶望と死への恐怖から鬼へと変わった、あの日。

寝る間を惜しんで働いた給金はすべて父に取り上げられ、食事もなくに食べさせてもらえなかった、あの時。

ひもじさと哀しみの中、追い詰められたエバが選択せざるを得なかった、娼婦への道。

だが、そこまで貶められてもエバは、父から逃げようとしなかった。それは・・・

「エバ様。」

背後の扉がノックされたのも、開かれたのにも気付かなかったエバがハッとして振り返る。

「ああ・・・バイドル、どうしたの？」

エバが疲れ切った顔でつぶやくと、バイドルは後ろ手に扉を閉めて、ずっと膝まづいた。

「・・・エバ様、オールが殺されました。」

息が止まる、エバ。

見開かれた目が焦点を失う。

「『我々』の酒はすべて、失われたのです。」

丁寧に結い上げた髪を淑やかな指でわしづかみにするエバは、声もなく絶叫を上げた。その声なき声のわななきを前に、バイドルは目を伏せてうつむいている。

「そんな・・・そんな・・・な・・・嘘でしょバイドル、嘘よね、嘘って言って・・・！」

聞き取れぬほどに小さな言葉を繰り返すエバの口元。バイドルは押し黙っている。

「あの酒がなくなったら私は、私・・・あなたは・・・ああ、いやよバイドル、嘘って言ってお願いだから！」

その大きな瞳に浮かんだ涙を見つめたバイドルは、静かにつぶやいた。

「私の役目は終わりました・・・」

腰に吊るした短剣を引き抜き、エバへと差し出すバイドル。

「どうかエバ様の手で、この私めに罰をお与え下さい。最後まで貴女様のお役に立てなかった、この愚かな私に・・・エバ様のお裁きを。」

悪魔の酒を飲まされて奴隷にされた時から、ずっと待ち望んでいたのはこの瞬間なのかもしれないと、バイドルは自分の差し出した短剣を眺めながら考えた。

エバが震える手をゆっくりと短剣に伸ばし、その柄をぐっと握り

締めた、その瞬間。

「うわあああー!!」

エバが身も凍るような叫び声を上げた。

振りかざした短剣を閃かせ、その刃を突き立てた先は・・・

ガシャン！

ガシャン！

真珠色の乙女の陶器像が、あっけなく、無残に叩き割られていく。
エバが髪を振り乱してすべての陶器像を叩き割る間、バイドルは
微動だにせず、その悲痛な様子を見つめていた。真珠色の乙女像か
ら、ゆっくりと金貨や宝石がこぼれ落ちていく。

「私の築き上げたすべてが！すべてが奪われていくなんて！！そんなの許さない！許さないわ！！」

振り返ったエバが短剣を握り締め、バイドルの脇をすり抜ける。

「エバ様！！」

ヘルマン邸の暗闇

「エバ様!!」

バイドルが止める間もなく駆け去っていったエバの足音が、廊下に音高く響き渡った。バイドルも部屋の扉を跳ね飛ばして廊下へ出て、エバの後を追う。

エバの向かう先は、バイドルには予想がついていた。屋敷の裏手にある石造りの小屋・・・バイドルはもちろん、屋敷の使用人たちすべてに、決してここに近づいてはならないと常々念を押していた場所だ。

バイドルは屋敷の外を目指して転がるように走る。やがて勝手口の脇に立ち尽くす執事を見つけると、バイドルはその肩に掴みかかって叫んだ。

「エバ様はどこへ行った!？」

執事は、呆然としたまま答える。

「奥様は・・・裏庭の方へ・・・」

それだけ聞くと、突き飛ばすように執事を押し退けて勝手口を出るバイドル。

そうして外へ出た瞬間、手入れのいい芝を踏みつける足音を感じて、バイドルは振り返った。

「バイドル!!」

投げかけられた声。バイドルは耳を疑う・・・

「チャンス・・・！」

警備隊に密告し、酒場へ乗り込んだチャンスたちをまとめて一網打尽にできたはずなのに。

今頃は警備隊の薄暗い地下牢に、五人仲良く収監されているはずなのに・・・！

スリス教会の罾をはじめ、自分の仕掛ける罾をことごとくすり抜けられ、バイドルは激しい動揺を隠せなかった。

「いた、バイドルだ！！」

チャンスが汗と唾を吐き散らしながら叫ぶ。

潮風のスリス亭から走り続け、閉まっていた屋敷の門を無理やりこじ開けてきたチャンスたち。サージもマーティも息を切らせてよろめいているが、チャンスは汗を滴らせながら、バイドルに追いつがろうとさらに勢いを増して駆け出していった。そしてチャンスを見つけたバイドルは、踵を返して裏庭の方へ駆け出していく。

「さ、さすがチャンス、あの魔物並みの体力にはついていけねえぜエ・・・！」

「はあ、はあ、サージッ、私たちも行きますよ！」

「ふええ・・・」

肩で息をするサージを引っ張りながら、マーティも汗だくでチャ

ンスの後を追った。

バイドルの後ろ姿を追って走り続けるチャンスはやがて、裏庭の一角にある不自然な繁みにたどり着く。まるでそこだけが森のように鬱蒼とした草木に覆われ、中の様子を窺い知ることとはできない。

チャンスは足を止め、じっと繁みを見た。ゆっくりと注意深くその周囲を回ると、人ひとり通れるほどの小道を見つける。そして立ち止まっているチャンスの元へ、ようやく追いついたサージとマーティ。マーティは槍に寄りかかって息を整え、サージは走ってきた勢いのまま芝生に転がり込んで、だらしない大の字になってしまふ。

マーティが繁みを眺めてつぶやいた。

「ここ・・・ですか？」

「ひ、広エ庭だぜまったく・・・牧場じゃあるまいし、これだから金持ちは嫌いなんだ！程度ってモンを考えろよな！はあ、はあ・・・」

悪態を吐かずにいられないサージ。

そんなサージには目もくれず、チャンスは小道の奥を眺めながら短剣を引き抜いた。その緊張した横顔に、思わずサージが口を噤む。

「エバもバイドルも、この中にいる。この狭い草むらからいきなりバイドルの馬鹿力で締め上げられたらおしまいだ・・・何があるか分からねえ、慎重にいくぜ。」

「は、はい！」

「ただっ広エ庭の次は、密林かよ・・・あーあ。」

サージが起き上がって背中芝を払い、億劫そうにナイフダートを構えた。

・・・

眠り込んで高いびきをかいている警備隊の面々を残し、「潮風のスリス亭」から立ち去るノーマとエキシィ。少しだけのんびりした足取りで歩く二人は、広い大通りに出て初めて、肩の力が抜けた気がした。悪魔の酒を全て始末し終えた二人は、軽い疲労感と達成感に満たされている。

「終わったわね・・・」

「うん、半分はね。」

エキシィはそう言って、両手で抱えた戦斧を眺めた。バイドルが残っていた戦斧・・・止めるノーマを説き伏せて、エキシィが酒場から持ち出してきたのだ。重厚な戦斧を抱えたエキシィを見つめ、ノーマがつぶやいた。

「ねえ・・・それ、どうするの？」

「うん・・・」

エキシィは、静かにつぶやいた。

「・・・バイドルがこのまま死ぬ運命なら、ナプさんに届けたいの・・・本当は、バイドル本人に返したいんだけど。」

ノーマは微笑んだ。

「エキシィ、優しいのね。」

「うっん・・・多分、違うわ。」

エキシイはノーマを見つめ返す。

「何もかも失ったバイドルが自分で喉をかき斬ろうとしても、あちきは止めない。チャンスがバイドルを斬ろうとしても同じよ、あちきは止めないわ。でも・・・」

「・・・」

「自暴自棄になったバイドルが、まだチャンスたちを殺そうとするんなら、・・・この戦斧で、あちきがバイドルを殺すつもりよ。仲間を傷つける奴はあちきが許さない。」

エキシイは、平然とそう言った。

ノーマは、普段の明るいエキシイとは思えない真剣な言葉に一瞬、自分の言葉を失う。魔術師となつてからは特定の仲間を持たず、様々な土地を転々としてきたエキシイ。チャンスと出会って初めて、仲間というものの意味と、その大切さを知ったと、エキシイはつぶやいた。

「ねえ、ノーマもそうでしょ？」

「えっ・・・」

「だってノーマ、チャンスが好きなんでしょ？好きなら、守りたいでしょ？」

ノーマは戸惑いながらも、エキシイの持つ戦斧を見つめて、ため息をついた。敵であるバイドルを案じ、酒場を駆け出していくチャンスの後ろ姿が甦る。

「そうね・・・好きよ。チャンスが大好き。・・・だけどね、私は彼を守りたいと思ったことは、今まで一度もないわ。」

「そうなの？」

「ええ。だって……」

ノーマはにつこりと微笑んだ。

「彼が窮地に追い込まれたことなんて、今まで一度も見なかったもの。守らなきゃって思うほど弱いところがないのも……困りものよね。」

ノーマの言葉を聞くとエキシイは、大きく吹き出して甲高い笑い声を上げた。

「あはは、それもそうね！　そういえばあちきも、そんなチャンスは見たことないわ！　あははは！」

エキシイはバイドルの戦斧を持ち上げて、その輝きの前に微笑を浮かべる。

「じゃあこの戦斧も、バイドルに返せるかな。」

「きつと返せるわよ。だってチャンスがついてるんだもの。」

ノーマが自信を持ってそう言うと、エキシイは微笑みの中に半分だけ呆れた顔を紛れ込ませてノーマを見た。

「……ふふ、ほんとにノーマはチャンスが好きなのね。あちきもそんなに人を好きになれる日がくるかしら。」

「あら、サージやマーティじゃだめなの？」

「サージはお調子者すぎるのよ。もうちょっと背が高きや文句言わないんだけど、バンタム人じゃそれも無理だしさ。マーティは文句なくいい男なんだけど高位神官でしょ、毎日カミサマのお説教され

そつで二の足踏んじやうのよねー・・・」

歩きながら考えるエキシイはそこまで言つと、突然顔を上げて悪戯っぽくにやりと笑つた。

「そうか、チャンス賭けてノーマと『張る』つてのもいいかもね！」

「えっ!？」

「ねえノーマ、チャンスをあちきに譲る気なあい？ねえ、ねえ！」
「ちよつ・・・」

「ああ、譲るものにも、まだチャンスはノーマのものじゃないのよね。それなら正々堂々勝負仕掛けていいわけよね、うんうん。」
「エキシイ、それ本気で言つてるの!？」

ノーマが頬を引きつらせた。エキシイは笑みを崩さぬまま戦斧を後ろ手に握り締め、ノーマを置き去りにして軽やかに走り出す。

「へへっ、内緒！ほらノーマ、急がなきゃチャンスに怒られるわよ！！」

「ちよつ・・・エキシイ！本当に本気なの、ねえつてば!！」

大通りを駆け出していく二人の後ろ姿を、数人の街人たちが物憂げに振り返る。増え始めた人波の間に、ノーマとエキシイの楽しい姿は瞬く間にかき消えていった。

憎しみの刻印

広大な敷地の一角に、まるで密林のように生い茂る木々。整然と刈り込まれた手入れのいい芝と比較するまでもなく、その部分だけが独特の威圧感を持って佇んでいる。人一人やつと通れるほどの細い道を進んでいくチャンスたちにも、その場が持つ気配の異様さを感じ取れた。

この密生した木々の間では自慢の長剣が振るえないチャンスは、短剣を手に緊張した面持ちで進んでいく。同じくサージも両手に短剣を握り締め、五感を研ぎ澄ませて気配の動きを探る。その二人の後ろでマーティは、槍を片手に胸を押さえ、苦しい顔をしてつぶやいた。

「・・・チャンス、この気配・・・とても嫌な感じがします。」
「嫌な感じ？」

チャンスが軽く振り返る。マーティは眉をひそめてうなずいた。

「邪悪な気が高ぶっています、近付いている・・・もうすぐです。」
「俺には全然分からねえけど・・・マーティだけに分かるってことは・・・」

サージも振り返って険しい顔のマーティを見た。その途端、チャンスがピタリと立ち止まる。振り向きざまにチャンスの軽鎧に鼻をぶつけたサージが、はぎゃ、と一言放った瞬間、チャンスが小さくつぶやいた。

「・・・あれだ。」

黒っぽい石を積んだ小さな石室が、密集した繁みに覆われるようにして姿を現した。入り口の岩扉がわずかに開いていて、張り付いた厚い苔に大きな指の跡がついていた。

そして入り口の上に、不思議な紋様が刻まれていた。チャンスがそつと近付いてその紋様を見つめると、マーティが苦々しげに呻いた。

「こ、これは・・・死人還りの刻印では・・・！」

サージがギョツとした。

「嘘だろ、何でエバが死人還りの術なんか使うんだよ！」

「・・・死人使いを抱き込んだらどう、素人がおいそれと使える術じゃねえ。死人還りの術はその知識の他に、儀式にも相当金がかかるらしいからな。それに刻印が崩壊すると死人は統制を失って暴走しちまうから、それを防ぐためにも色々とかかるって話だぜ。」

「チャンス、よく知ってますね・・・私も同じようなことを聞いています。この刻印が壊れると、死人が『生き骸』と呼ばれる魔物と化す、と・・・」

「迂闊に壊したら、俺たちが危ないじゃんか。」

「そついうこつた・・・さて、どうするかな。」

チャンスはそう言いながらベルトから長剣を引き抜くと、半開きの石扉をそつと突付いてみる。何も飛び出してこないのを確認してから、扉に手をかけてゆつくりと力をかける。石扉は低く唸りながら静かに開いていった。

入り口からすぐ急な階段が伸び、暗闇の底に消えている。物音は聞こえてこない。サージがじつくりと聞き耳を立てた後に首を振った。

「ここからは俺が先に立つぜ。死人を閉じ込めておくだけの建物なら大した畏もないだろうが、何たってあのバイドルが先に入っているからな・・・まあ、いつも通り任せといてくれ。」

「いや、サージ・・・おまえはここに残るんだ。」

チャンスの言葉に、サージは息を飲んだ。

「なっ・・・何だよチャンス、ここまで来たんだから俺も一緒に行くよ！おいしいとこだけ持ってこうなんて、おまえらしくねえぞ！」

おどけた言葉に精一杯の疑問を詰め込んで、サージが叫ぶ。
しかしチャンスはうなずかなかった。

「おまえには大事な役目を果たしてほしいんだ。」

「役目・・・」

「そうだ。俺が中から合図したら、この死人還りの刻印を・・・思い切り壊すんだ、マーティと二人でな。」

サージとマーティが同時に目を見開く。

「そ、そんな、私も残るのですか！？チャンス、神官の私でないと死者は浄化できませんよ！」

「知ってるよ。だからおまえのその力を、俺の剣に貸してほしいんだ。」

「・・・一人でなんて無茶です！」

「俺の無茶は知ってるだろ、毎度のこった。心配すんな、俺は簡単にくたばらねえよ。それに・・・」

チャンスは、下り階段の彼方にある暗闇を見つめた。

「俺は、バイドルを信じる・・・あいつは絶対、俺を殺さねえ。」
「・・・う・・・な、何だよ、チャンスの勘は外れることの方が多いじゃねえかよ！カードもサイコロもからつきし弱いくせに！ちきしょう！」

サージが地団太を踏んで喚き散らす。
その途端、チャンスやサージにも感じ取れる、冷たい気配がじんわりと入り口から滲み出た。マーティがハッとして石室を睨む。

「いけない、邪悪な気がまた強く・・・！も・・・もうっ！しょうがないですね、こうなったら我が父トレフィノ大神に、すべての運命を託すしかありません！」

いつも冷静なマーティが珍しく言葉を荒げた。印を結び、早口で祈りの言葉を唱えると、その手に蒼白い光が宿る。マーティはそのまま屈み込み、チャンスの剣にその光をすらりと溶け込ませた。チャンスはにやりと笑って剣を構える。

「ありがとよマーティ。サージ、後は頼むぜ！」

サージはちらりとチャンスを見て、つんと顔を背けた。常にチャンスと行動を共にしていたサージには、単独で動こうとするチャンスの真意が分からなかったのだ。チャンスは相変わらずの自信に満ちた笑顔を二人に投げかけ、静かに石室の階段を下っていった。消えていくチャンスの靴音を聞きながら、マーティは居たたまれない思いで祈りを口にする。

「我が父トレフィノ大神よ・・・どうか、どうか我が友チャンスを
お守り下さい・・・！」

マーティの祈りを聞きながら、サージはそつと石室に振り返る。
チャンスの足音が消え、風が揺らす草木のざわめきだけが耳に残る。
石室へ飛び込んで行きたい気持ちを必死に抑え、サージは拳を振り
上げてがなりたてた。

「ああもうっ、チャンスの馬鹿野郎っ！死んだりしたら、もう二度
と酒も飯もおごってやんねえからな！！」

・・・

足音を立てないように、そつと歩みを進めるチャンス。石室の地
下はそれほど狭くないが、じつとりとした湿り気と水の滴る石壁が、
重苦しい威圧感を放っている。剣に宿った聖なる輝きによつて照ら
し出される景色は、時の流れを感じさせない地下墳墓そのものだ。
階段を降り切ると、横道や扉などの一切ない通路が奥へと続いて
いた。静かに歩を進めながら、チャンスは考える。

エバは、死人還りの術を誰に施したのだろうか。そして、そこま
でして蘇らせた者の住むこの石室を、なぜ何の手入れもせず放置
したのだろう。

暗闇の彼方に扉が見えた。両開きの扉のかんぬきが外され、通路
に無造作に放り出されている。しっかりと閉じられた扉にチャンス
がそつと近寄ると、中から声が漏れてきた。

「エバ様・・・お願いです、もう・・・！」

バイドルの声だ。

チャンスはぐつと扉を引いた。さほど軋むことなく開いた扉から一步部屋へ踏み込むと、チャンスの目には驚くべき光景が広がった。

「う……ぐつ……!？」

場慣れしているチャンスが一瞬、猛烈な吐き気を覚えるほどの腐臭。

澱み、腐りきった陰鬱な空気の中で、光を湛えたチャンスの剣は、壁中に刻み込まれた爪跡を映し出す。深緑色の苔に覆われた壁に縦横無尽に走るその跡からは、ぽたぽたと水が滴り落ちていた。石畳の床にたまった水は滑りを帯び、胸の悪くなるような色を宿している。

そして目の前の闇にぼんやりと浮かび上がる影に目を凝らすと、それが四つんばいのままがくがくと震えるバイドルの巨体であることに気付くチャンス。

「バ……バイドル！」

叫んだ拍子に濃密な腐臭が鼻にまとわり付き、思わず口を押さえずにいられないチャンス。じめじめとした石畳の上、バイドルは目に見えるほどに震えながら、無理やり声を絞り出した。

「に、逃げるチャンス！もう……エバ様は終わりだ……！」

「お、終わりって……」

甲高い悲鳴のような笑い声が、部屋中に反響して一気に広がる。耳障りなその声へと顔を上げたチャンスは、蒼白い光を放つ剣を高く掲げてみる。狂気に歪んだ顔が、ふわりと闇の中に浮かんた。

「あはははは、あんたがチャンスね、わたくしをことごとく邪魔

してくれてありがとう！こいつらがあんたにお礼をしたいそうよ！
」

髪を振り乱し金切り声を上げるエバは、すっと闇に溶けて消える。あつと思つて目を見張るチャンスの前に、二つの影が同時に揺らいで立ち上がった。

黒く変色した長い爪とその皮膚は、もはや人のものではなかった。時を経てぶよぶよに緩んだ皮膚が所々垂れ下がり、その隙間に入り込んだ細かな虫が塊になって白く浮き上がっている。衣服を着ていることで、かろうじて元が人であったことが分かる、この二体の死人は・・・

「イーネツカさまと、エバ様の・・・お父上だ。」

震えながらつぶやくバイドルの腕に、黒い爪跡が走っている。死人の爪で傷を受けると麻痺してしまうと言われているのを思い出すチャンス。グラップ人が誇る「言霊の鎧」の力をもつてしても、その力に抗えなかったのか。

「エバ様を守れなかったのは俺の責任だ、俺がエバ様を何とかする！おまえだけでも逃げろ、チャンス！」

「はっ、わたくしを何とかするですって・・・バイドル、おまえに何ができるの？」

二体の死人の向うで、エバの嘲笑が漏れた。

「お父さんも、イーネツカも！わたくしからすべてのものを奪い取ったくせに、わたくしには何も、何も与えてくれなかったわ！それなのにおまえは奴隷の分際で、主であるわたくしに何をしようというの！！！」

「・・・」

「あははははは、ほら御覧なさい、何も言えないじゃないの！あの酒が失われた今、おまえは不様に死ぬ運命なのよ！そんなおまえが今更、わたくしにできることなど一つもないのよ！おまえもこいつらと一緒に腐りながら、未来永劫さまよい続けるがいいわ！！」

バイドルが唇を噛み締めるその隣で、チャンスがエバを睨みつける。

「忌々しい人・・・チャンス、あなたもこいつらの爪に引き裂かれて、汚い死骸に成り果てなさいな！」

エーネツカと、エバの父カドウルの黒い骸が、無造作に一步踏み出す。虚ろなまなざしが、二人に焦点を定め始めた。

闇に堕ちたエバ

「そんな・・・チャンスひとりで、この中に!？」

後からヘルマン邸に駆け込んできたノーマが、不気味に沈黙した石室を見て顔色を変える。エキシイも戦斧を草むらに放り出して叫んだ。

「ちょっとあんたたち! どうして止めなかったのよ! でなきゃ、どうして一緒に行かなかったのよ!!」

「す、すみません・・・でもチャンスは、こうと決めたことは梃子^{てこ}でも曲げないタチですから・・・どう説得しても多分、彼はひとりで行ってしまったと思・・・」

「今からでも遅くない、皆で行きましょう!」

ノーマが石室へ駆け寄ろうとすると、サージが素早く石室の前に立ちはだかった。

「だめだ。」

「サージ・・・でも!」

「俺だつて行きたいけど、やっぱここで待つわ。」

目を丸くするノーマ。サージは苦笑いを浮かべて、石室の入り口に刻まれた死人還りの刻印を睨む。

「全員が石室になだれこんだら、中で身動きがとれねえ。相手の人数も分からねえし、かえって危険すぎる。だからチャンスは一人で行ったんだ。それにもしもの時は、絶対俺たちが自分を助けてくれるって、チャンスは信じてる。それに・・・よく考えたら、マーテ

イの細腕でこの刻印が壊せるとは思えねえもんな。」

「どういう意味ですかサージ！それでも私は神官戦士として日々鍛錬を積んできたんですよ、このくらいの刻印を壊せないわけないでしょう！」

「どうだかねえ。槍でがりがり削るくらいが関の山じゃねえの？」

「失礼な！槍術だけが私の手段ではありませんよ！」

静かな石室の前で、男同士の罵りあいが始まる。ノーマとエキシイはまたか、と肩を落として二人を見つめるが、罵倒しあう表情の中に隠しきれない戸惑いと不安の切れ端が見て取れた。

「結局二人とも、ケンカでもしてないと落ち着かないってことなのよね。」

「・・・素直じゃないわね、毎度のことだけど・・・」

ノーマとエキシイは、石室の中をそつと覗き込む。突然始まる急な階段が闇へと消えて、まるで地獄の底への入り口のような。ノーマが息を飲んで首を振った。

「・・・刻印の力のせいかしら、精霊力がまったく感じられないわ。」

エキシイも、魔術師の指輪を強く握り締めて闇を見つめる。

「チャンス・・・無事でいてよね・・・」

・・・

ゆらゆらと無言で襲い掛かってくる二体の死人の向うで、エバの

悲鳴のような笑い声がこだましながら石室に響き渡っていた。

普通の手応えとは違う、奇妙に柔らかい感触が剣から伝わってくる。向かい来る爪を弾き返し、腐肉を切り裂く剣さばきには迷いはない。しかしどれほどに急所を突き刺しても、死人の身体は見る間に元に戻っていくのだ。思わず舌打ちするチャンス。

「くっそ・・・マーティの浄化の光が効かねえのか！？死人還りの刻印の力を侮ってたぜ・・・！」

「チャンス、逃げる！このままでは避け切れんぞ！」
「動けねえヤロウは黙ってる！気が散る！」

チャンスの機敏な背後を、バイドルが冷や汗を流して震えながら見つめている。バイドルをかばいながら、想像以上に素早い死人二人を相手に苦闘を強いられるチャンス。

「エバ様！もう止めてください！これ以上何をして、もう何も戻らないですよ！」

震える声を絞り出し、バイドルが叫んだ。

チャンスの剣がエーネツカと思われる死人の喉に突き刺さる。剣先を引き抜くそばから塞がっていく傷のように、じわじわとエバがつぶやき返した。

「そうよ、戻らない。わたくしの過去も未来も何もかも戻らない。それもこれもチャンス、あんたと、こいつらのせいよ。こいつらがわたくしをこんな風にしたの。それでも這い上がって掴んだすべてを、チャンス、あんたがめちゃくちゃにしたのよ！」

カドウルが虚ろなまなざしを天井に向けたまま、バイドルへ躍りかかった。チャンスはすかさずその脇腹を蹴りつけ、カドウル

ルの死人は壁に叩きつけられて倒れ伏す。

「エバ！不幸を他人のせいにするのは卑怯だぜ！辛い運命を切り開く為の努力を、おまえは本当にしたのかよ！！」

背後で、バイドルが苦しげに呻き始めた。チャンスはハツとする。悪魔の酒の、禁断症状だ。

エバが叫ぶ。

「お黙り！お父さんはわたくしから何もかも取り上げたわ、娼婦に成り下がったわたくしを咎めもせず、四六時中金の事しか頭になかった！拳句にエーネツカにわたくしを売り飛ばしたわ！実の娘よ？それなのに・・・！」

「そこまでされて、なぜ逃げなかった？娼婦になるのが嫌だった、エーネツカのものになるのが嫌だった、なのになぜ逃げずに運命を受け入れた！」

死人二人の爪がチャンスに襲い掛かる。チャンスは剣を振りぬき、その腕を切り落とそうとするが、頑丈な骨が剣の勢いを削いでしまふ。猛烈な腐臭に顔をしかめるチャンスは、氣勢を上げて二人の死人を思い切り押し返す。死人二人は腕の腐肉を抉られながら跳ね返され、不様にもんどりうつて後方へ倒れた。

「・・・信じたかったの！！」

目の前の澱んだ空気を切り裂くような、エバの声。

哀れみを浮かべる、チャンスのまなざし・・・

「何度も何度も逃げようとしたわ、アンビーカに嘘の手紙を送って新しい生活を得ることも考えた。でも愛されてた日々を信じたかったのよ、最後まで！いつかまた、優しいお父さんに戻ってくれるって、わたくしをエーネツカのところから連れ戻しに来てくれるって・・・わたくしは信じていたかったのよ！」

死人二人がゆらりと立ち上がるうとする。

「でも、運命はそのままわたくしを取り込んで離さなかった・・・だからお父さんを殺したのよ、毒を使つて。エーネツカも同じ毒で死んでもらったわ、バータ・ラカツティの蜂蜜酒をわたくしに飲ませ、奴隷同然に貶めた罰としてね。」

チャンスがぎくりとして息を飲んだ。

「・・・おまえも悪魔の酒の犠牲者だったのか！？」

「そうよ。あの酒の力で、エーネツカからは逃げられなかった。でも今は違うわ、屋敷にはまだ酒が残っている・・・わたくしが生きている間に飲む分くらいはね。」

「・・・」

「わたくしは二人を葬り去って、すべてを手に入れた。いいえ、奪い取ったの。当然の報いだわ。」

「・・・この死人還りの術は、おまえの最後の『復讐』ってわけか。」

再び、エバの笑い声が高らかに部屋中に轟いた。

「あはははは、その通りよ！死人として蘇らせ、魂を縫い付けた死

骸を朽ちるまま放っておいてやったのよ！肉体を保つ術法を唱えなかったおかげで、御覧なさい、その不様なこと！最低最悪の魂に相應しい姿だと思わない？あははははは！！」

チャンスは唇を噛み締めた。剣を握る手に力がこもる。

「・・・エバ。残念だが俺の目には、おまえも死人と同じに見えるぜ。最低最悪の魂に相應しい姿。今のおまえが、それだ。」

背後でバイドルが苦しげに呻いている。エバを睨むチャンスの中に、汗がしみた。

「最後に聞かせてくれ。奴隷にされてまで、おまえのために尽くしたバイドルを殺そうとしたのはなぜだ。バイドルはかつてのおまえと・・・同じなはずだろう。」

死人二人が再びゆらりと向かってくる。チャンスは耳飾を引きちぎって口に咥えると、閃く黒い爪に剣をかざして迎え撃つ。

「・・・奴隷の分際でわたくしの何が分かるというの、思いあがりも甚だしいわ！わたくしの命令を実行できず、むざむざこんな冒険者風情に追い詰められたのは、全部おまえのせいよ！能無しの役立たずは必要ないわ！！」

チャンスはその言葉を聞いた瞬間、口に咥えた耳飾へ思い切り強く息を吹き入れた。

・・・

「マーティ！大体おまえのそのチャラチャラした格好が、最初ツから気に入らなかつたんだよ！」

「私だつてその黒っぽい格好は大嫌いです！サージの性悪な性格には似合つてますけどね！」

石室の側で繰り返されるマーティとサージの不毛な言い争いを、呆れ顔で見守るノーマとエキシィ。何度目かのため息をつこうとした、その時。

「！！！」

笛の音のような甲高い響きが、石室の奥から駆け抜けてきて四人の耳に突き刺さった。ハツとして口論をやめたサージとマーティが、石室の入り口に駆け寄る。

「待つてましたア、りゃああっ！」

サージが素早く二本の短剣を振りかざし、死人還りの刻印の中心に突き立てる。が、満身の力を込めたその一撃は、刻印にまったく傷をつけられなかった。啞然とするサージの脇から、続いてマーティが槍をかざし、刻印に鋭く突き立てる。わずかに石片が碎けたが、それでも、刻印そのものは壊れていない。ノーマとエキシィが息を飲む。

「な、何て強い……この一撃で傷もつかないなんて！」

何度か同じように試してみるが、刻印は壊せなかった。マーティが槍を引きながら青褪める。

「そつだ！マーティ、サージ、あれよ！！！」

二人の様子を見ていたエキシイが、先ほど草むらに放り投げたバイドルの戦斧を指差した。頑丈な戦斧を拾い上げて二人に手渡しながら、エキシイが呪文を唱える。

「岩をも砕く雷光の力持て、刃よ稲妻をまとえ！」

低い唸りを上げて、戦斧の刃が光を湛えた。マーティとサージはそれを二人でしっかりと握り締める。ノーマはその間に石室の前に立ち、腕輪に手を添えて目を閉じた。

「石の精霊クブデスよ、我が名において命ずる！岩盤の硬き力を弱め、ここにわが道を開け！」

目を見開くと同時に両手を刻印にかざすノーマ。一瞬、石室の入り口全体が白く発光し、またすぐに光を閉ざす。ノーマはサージとマーティに振り返って鋭く叫んだ。

「絶対に壊してよ！チャンスが待ってるんだから！！」

サージとマーティは顔を見合わせた。

「ちえっ。二人で壊せって、チャンス言ったもんな。すげえ勘だぜ。」

「さすがリーダーですよ、尊敬に値します。」

二人は刻印目がけて戦斧を振りかぶり、力まかせに叩き付けた。閃く稲光が凄まじい衝撃と共に弾け飛び、石室の入り口がわずかに崩れ落ちる。

死人還りの刻印もまた、粉々に砕かれてその破片に混じっていた。

・・・

死人の爪を弾き返した勢いで、チャンスはもう一人の死人の胸を蹴りつける。吹っ飛んでいく身体に一瞬気を取られたその時、体勢を立て直した死人の爪がチャンス目の前にあった。剣を繰り出すのがわずかに遅れ、顔面にその爪が食い込むという、寸前。

死人の動きが、ピタリと止まった。直後、遠くから石が崩れるような響きが聞こえる。死人還りの刻印が破壊されたのだ。静止した死人二人の様子を苛立ちの中で見ていたエバが、怒鳴り散らした。

「何をしてるの、さっさと殺してしまいなさい！早く！！」

死人二人の眼が、虚ろなままで見開かれ、チャンスとバイドルを見つめた。身構えるチャンス。

だが二人は、すぐにくるりと向きを変え、エバのもとへと歩き出した。

「なっ・・・チャンスはあっちよ！あいつを殺すのよ！」

死人二人の歩みは止まらない。チャンスは剣を下ろし、バイドルの隣でその様子をじっと見つめた。

「わたくしじゃないわ！チャンスは殺すのよ！来ないで、来ないでええ！！」

暗闇に吸い込まれていく二人の死人。バイドルも呻き声を上げながら、闇の向うを見つめる。チャンスが静かにつぶやいた。

「少しでもバイドルを思いやる気持ちが残っていたら、救う価値もあると思ったが・・・おまえは傷つきすぎて、他人の傷に気付けなくなってしまうたんだな。」

エバの壮絶な悲鳴が轟いた。

激しい争いの音も、ほどなく止まる。

そして気配は、静かに消え去った。

「死人還りの儀式を完全にしなかったのは誤算だぜ。不完全な儀式で蘇った死人は、刻印の崩壊とともに主に牙を剥く。その命を引き換えにして死人還りの術が解け、本当の死体に戻るんだ。やり返された気分は、どうだい？」

チャンスがゆっくりと闇の向うへ近付いていくと、剣の薄明かりに照らされて、三つの影が折り重なっているのが見えた。エバの喉笛に喰らいついている死人は、カドウルのものだ。エーネツカは、エバの胸元に顔をうずめていた。エバは目をむいた悲愴な顔のまま、息絶えている。

チャンスは無言のまま、物言わぬ三つの骸に背を向けた。

「う、が・・・うあ・・・あ!!」

ずっと声を噛み殺していたバイドルが、目を剥いて喉を掻き始め、叫び始めた。チャンスはその手を必死に押さえて叫ぶ。

「バイドル、しっかりしろっ！こ、このまま死なせてたまるか!!」

堕ちた勇者の挑戦

死人還りの刻印を破壊できた喜びも束の間、すぐにまたチャンス
の合図が石室の奥から聞こえてきた。マーティとサージが勇んで石
室に飛び込んでいくと、通路に引つ掛かりながら、チャンスとバイ
ドルが歩いてくるのが見えた。

「大丈夫かチャンス!？」

「チャンス、バイドルは・・・エバは!？」

「話は後だ、早くバイドルを！悪魔の酒の禁断症状が出始めた、早
くしねえと狂い死ぬぞ!!」

バイドルの巨体を三人で支えるには、石室の通路は狭すぎた。腕
や足を石壁に擦りながら、チャンスたちはバイドルを支え、石室か
らようやく這い出してくる。

青空の下に倒れこんだバイドルは、喉を押さえて苦しげに呻いて
いる。全身から脂汗を流して顔面蒼白だ。重い身体を支えて階段を
上がってきたチャンスもまた、汗だくで息を切らしている。だが休
む間もなく、倒れこんだバイドルのそばにしゃがみこむチャンスは、
懷から二つの小さな薬の包みを取り出した。

「バイドル、早くこれを飲め!」

ノーマから受け取った水袋とともに、バイドルへ突きつけるチャ
ンス。その二つを見たバイドルは、苦しげな息の下からかすれた声
でつぶやいた。

「い、いや・・・もういいんだ、その剣で・・・ひ、一思いに殺し
てくれ、チャンス・・・!」

チャンスの腰を指差し、黒い長剣を見つめるバイドル。チャンスは自分の剣をちらりと見るが、バイドルの腕を思い切り強く払い除け、素早く声を返す。

「死に際まで逃げるつもりか！？どうして生きる可能性を選ばねえんだよ！仲間を失い一人ですつと耐えてきたナブに、一言の詫びもなく死んじまうのが、誇り高いグラップ人のやることなのかよ！！」

「うるせえ！これ以上おまえの言い訳を聞くのは真つ平だ、さつさと、口を、開・け・ろ！！」

チャンスは無理やりバイドルの口に手を突っ込んだ。バイドルは驚いて歯をさらに食いしばるが、チャンスはそれでも強引にぐいぐいと口を押し開こうとする。

「この薬がちゃんと効くかどうかは分からねえ！だがどうせ死ぬにしても、最後まで望みを捨てるんじゃないやねえ！俺はこの薬をくれたフインを信じる、それと同じくらい、おまえのことも信じてるんだからな！」

口を開けると喚きながら、汚れた額に汗を光らせるチャンス。その真剣な顔を見つめるうち、バイドルはいつしか口元を緩めていた。チャンスはにやりと笑い、その口を大きくこじ開ける。

チャンスがバイドルの口を押さえたままノーマに目配せすると、ノーマはすぐさま薬の包みを開き、バイドルの口に薬の粉をさらさらと流し入れた。ノーマが二つ目の薬を流しいれたところで、チャンスは次にエキシイに目をやる。エキシイも待ってましたとばかりにニコリと微笑み、水袋の蓋を開いてバイドルの口に持っていつてやる。

「う……」

チャンスはそこで、ようやく手を離れた。

喉を鳴らし、薬を飲み下したバイドル。相変わらず苦しげな顔で呻き声を漏らすバイドルを、チャンスはじっと見守っている。

サージも茶化することなく、チャンスとバイドルを見つめていた。

「……ぐあああつ、がつ、が……あ!!」

その後、バイドルは身体を跳ね上げて悶絶し、歯を食いしばって苦痛に耐え続けた。薬の効果なのか、それともまったく効き目がないせいなのか、それは薬に詳しいマーティにも分からなかったが、バイドルの苦しみようは時間とともに酷くなっていた。

「バイドル……しっかり!」

ノーマがたまらずに声を上げた。

癒しようのない喉の渴き、全身を走る苦痛に発狂しそうになりながら、バイドルは懸命に堪える。しかし、苦痛のあまり勝手に跳ね上がる身体は、もはや自分では抑えることができない。地面を掻き篦り、握り締めた小石が粉々に碎かれる。

「ぎっ、ぎ……こ、殺せ、殺してくれえええ! あがああ!!」

「馬鹿野郎! 何が何でも耐えるんだ、耐えて、生きのびて、絶対にナプのところへ帰るんだ!!」

「ね、ねえチャンス、あちきが魔法使おうか、拘束の魔法でバイドルの動きを封じればいいんじゃない……!」

見かねたエキシイがチャンスに叫ぶ。しかしチャンスはバイドル

を押さえ込みながら首を振った。

「バイドルが暴れるのは苦痛を逃がす為でもある。く・・・魔法で完全に動きを封じたらそれこそ、気が狂っちまうかもしれないねえ。大丈夫だよ、俺たちは絶対こいつを抑える！」

バイドルの意志に関係なく飛び跳ねて暴れる巨体を、チャンスたちは総がかりで必死に押さえ込む。武器を持たない「闘い」に、サージとマーティも必死になってバイドルに組み付いた。

「堪えろよバイドル、薬が効くまで負けんじゃねえぞ！マーティ、サージ！そっちの腕エ絶対離すなよ！」

「頑張つて下さいバイドル、も、もう少しの辛抱ですから！」

「丸太が暴れてるみてえだぜ、気を抜いたら吹っ飛ばされちまう！俺、チビなんだから手加減してくれよ！」

何度も何度も、バイドルは喉を握りつぶす勢いで自分の首を締め上げる。そのたびに三人がその腕にすがりつき、無理やり引き離すことを繰り返した。また、痛みを堪えるバイドルにサージやマーティが捕まり、骨を砕かんばかりに締め上げられることもあった。それでも、三人は渾身の力を込めて、バイドルを押さえ続けた。

「ぎっ、い、ぐぐ・・・ナ、ナプ・・・ううがあ・・・あ・・・！」

息を潜めて見守るノーマが、静かに涙を拭っていた。
その隣で水袋を手に、固唾を呑むエキシィ。

風が吹き、辺りの木々を揺らす。
ざわめきが周囲にあふれ、そして静まる。

その繰り返しの中で、バイドルの呻き声だけが途切れることなく続いていた。

どれくらい、その状態が続いただろう。

しばらくして、バイドルの身体から力が抜け、呻き声が途切れた。

「バイドル!？」

押さえ込みながら、そつと声をかけるチャンス。

バイドルはその声に弾かれるように目を開けた。チャンスたちを振り切る勢いで素早く起き上がると、側にいたエキシイからいきなり水袋を奪い取った。呆氣に取られてきよんとするチャンスたちの前で、バイドルは喉を鳴らしながら、水を一気に飲み干してしまった。

水袋を手にくりとうなだれるバイドルは、やつれてしまった顔をゆっくりと上げ、エキシイを見つめた。

「・・・はあ、はあ・・・あ、ありがとう・・・生き返ったよ・・・」

一瞬目をしばたかせたエキシイは、バイドルの優しいその言葉に、にっこりと笑顔を返す。

「さすがねバイドル・・・チャンスが入れ込むだけあるわ!」

運命は、バイドルを繋ぎとめたのだ。

チャンスもようやく肩の力を抜いて地面にへたり込んだ。汗で額に張り付いた髪をかき上げ、明るい笑顔をバイドルに向ける。

「やれやれ・・・やっと薬が効いたみたいだな。毒師秘伝の解毒剤は、やっぱり効き目があったってわけだ。おまえは賭けに勝ったんだ・・・よかったな。」

にこやかなチャンスの隣で、ぼさぼさ頭になってしまったサージとマーティがうなずいた。三人とも衣服や鎧が乱れ、笑顔ではあるがふらふらだ。バイドルはすまなそうに軽く頭を下げ、水袋をじつと見つめる。

「賭けに勝った、か・・・」

「そうさ、勝ったんだ。エバがない今、おまえは本当に自由になったんだ。」

バイドルの顔が一瞬曇る。その横顔を見つめながら、チャンスは続けた。

「・・・おまえ、エバの生い立ちを知ってたんだな。でなきゃ、そこまでエバに肩入れするわけがない。」

チャンスの目を見ることなく、バイドルは静かにうなずいていた。そしてエバが悪魔の酒に冒されていることにも、気がついていたという。同じ境遇に立っていた者として同情してはいたが、エバがバータ・ラカッティや傀儡草の栽培に力を入れ始めた辺りから、少し

ずつエバに対する気持ちが変わっていったという。

「オーネウスとマハンダがおまえたちに倒され、俺はやっと決心することができた。おまえたちを罠に嵌める口実で、スリス教会に火を放ったのもそのためだ・・・バータ・ラカッティと傀儡草が失われれば、エバ様もあきらめて普通の商人に戻ってくださると・・・」

哀しげな顔のバイドルを、チャンスは黙って見ていた。

狂人のごときエバの叫び声が胸の中で蘇る・・・信じたかった、その言葉を放った時のエバと、目の前でうつむくバイドルが、重な
って見えるような気がした。

「ナプは・・・俺を許してくれるだろうか。」

ぼつりと、バイドルがつぶやいた。するとそれまで静かにしていたサージが、腕組みをしたまま悪戯っぽく笑った。

「許してくれなかったら、許してもらえるまで粘りやいいんだよ！簡単なこった。素直にゴメンナサイって頭さげときゃいいの！」

その言葉の合間に、エキシイがバイドルへ戦斧を手渡す。

「ごめん、刻印を叩き壊した時にちょっと刃がこぼれちゃったけど、許して。大事なものなんだから、ちゃんと持って帰らなきゃナプさんに怒られちゃうよ。」

「あ・・・ありがとう・・・」

バイドルはエキシイから戦斧を受け取ると、その刃に刻まれたたくさんの傷に目をやった。悪魔の酒に冒されて奴隷に成り下がり、数々の暴挙を繰り返したことが、胸の中にどろどろと沸きあがる。しかし一方、かつて勇者と呼ばれていた時の闘いのすべて、そしてナプたちと共に旅をしていた充実感と喜びもまた、鮮やかに脳裏に蘇る。

バイドルは、清々しい顔をしてチャンスたち一人一人を見つめた。

「・・・本当にありがとう、俺は・・・ブーベルデルへ、ナプのところへ帰るよ。」

チャンスは、差し出されたバイドルの大きな手を、しっかりと握り締めてうなずいた。

この強く暖かい手が、再びナプの元へ差し出されるその時を、胸に思い描きながら。

「よっしゃ！俺たちもブーベルデルへ戻ろうぜ！ナプへの報告もあるし、報酬も貰わねえといけねえし、何より・・・」

「そう！あの美味しい料理っ！」

「違う、ワイン！ナロフワイン！」

「ワイズさんは元気かしら。」

「教会へ行きたいんですけど。」

バイドルの穏やかな微笑みが見守る中、賑やかなチャンスたちの声が、風に乗ってスリスの街を通り過ぎようとしていた。

すべてのはじまりへ

「あー・・・すげえいい天気。」

活気あふれる港町ブルーベルデールは、今日も快晴だ。チャンスは大きなあくびをしながら、広場から臨む真っ青な海を眩しそうに見つめていた。

「ナプさん、喜んでくれてよかったわね。」

チャンスの隣で、ノーマが微笑んでいた。チャンスは伸びをしながらノーマを見つめ、同じように微笑んだ。

「俺たちは、ナプとバイドルの運命の輪から蛇を引き剥がした。後は放つといたって上手く回るさ、いずれ夫婦になって仲良く暮らしていくだろうぜ。」

「私も同じことを考えてたわ。きっとお似合いの夫婦になれるってね。」

「ああ、きつとな。」

・・・

及び腰になるバイドルを押しながら、ナプの店の前にやってきたチャンスたち。らしくもなく途惑っているバイドルを、無理やり戸口に押しやった。

そしてバイドルがおずおずと扉から顔を出した途端、ナプは驚きと喜びに大きく目を見張った。夢にまで見た瞬間が、とうとうこの日、訪れたのだから。厨房から鍋を引っくり返ししながら駆け出てきたナプは、バイドルの前に立った。

しばらく言葉もなく、ナプとバイドルは見つめ合っていた。共に歩んだ時間を思い出し、また離れて過ごした時間を取り戻すかのよう。

長い沈黙の後、バイドルはそっとナプの手を取って、静かにつぶやく。

「すまなかった、ナプ・・・随分と待たせたな。」

ナプは、懐かしいその声を聞いて一瞬、目に涙を浮かべかけた。しかし、涙をそのまま落とすことなく、気丈に一言、こう返した。

「待たせすぎさバイドル・・・待ちくたびれちゃったよ。」

抱き合う事すらせず、ただ手を取り合って握り締めるだけの二人には、それ以上の言葉は必要なかった。心からの喜びを顔いっぱい惜しげもなく浮かべて、二人はチャンスたちに振り返る。

ナプが大声で叫んだ。

「ありがとう、ありがとうチャンス、みんな！今夜はあたしがびきりのご馳走を振舞うからね！！」

「やったあ、あのタルトパイ、また作ってくれるわよね！」

エキシイが飛び上がって喜ぶと、ナプは大きくうなずいて笑った。バイドルもまた、その隣で満面の笑みを浮かべていた。

・・・

「一晩中大騒ぎだったからな・・・サージは毎度のことだけど、エキシイも珍しくはしゃいでたしな。二人とも飲みすぎて、まだ起き

てこねえしさ。」

「マーティは朝早くから教会へ行っちゃったし・・・マーティも結構飲んでたと思ったけど、ああ見えて本当は酒豪なのかもしれないわね。」

二人は笑い転げる。静かな海、喧騒を遠く響かせる港、そして暖かな陽射しが、そっと二人を見守っている。

今まで、二人きりになったことがなかったチャンスとノーマは、どちらともなく、いつの間にか見つめ合っていた。

「・・・ノーマ。」

チャンスが、静かにつぶやいた。

「な、何？」

胸が破れそうなほどに高鳴るのを押さえ、ノーマがつぶやく。

「あそこの植え込み。」

「えっ・・・」

ノーマがちらりと振り返ると、遠くの植え込みから何かが動いたような気配がした。

「ま、まさか・・・」

「・・・そうみたいだな。」

チャンスは苦笑いを浮かべるが、またすぐに表情を戻してノーマを見つめる。ときりとするノーマ。再び胸が躍り始めるのが分かる。

「あのさ、ノーマ。」

「な、何？」

「俺だって、何も知らねえわけじゃねえんだぜ。」

「……え……」

ノーマは熱くなる頬をそのままに、チャンスの目をじっと見た。

「俺は、死ぬまで冒険をやめる気はねえ。」

「……ええ。」

「それでよけりゃ一生ついて来い。俺が絶対に守ってやるからさ。」

「……チャンス……!」

長く待ち望んでいた瞬間が、ノーマにも訪れたのか。感激と嬉しさのあまり、思わず泣き出しそうになるノーマ。

しかし。

「当たり前だぜ、仲間を守るのは当然だからな。ノーマはいつも俺の無茶を心配してるみてえだけど、俺はそう簡単にくたばりゃしねえさ。」

涙が途端に引つ込む。

ノーマはがつくりと肩を落とし、遠くの植え込みをもう一度ちらりと見た。すると、やはりそこから見慣れた三人の姿が現れる。

「ほーらな、だから言つたろ、無駄だってさ。チャンスはそういうの全ッ然眼中にないんだからさ。」

肩をすくめながら、二日酔いで痛む頭を撫でているサージ。その

隣で、エキシイが腕組みをしてチャンスを睨んでいる。

「ほんつとにダメねえ・・・ちよつとチャンス、あんたもうちよつと女心を勉強しなさいよ！」

「分かっているようで、分かっていないのですね。まあ、それもチャンスらしいですけど・・・」

チャンスは、現れたサージたちを見て、にやりと笑った。

「ばーか。おまえらが見てるところで、この俺がおいそれと口を滑らすわけがねえだろ！」

チャンスは何もかもお見通しといわんばかりの笑顔を浮かべ、立ち上がった。ノーマため息をつきながら立ち上がり、いつもの笑顔でチャンスに呼びかける。

「ねえチャンス、これからどうするの？」

「もう一度デュファ大陸を探索しよう。結局冒険らしい冒険はまだ全然してねえし、今度はゆっくりお宝探しといこうぜ！」

チャンスの言葉に、サージが指を鳴らしてうなずいた。

「いいねえ、豊穡の女神のお宝！腕になるぜ！」

「無闇な遺跡荒らしはダメですからね。」

「いいじゃないマーティ、堅いこと言わないでよ。そういうお堅いところがなければ、あちきの男にやってもらってもいいんだけどね・・・」

悪戯っぽく微笑むエキシイに、マーティは赤くなりながら顔を背ける。

「こ、こればかりは直せません！神官としての立場がありますから・・・」

「そうそう、おエライ神官様は、女に対する免疫がねえからさ。あんまりからかうなって、面白すぎるだろ。」

「なっ、何ですって！サージッ！！」

マーティが真っ赤な顔のまま、サージに向けて槍を振りかざした。

・・・

堕ちた勇者を静かなる勝者へと導いたチャンスたちは、再び新たな冒険へと旅立つ。危険と隣り合わせの胸躍る世界へ飛び込むその姿は、きつと行く先々で、人々の胸に焼き付けられるだろう。

命知らずな冒険者たちを待ち受ける、次なる物語は、またの機会に・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4219a/>

チャンス！

2010年10月10日20時38分発行